

日本昭和九年（一九三四年）初版日文油印本  
中華民國八十四年（一九九五）再版中日文正本

楨  
樹  
の  
蔭

昭華題



朴子公創校百年紀念會印行

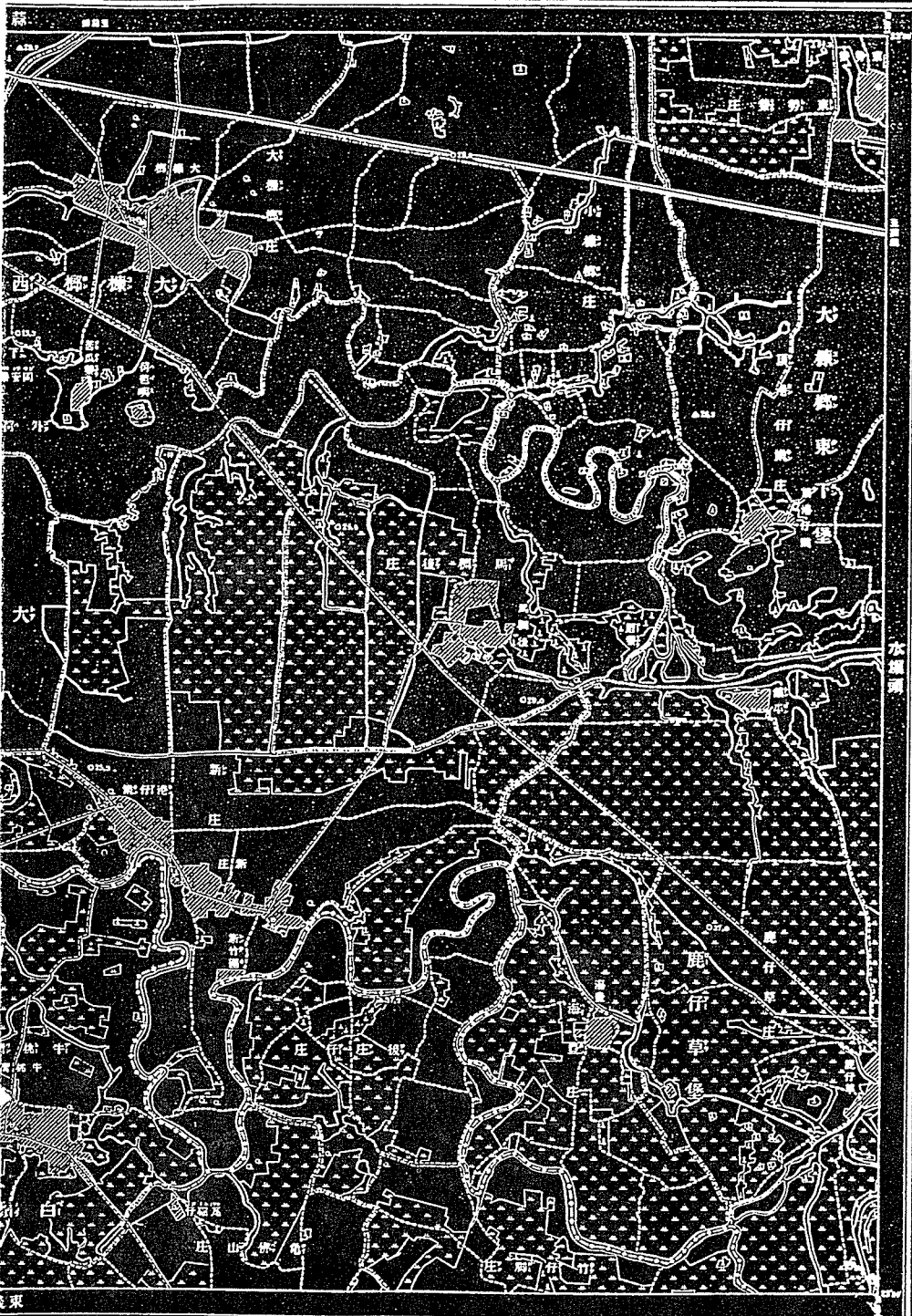


流傳事蹟記分明掌故  
欽談故里情朴  
街懷史曆罪一  
水為名

乙亥新春  
昭華齋  
崇實



子標



標子

標子



大標子 大標子 大標子  
 大標子 大標子 大標子  
 大標子 大標子 大標子  
 大標子 大標子 大標子

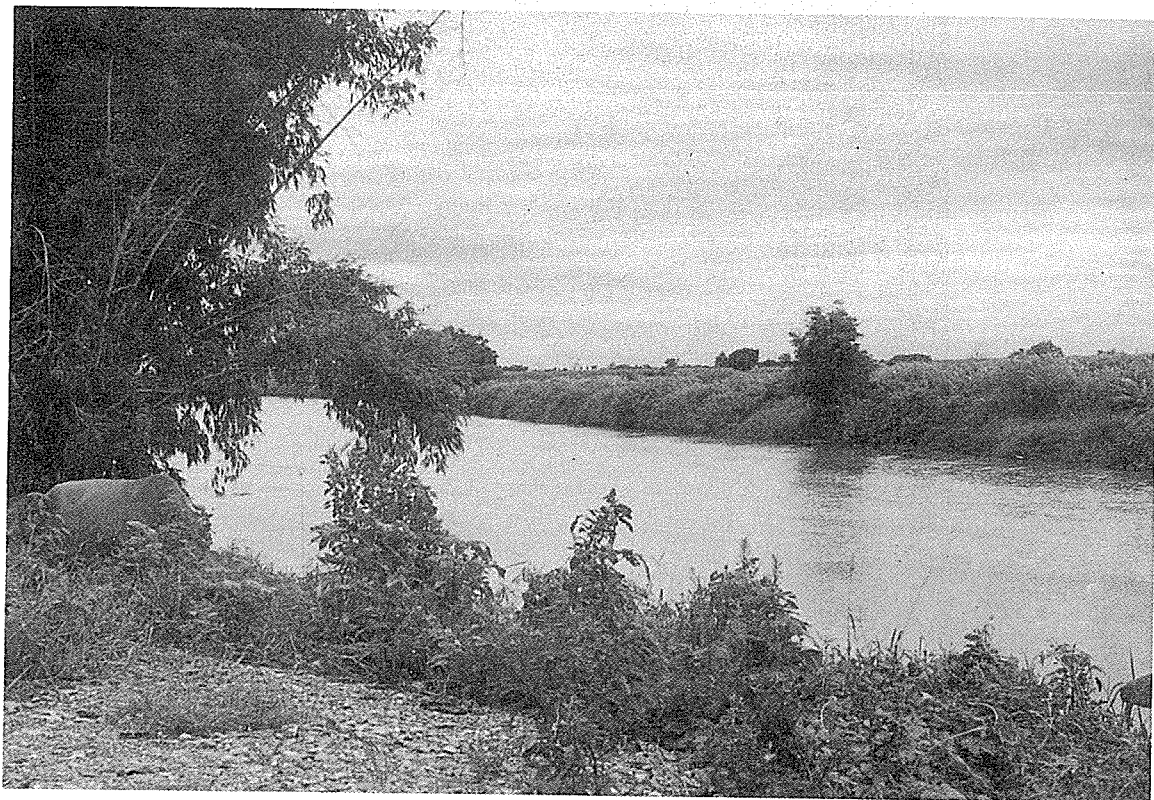
明治三十七年圖



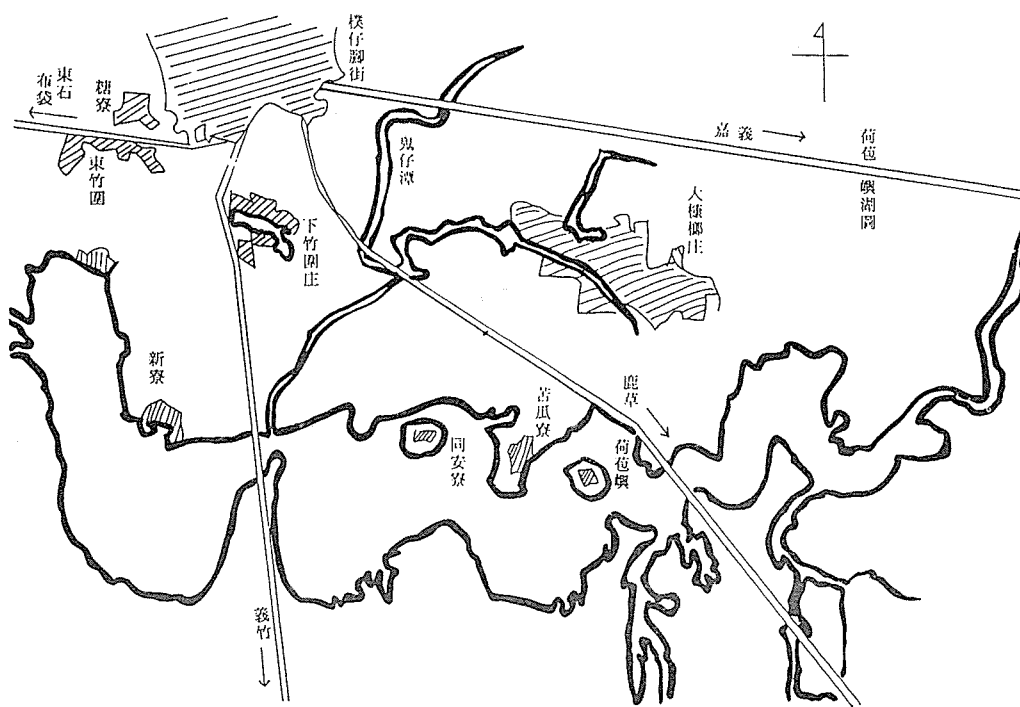
國防廳測土院編

大日本國地質院測土院編  
 出版者 臺灣日日新報社  
 大正四年八月三十日  
 代售者 安野人 山田大

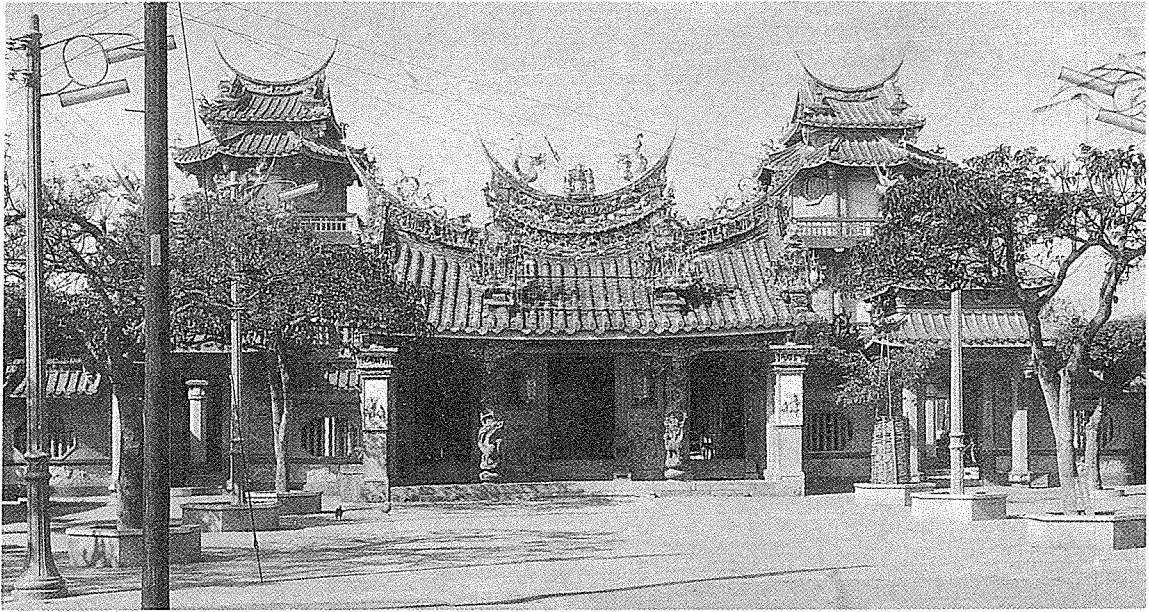




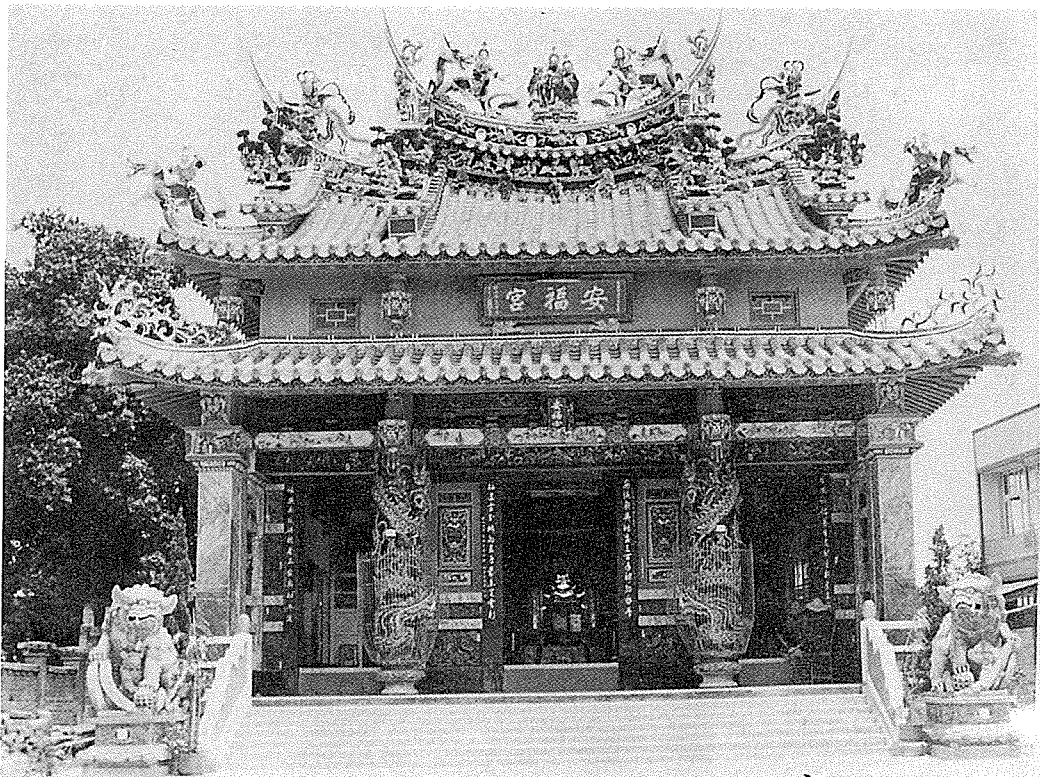
今の朴子溪（牛稠溪）



昔の荷苞嶼略圖



發祥地媽祖廟と樸樹（兩側の植木）

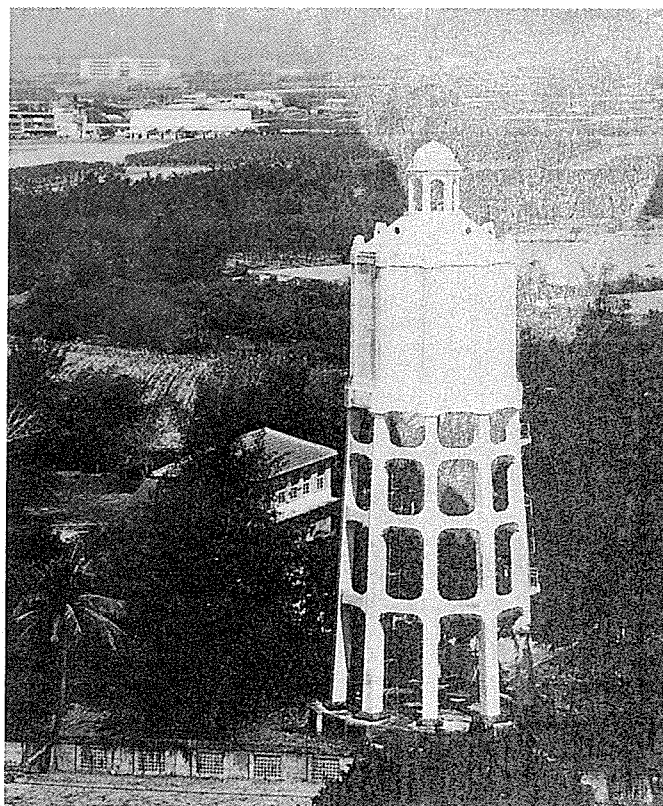


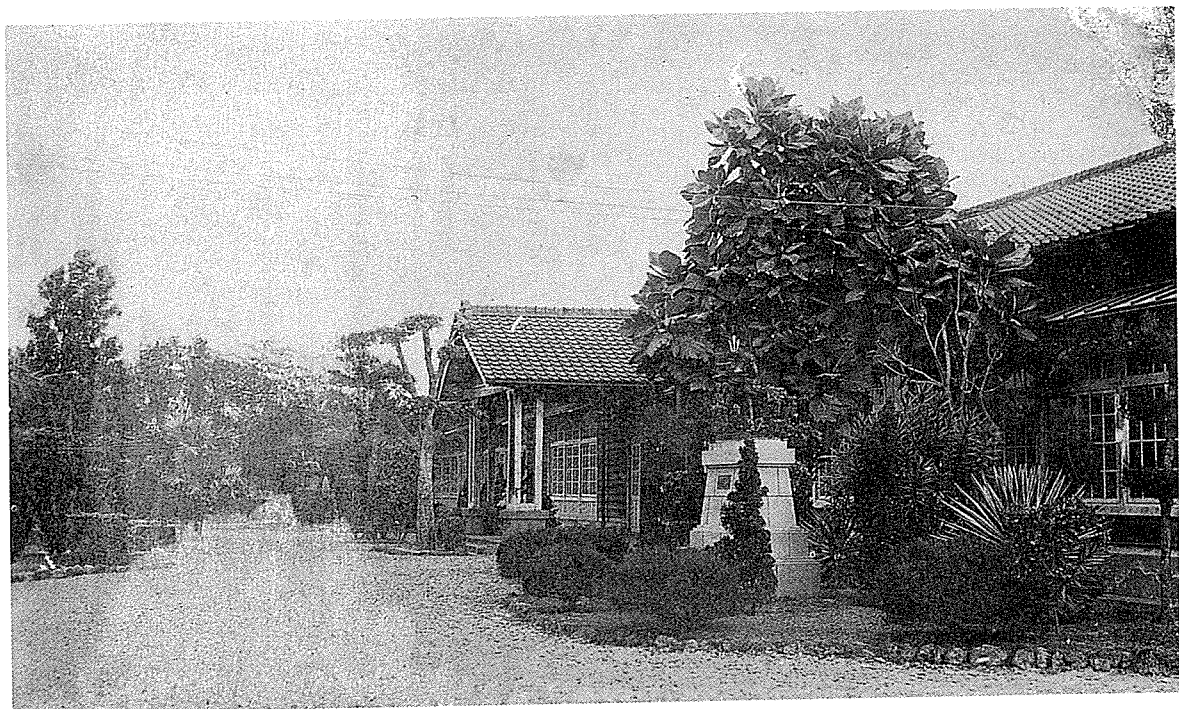
開拓處女地安溪厝の廟



王得祿將軍遺像

朴子象徵の水塔

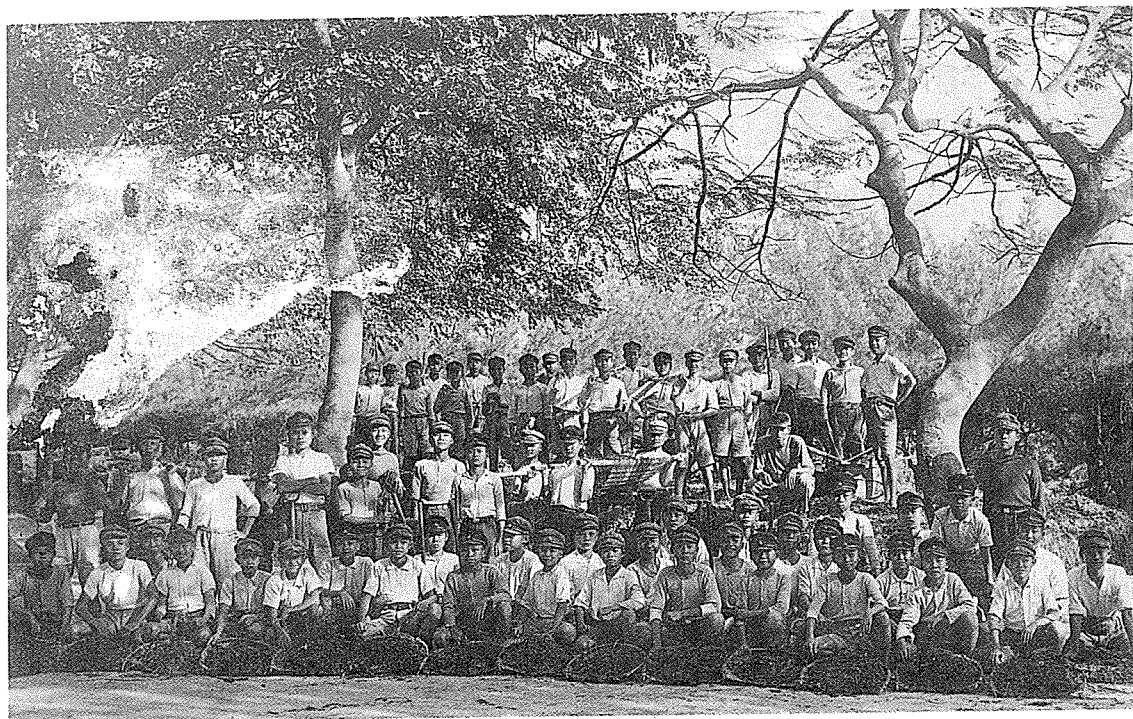




思ひ出の校門 (1937年)



西尾校長と先生達 (1943年)



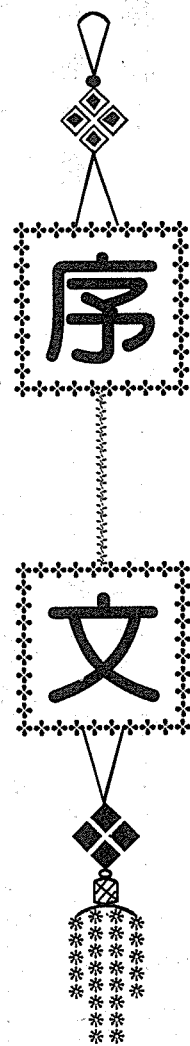
高等科生の農業實習堆肥 (1943年)



初等科女生の修學旅行 北投温泉 (1942年)

# 再版總目錄

一、序	文	二
二、《樸樹の蔭》原文（昭和九年油印日文版）		七
三、再版補充中日本		一三九
（一）朴子公の始り		一四一
（二）日本時代の歴代校長		一四四
（三）樸仔脚事件始末抄録		一五一
（四）媽祖顯化		一五五
（五）樸街地號		一五九
（六）王爺座談		二〇五
（七）鼠疫傳染		二〇九
（八）虞溪遷道		二一五
（九）桂潭鬼話		二一九
（十）樸仔脚事件		二二五
（十一）王得祿		二三五



恭祝母校百壽大慶特將民國廿三年（昭和九年）由師生共同編纂鄉土史《樸樹の蔭》一書以精裝本再版一千冊為紀念外，藉資喚起校友對鄉土文物遺跡暨掌故中可窺探先民開拓痕跡與奮鬥史實，鑑及極具教育性及啓發性作用若閱覽之餘可引燃愛鄉愛國觀念之火種。

此書維持日本原文外並將重要部分採錄中文可供青年學子一目瞭然，尤其一提者特搜羅難得見第一手史料，則：(一)創校初期沿革；(二)歷代日籍校長履歷；(三)樸仔腳事件始末報告內容等。

本書發行經費新台幣拾貳萬元由有志一同捐資，配天宮負責貳萬元外其餘均壹萬元，特誌芳名以昭徵信。

財團法人配天宮

財團法人高明寺

魚仔市天公壇

朴子市農會

黃錫恩診所

華生印刷社

本科十三屆畢業生黃故啓南醫師

遺孀蔡玉霞女史

本科廿四屆畢業生陳榜列藥劑師

本科廿九屆畢業生黃純垣醫師

本科科十五屆畢業生陳炳淵主任

高等科十五屆畢業生涂媽力秘書

等諸位表示致敬！

### 朴子公創校百年紀念會

印行《樸樹の蔭》發起人

初等科卅八屆 畢業生 邱奕松 敬具  
高等科廿一屆

歲次乙亥八十四年夏季

黃大元 丁未年十一月廿五日

黃大元 丁未年十一月廿五日

黃大元 丁未年十一月廿五日

黃大元 丁未年十一月廿五日

黃大元 丁未年十一月廿五日

黃大元 丁未年十一月廿五日

黃大元 丁未年十一月廿五日

黃大元 丁未年十一月廿五日

黃大元 丁未年十一月廿五日

黃大元 丁未年十一月廿五日

黃大元 丁未年十一月廿五日

黃大元 丁未年十一月廿五日

黃大元 丁未年十一月廿五日

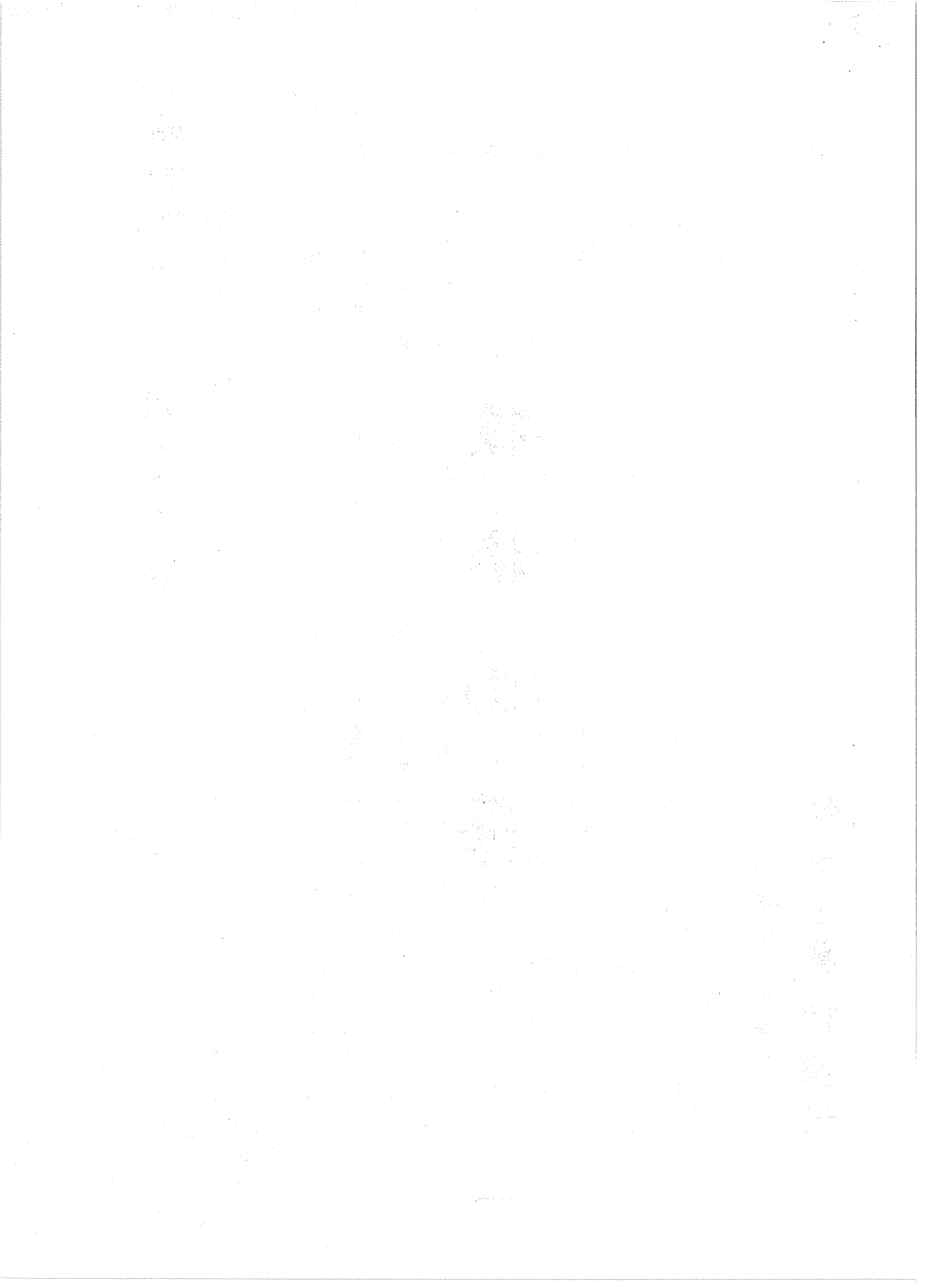
黃大元 丁未年十一月廿五日

昭和九年

樸樹の蔭

(原冊油印本)

朴子公學校發行



## はしがき

現在吾が朴子公學校の在學生又は卒業生の大多數は朴子街を有する者である。

それが爲めには日常の教授を一層郷土化して在學中に於て充分郷土を理解させる必要があるといふ考へから先年全職員が分担して郷土教育資料の調査をなし昨年度からは更にその資料を如何にして各教科目におり込んで行くかについてその具体案を研究調査中である。

尚高學年兒童及卒業生の爲めに今郷土を材料とした讀物を書いたのであるが之れに依つて多少でも郷土を知る助けともなり郷土に關心をもつて研究しようとする導火線ともならば幸である。

本讀物は唐突の間に作ったもので文の不充分であるし材料も比較的興味のあるものから撰んだので連絡もなければ統一もない随つて郷土讀本としては甚だ物足りなさを感じるが追追増補訂正して行くつもりである。

昭和九年七月

# 【目次】

一	配天宮の由來……………	一〇
二	地名の調べ方……………	一二
三	王爺座談會……………	一五
四	朴子のペスト……………	二一
五	牛稠溪の変遷……………	二五
六	幽靈のいたづら……………	二九
七	茶屋のをばさんの話……………	三五
八	交 通……………	四〇
九	伸び行く農業……………	四二
一〇	先生の話「埃について」……………	四七

一	活けるミイラ	五三
一二	樸仔脚の変	五六
一三	街協議會	六一
一四	小泉校長遭難記	六八
一五	王得祿	八五

【附 録】

一	郷土の青年に	九三
二	郷土の調べ方	九五
三	郷土史年表	一二六

## 一 配天宮の由來

今から百七十八十年前、東石庄の半月に林馬といふ人が住んでゐた。至つて媽祖様を信じる心が厚く、此の十數年間、年に一度は必ず遠い鹿港までお詣りをしてゐた。

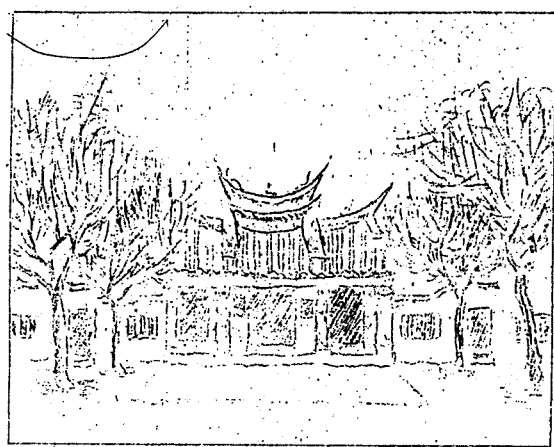
ところが、だんだん年をとるにつれて鹿港までの參詣はなかなか容易な事でないので、何とかして鹿港まで行かずに參詣の出来る方法はないかと、日夜考へた末、どうしても媽祖様を永久に自分の家にお迎へするより外に方法はないと決心した。けれども自分の家へお迎へすることも亦決して容易なことでない。或る年、いつもの通りに參詣に出かけた。

鹿港に着くとすぐねんごろにお詣りをさして、その晩は廟に泊めてもらつた。

そしてその晩はまんじりともせず夜明けを待った。やがて東の空が白んで来る頃、林は廟守の許可をもらひ直ぐに湄州嶼から迎へて來つた、媽祖様の神像を一座自分の籠に入れて急いで廟から出發した。

その歸途、牛稠溪の南岸に繁つてゐる樸仔樹の下の茶屋に腰かけて休んだ。丁度そこに來合せた附近の人人から依頼されるままに、二三日そこに滞在することにした。

忽ちその話が人人に言ひ傳へられ、殊に病人には靈驗があると言ふので參詣祈願するものが夜となく晝となくつづいた。



いよいよ約束の三日もたつたので、林馬は自分の家に迎へて歸らうと思つて籠に入れようとしたが、どうしたことが輕かつたはずの神像が動かない。そこで早速神意を伺つたところが、「永久に此の地に鎮座する」とのお告げであつた。林馬は非常に淋しかつたけれども、神意に反くことは出來ないので、そのまま歸る外はなかつた。

それに反して、地方民は大へん喜んで、早速そこに小さな祠を造つて安置し、傍の樸仔樹に因んで樸樹宮と名づけた。

その後、病者やその他に靈驗が著しいので、地方民の尊崇の的となつて、遂に大きな廟に改築された。

更にその後太保庄の王得祿氏が清の太子小保伯爵海軍提督に任ぜられた時、配天宮と大書した額を奉納したので、それから廟名を配天宮と改めることになつた更に明治四十四年總督府の認可を得て、廣く寄附金を募集した結果、二萬數千円といふたくさんな費用をもつて工事が始められ、大正四年一月落成して、今日のやうな壯麗な廟になつたのである。

毎年旧曆の三月二十二、三日には盛大な祭典が行はれる。

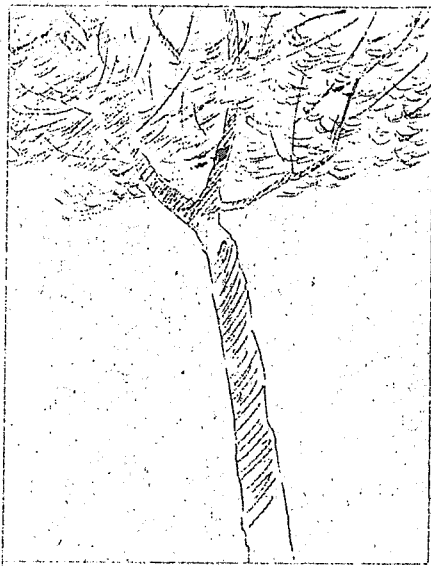
## 二 地名の調べ方

先づ私どもの住んでゐる朴子について考へて見ませう。此の朴子はもと樸仔腳と言つてゐたのを、大正九年十月の制度改正と全時に朴子と改められたのです。朴子といふ名は言ふまへもなく、樸仔腳から生れた名であるから樸仔腳といふ名について調べる事にしませう。

二 地名の調べ方

今から百七、八十年前の此の地方は今日のやうに多くの人が集つてゐたのではなく、僅かにあちこちに人家が散在してゐたに過ぎなかつたのです。

さきに「配天宮の由來」に於て既に述べたやうに、その頃、牛稠溪の南岸に一本の樸仔樹（ほほの木）があつて、そこに媽祖様が安置される事になつてから、日に日に參詣者が増して来るにつれて、附近に飲食店等も出來、他の地方からもだんだん移住するやうになつて遂に今日のやうな大きな部落が出來て、何時の間にか誰れ言ふとなく、樸仔樹の下に



出來たこの部落を樸仔脚と呼ぶやうになつたのです。

このやうに考へて見れば、昔から街民が心から媽祖様を敬つてゐる所以も自らうなづけることと思ひます。郷土の中だけでも、土地の名は

非常に多い。一軒の家にも、古くから言ひ傳へられてゐる名があつたり、又新しく出来た家に對しても誰れかがその家の特徴などに因んだ適當な名を見つけて、呼び始めるものです。

今の人はあまり使はないやうな名を老人の口からきく事もあるでせう、さういふ場合には、すぐそれ等の名を残さず書きとつておいて、調べて行つたらとても面白い事であらうと思ひます。

例へば朴子の溪仔底について調べて見てもどうして此のやうな名が生れるやうになつたのかといふことがわかつて来るし、又その名について考へて行く中に過ぎ去つた事をいろいろ推究、想像することも出来ます。石に刻んである記録や紙に書いた記録は年年すたれて行きます。永く歴史を物語るものはただ地名だけでせう。しかし、此の地名とて、街の交通、産業の変遷に依つて、次第に忘れられて行くものも、決して少いとは言へません。

以上、述べた事に依つて郷土を研究する上に地名の研究が如何に大切であるかが充分に納得されたことと思ひます。

どんなに小さい地名でも、今の中に残さず集めてそれについて年寄りやお父さんからきいたり、古い記録によつたりして充分に調べておきませう。

### 三 王爺座談會

木枯らしの吹きすさぶ或寒い晩のことであつた。人家にはもう燈火の影もなく、只いさよひの月が獨り淋しく下界を照らしてゐた。

此の時學校の前の王爺廟で地方守護の神様の座談會が開かれてゐた。當廟の主人公池王爺を始めとし太子爺，何將軍，虎爺公，雷將軍，金王，林王，中軍爺，福德爺，城隍爺，有應公等等凡そ街に廟樓を構へてゐる大小の神神様は皆そこへ集つてゐる。

四方山の話をしたり，冗談をいつたり，笑つたりして暫く大へん賑やかであつた。やがて主催者たる當廟の池王爺が口をお開きになつた。

「時に諸君！今夜お寒いのに拘はらずお集りを願つたのは外ではない。

近頃街では學校を出た若い者がだんだん勢を得て來て『やれ廟はこはさねばならないとか、やれ迷信は打破しなければならぬ』とか……』

と、言葉を切つて先づ一座を見廻してから更に

「そのことについて御相談いたしたいのだが、何とかしてこれ等の人にそんな亂暴をさせないやうない工夫はないものかね。之れはお互の名譽にかかはることだし、若しもそんなことをほんとにやられては我我の生活が第一台なしになる。そのつもりで一つ善後策を講じたいと思ひます」。

と、先づ挨拶旁旁かう申されるのであつた。その時側に座つてゐた下灰 碓保安宮の邢王様が

「それは兄さんわけはありませんよ。童乩を利用するんですね。童乩に『お前達は近頃わし等の廟をこはすと言ひ出したが若しほんとにそんなことをしたら罰があたるぞ』と、言はせるんですね。そして若者が大きな事を言つても頭の古い親達が承知しないから我我の

生活は安定するわけですよ」

「それは大へんよい考へぢやが、併し近頃の童乩もなかなか當にならぬものでなう。嘘八百を並べるから街民も信用しないやうになつたのぢや。だから尚更困るわけさ」

と、おひげの長い年寄の林王が口を出された。

その時隅の方に坐つてゐた背の小さい金槌をもつた有應公がヒョッコリ頭を出して

「何、そんなことはたやすい事ですよ」

と、如何にも自信ありげに言はれた。これを聞いた雷將軍。

「何でもない？何故そんな事が言へるんだ、目下我我の重大問題だ。

どうしてそんなことが言へるんだ」

と、反問された。すると。

「わけはないですよ、先づかうやつたらどうですか、街の人はあまり衛生觀念がないからこの街一帯に悪い病氣を持つて來るんですね。チフスのやうな……さうすると、街全体が此の惡疫の爲にな

やまされる、此の時さつき保安宮の王爺さんが言つたやうに童乩を使つてかういふことを言はせるんですね。

『お前達は近頃王爺廟をこはさうとするから罰が當つたんだ』

と、さうすれば皆こはがつて廟をこはすのを止めるに違ひない。のみならずそれ以上我我の靈驗ある所を信ずるに違ひありません。さうすれば我我の生活は決して困らないと思ひます」

と有應公は如何にも條理正しくその方法を説明した。皆もなるほどなるほどと感心した。その時靜かに此の話をきいてゐた上帝廟のおひげの長い福德爺が

「それはなるほどいい考へのやうぢやが：：：しかしその悪い病氣を街へ流すことは我我に出来ぬことだと思ふ。又我我の職務からいつてもそんな残酷なことはやれるものではない。そんなことをやつたら人民から尊敬される所かかへつてうらまれる。とにかく近頃は街も教育がよく行はれてゐるから人民の頭もよほど進んでゐるやうぢや、我我も生きてゐた間は此の街の爲に盡したし、死んでからも街

民達が我我の功をたたへてこんな立派な廟まで立ててくれたのだからあまり不平を言はないやうにしたらどうぢや、我我も昔こそは街の爲めに死んでも守つてゐたが、今ではもうその用はない。だからそろそろ天上の大神の所にひき上げよう。そして年年我我の爲に使ふ莫大な金を教育の爲なり、街の衛生や産業の爲なりに使つて貰つたらどうぢや。そしたら我我も安心して天上へ行かれるし、街もきつと繁榮するに違ひない。一舉兩得とはこんなことを言ふのだらう。どうぢや……皆様方わしの説に賛成してはくれまいか。」

と、醇醇とお説きになつてから長いおひげをなでながら一同を見廻した。

「賛成しますとも、大賛成です」

と言つて皆も老先輩の説に心から感心してゐるやうでした。

外には木枯らしが尚戸をたたいてあばれ廻つてゐる。内では

「アハハツ……：：：：今晚は誠に愉快ぢやつた。」

といふ賑やかな聲がもれて来る。

※

※

※

因に朴子街管内には左のやうに夥しい廟がある。これ等の祭神に對し  
 年年お祭に使ふお金は實に莫大な額に上つてゐるさうである。

● 朴子街朴子之部

廟名	福德廟	配天宮	保安宮	中軍營	邢王廟	巡天宮
所在	第一保	第二保	第五保	第九保	第六保	第九保
廟名	新福德宮	龍樹亭	有應公廟	安福宮	正心堂	上帝廟
所在	第三保	第十保	第一、九、十保	第一保	第七保	第一保

● 朴子街大榿榔之部

媽祖廟・福德祠・龍安宮・有應公廟

● 其他下竹園・新寮・苦瓜寮・蘆菜埔・竹園仔・頂厝仔・双溪口・炭前・炭後・鴨母寮・竹仔脚等を併せれば凡そ五十以上になるだらう。

四 朴子のペスト

今の朴子街は道路といひ、下水道といひ、交通衛生の説備がよく整つて大へん住みよい所になつてゐるが今から十七八年前即ち大正の初め頃、まだ樸子脚と言はれてゐた頃は非常な勢でペストがはやつて、それはそれは恐ろしい所であつた。

當時よその人たちは樸仔脚といふ名を聞いてさへ恐ろしかつたとふことである。

此の病氣は初めから此の地方にあつたのではなく、其の頃對岸支那と

の貿易が盛んであつた東石港から輸入された貨物と一しよに病原菌が傳はつて來たもので明治三十三年に三名の患者を出したのが始まりで、大正四年二名の患者を出したのを最後として、全く撲滅するまで、十余年の殆んど毎年のやうに流行を見、累計一千余名の罹病者を出したので、ペストと言へば朴子を思ひ、朴子と言へばすぐペストを思ひ出す程、朴子はペストで有名になつた。

どんな病氣でもよい病氣はないが、ペスト程いやな病氣はあるまい。ペスト菌は鼠によく傳染する。だからペストに罹つた鼠は到る所に死んでゐた。そして空氣中までそのペスト菌が散るといふから消毒するにも豫防をするにも困難であるのと、死亡率が高いので此の病氣に罹つたら最後、先づ死ぬものと思はなければならぬ。

此のやうな惡疫に十數年間も襲はれた此の地方の慘狀は想像するだけでも恐ろしい。親兄弟でないとしても平素同じ郷土で苦樂を共にして來た人人が隔離舎に運ばれるのを見たり、それ等の人の死亡の知らせを耳にしたり、鄰から病菌鼠が出ると、消毒や防遏の爲に家財は焼かれ、家

四 朴子のペスト

屋さへとり壊されるものがあり、其の上日日幾多の生靈は奮はれ、他の地方との交通は遮断されて逃げ出すことさへ出来ない状態は聞くだに涙の種である。

しかも之れに倒れた人人の中には前途有爲の人も少くなかつたであらう。朴子街がペストの爲に受けた有形無形の損害は實に測り知ることの出来ない程大きなものであつた。それと共に大正五年以來此の不幸から全く救はれるに至つた朴子街民の喜びはどんなであつたであらう。悲しみ、心配が大きければ大きい程、その喜びも亦大きいものであつたに違ひない。

此の地方に住んでゐる私どもは過去に於ける悲しい歴史を思ふ毎に現在の幸福を感謝せねばならない。又一日も早く地方民を此の不幸から救ひ病魔を撲滅しようとその身の危険をも顧みず無智な街民を説き、鼠族の發生を防ぎ、患者の隔離治療に、健康調査に殆んど寢食を忘れて防遏に努められた醫官や警察官其の他の防疫關係當局の苦心も忘れてはならぬ。

今の臺北醫院長の倉岡博士や嘉義の勝田醫院長は永らく當地方の防疫官として盡された恩人である。

※ ※ ※

尚左に朴子街に於ける各年のペスト患者数を示す

計 一一二二人	明治三十三年	三人	明治四十一年	一四二人
	明治三十四年	一八三人	明治四十二年	八人
	明治三十六年	七五人	明治四十四年	一六人
	明治三十七年	一九二人	大正元年	二一人
	明治三十九年	四一七人	大正三年	五二人
	明治四十年	一一一人	大正四年	二人

## 五 牛稠溪の変遷

我が郷土唯一の川である牛稠溪に今こそ平凡に流れてゐるが、その昔は随分面白い歴史をもつてゐるのである。

ずっと以前の牛稠溪は今のやうな流水路ではなく、配天宮の後を流れて頂灰礫の巡天宮の後を通り、蘆菜埔を横切つて、東石の港口に流れ込んでゐたのである。

今の配天宮の後に残つてゐる溪仔底は即ち往時の川底であつたわけで、こちらの川岸には街のかたと崇めてゐる配天宮媽祖廟があり、川向ふは内厝であつて、そこには内厝庄民の尊敬の的である龍樹亭の観音廟があつたのである。

川幅も今こそかなり廣くなつてゐるが、昔は今の半分にも足りない極く小さな川であつた。

面白い歴史といふのはこれから始まる。

毎年夏の雨季になると、きまつたやうに洪水が出て岸をけづつた。

ところか面白いことにはその崩れ方が、今年は南の岸、次の年は北の岸といふ風に兩岸は一年交代に少しづつ崩れて行つた。南の岸が崩れれば北の岸が浮き上る、向ふの岸が崩れればこちらの岸が浮び上る。このやうに川岸一帯は美田が川底となり、川底が美田に変わるといふ有様であつた。

或る年の夏、大雨が數日降りつづいた爲め、又例年の通り洪水が出て、川岸一帯は一面の泥の海と化した。

こんな水だつたら又大へん崩れるに違ひない。併し今年は向ふ岸だと心の中では、不幸中の幸だと喜んでゐた。

さて洪水は一晝夜でひいたが、不思議不思議、今年は北岸の筈なのに、どうしたわけか、やはりこちらの岸が崩れた。それを見た街民たちは大へん驚いたけれども、自然の力には抗する事も出来ないで、只來年こそ浮き上つてくれるやうにと心で祈るより外はなかつた。

ところが、どうしたことか、さうした街民の祈願のかひもなく、翌年も亦、その次の年も、やつぱり南の岸が崩れた。川は樸仔脚街を吞まう

とでもしてゐるかのやうに四年つづけてこちらの岸ばかりが崩れて行つた。五年目には南岸の田畑は盡く奪ひ去られて、早や廟のすぐ後迄迫つて來た。

此の有様であつたら、次の年は街民にとつて何よりも大事な廟まで奪はれ、ここ二三年で永年住み馴れたこの樸仔脚も溪底となつてしまふ。

郷土を飾つてゐた牛稠溪も今は街民にとつては全く魔の川であつた。もうこのままではゐられない。どこかへ街をうつさねばならぬといふ議が起つて中にはそろそろ避難の準備にとりかかるものさへあつた。

ところが何はさておいても、街民として先づ第一にやらねばならぬのは吾等の媽祖様を安全な地へおうつしすることであると眾議が一決した。當時は廟らしいものは川向ふの觀音廟とこちらの配天宮の二つしかなかつたので、安全な地と云へば當然觀音廟におうつしするより外はなかつた。

いよいよおうつしする日がやつて來た。街民は一人残らず集り、さて神像を御輿におうつししようとしたが不思議なことには、輕う筈の神像

が今は何人の力をもつてしても、おうつしすることが出来ない。これは  
てつきり何かの暗示に違ひないと思つて、早速神意を伺つて見ると、案  
に違はず。

「うつすには及ばない。あくまでここにゐて街を守護する」とのあり  
がたいお告げであつた。

けれども既に廟のすぐ後まで奪はれてゐるので、如何に信心深い街民  
たちも、此の時ばかり半信半疑であつた。

さていよいよ春は名残りなく過ぎて雨の多い夏が、又やつて來た。そ  
して十數日も大雨が降りつづいた。いよいよあの魔の川があばれ出すの  
だと言つて川岸に近い人は全部避難した。

降り出してから丁度十五日目に大洪水となり、然かもそれが三日もつ  
づいたので、街民たちはいよいよ住み馴れた此の街をあきらめるより外  
はなかつた。

洪水は四日目の未明からひき始めて晝頃にはすつかりひいてしまつた。  
ところが不思議にも、最後とあきらめてゐた街には少しの被害もない。

## 六 幽靈のいたづら

そして内厩の向ふに新しい大きな川が一つ出来、内厩を中にはきんで二つの川が流れてゐた。

その後、古い川の上流は風に吹き上げられた砂の爲めに、せきとめられて、水の大部分は新しい川に流れるやうになつた。そして數年後には遂に一滴の水も流れぬやうになり、その下流は池のやうになつてしまつた。

その後更にそこを埋め立てたので、今日では全く川の跡はなくなり、僅かに媽祖廟の後に残つてゐる溪仔底の池がその歴史を物語つてゐるだけである。

随つて今日流れてゐる川は、當時新しく出来た川であつて、川向ふにあつた内厩もこちらの岸にうつつたわけである。

## 六 幽靈のいたづら

街の東方約一軒の所に明治線の鉄橋がかかつてゐる。この鉄橋をこえ

ると向ふに農事組合の苗圃が見える。ここら一帯は昔幽霊①がよく出没するといふので鬼仔潭ともいはれてゐる。これは郷土を詠める左の詩を見てもすぐ伺はれる。

### ◎鬼仔潭竹枝詞

樸雅脚東鬼子潭

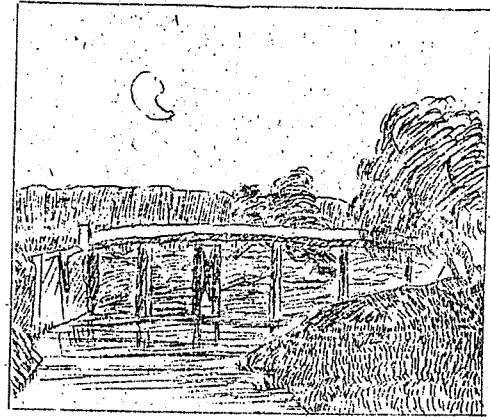
蓬蒿②漏眼③影毳毳④

争傳鬼变成人状

常入街中買酒酣

この詩によると水鬼は只にその附近に出没するばかりでなく街に来て酒を買つて飲むとまでかいてゐる。

又傳へ聞く所によればこれらの溺死した亡霊は時々芝居をやとつて来ては夜のあける迄やらせる。芝居をやつてゐる人は水鬼の御殿でやつてゐるとは知らないで一生懸命やる、さうするといつまでたつても夜があけないから疲れ果ててしまふ、それでもやつとの事で鶏がなく迄やるとバタバタと見物人がにげ出す、やがて水の中へとびこむ音が聞える、何だらうと思つてゐると鬼仔潭の岸でやつてゐることが分つ



て一同腰をぬかしてしまふ。——といつて人をこはがらせてゐる。のみならず年に必らず一人づつ自分の後釜に生きた人間を引っぱつて行くといふから全くたまらない、その當時の街民はこの爲に夜もろくろく眠られず、晝も安心してそのあたりを通らなかつたさうである。

五月雨のしよぼしよぼふりそそぐ或る淋しい晩の事であつた。阿漢といふ一人の若者がこ橋を渡らうと思つて、橋の側迄來ると、どこからとなくヒユ——ドロ——ドロと訴ふるが如く、泣くが如き悲しげな氣味のあるい聲がきこえて來る。若者阿漢は冷水をあびせられたやうにヒヤツとした。そして内心ビクビクしながらも元氣をつける爲に大きな聲で何かわけの分らない歌を歌ひ出した。やがて橋を渡り出して、向ふ側の竹藪を見るとこれは何と白い服をきた亡霊が竹の上にぶらさがつて赤い舌をペロペロ出してゐるではないか。竹かギイット再び氣味の悪い音を立て

てガサガサゆれる。………これを見た阿漢は驚くまいか腰をぬかしてしまつた。やつとのことで家へにげかへつたが顔色がまつさをである。眼を白黒させて口が一寸もきけない。この只ならぬ様子を見た母が。

「お前どうした？」

とビツクリしてきいたがもとより口か利けよう筈がないから只手まねで何かわけのわからぬことをやるだけだつた。

「どうしたんだ、お前は」

と兄がどなりつけるとやつとのことで

「ユ……ユ……ユウ……レ……イを見……た」

といつたがそれつきり後の言葉が出ない。父が

「何、十二幽霊を見た？どこだ、十二鬼仔潭………？だから日が

くれたらそこを通つてはいけなといつたではないか。」

とこれも聲をふるはせながら叱りつけた。その晩から阿漢は高い熱を出してねつた。

この事が街全般に傳はると奇を好む街民はここもそこもこの話でもち

きりであつた。

甲「おい君！阿漢さんが鬼仔潭の幽霊を見たとよ。」

乙「エ、ナニ？鬼仔潭の幽霊を見た？……それはほんとかね。」

甲「誰かそんなうそをいふものか。」

丙「ア、私もその話をきいたよ。何でもこんなに丈が高く赤い舌をペロペロ出してゐたさうだ。その爲に私の附近では皆こはがつてゐるよ。」

かういふ丙の家は鬼仔潭に近かつたのであつた。

乙「鬼仔潭の水鬼仔が又あばれ出したか、困つたものだ、さうだつたら又阿彌陀佛をたて、おはらひでもしなければ納まらぬだらうよ。」

などと街民は丙のいつた通り戦戦兢兢としてゐた。中には「おれがいつて幽霊の正体を見届けてくる。」といふ勇敢なものもあつたが只口だけで一向行かうともしない。ところがここに一人今年學校を出たばかりの元氣な陳豪傑といふ青年がゐた。生れつき快活で豪膽な質であつた。冒

險も好きだつたのでこの話をきくと、「では私がいつて見て来よう」といつて人の止めるのも聞かないで或晩そこへ幽霊の正体を見届けるべく出かけた。人がついて行くといふのを止めて自分一人で出かけて行つた。

街民一「おい今晚あの豪傑さんが幽霊の正体を見届けるといつて家を出て行つたさうだよ、馬鹿なまねをするものもあるものだな。」

街民二「ほんとにいつたのか、あいつもきつとはふはふの体で歸つてくるよ、ほらばかりふくから。」

街民三「今頃はきつとひどい目にあつてゐるよ、可哀さうにね。」  
その晩の十一時頃一人歸つて來た豪傑は右手に白い布を左手に赤いたすきをもつてゐた。豪傑青年はニツコリ笑つて。

「幽霊の正体はこれですよ」

と快活にハッハッハッ……と笑つた。

之を見た一同はあいた口が暫くの間ふさがらなかつた。

誰がこんないたづらをした???

七 茶屋のをばさんの話

皆の目にはたしかにこの疑問の色が見之てゐた。

註：①幽霊は俗に水鬼仔ともいふ。

②蓬蒿はよもぎのしげみを言ふ。

③漏眼は鬼の謂。

④髡髡は毛の長き貌物の細長き貌をいふ。

## 七 茶屋のをばさんの話

南部の五月と言へば氣の早い連中はそろそろ氷でも食べかける頃である。

今日も朝からぽかぽかと暖いので、日曜を幸、牛稠溪のほとりを半日歩き廻つた。その歸り途、道傍の小さな茶屋に腰を下した。

茶屋とは名ばかりで、四本の丸太を立て、屋根には古びた甘蔗の葉をのせて日蔭にし、その下には、ぢかに荒筵を敷いてゐる。その前に小さ

な台をおいてキヤラメルの空箱を三つ四つ並べ、中には駄菓子が幾種類か入れてある。

ここのをばさんは年はまだ五十にもとどかないのだらうに、眼を患つてゐるせいか妙にやつれて見える。しなびた手で眼をこすりつけるやうにして無器用に着物にべたつぎをあててゐると、一層年とつて見える。傍には七つ八つになる男の子が如何にも弱弱しさうな血の氣のない顔をして腹を一杯出して眠つてゐる。どこか痛みでもするのか、時々腹の皮をピクピク痙攣させてゐる。もう二三日も顔を洗はないのだらう赤くただれた眼ぶち、鼻から頬ぺたにかけて黒く汚れた所をしきりに蠅がつつきげ廻つてゐる。母親の手が動く度に蠅は顔と菓子との間をぶんぶんとんでゐる。

僕が店の前に腰かけると、をばさんは仕事の手を休めてにこにこしながら見上げた。

丁度、退屈な時だつたと見えて、商賣の事など忘れたかのやうに世間話をし出した。暫く話のあひづちをうつてゐたが、ふと傍の元氣のなさ

七 茶屋のをばさんの話

さうな男の子が氣になつたので様子をきくと、急にをばさんは大きなめいきをして悲しさうな面もちで、次のやうに語つた。

「此の子は今年八つになりますが、五つの頃までは、それはそれは元氣な子供でございました。ところがその頃近所に義春さんといふ十五六になる子供がゐりましたが、その子が元來病身なので、之れといふ仕事も出來ず、毎日蒼い顔をして近所の子供を相手にぶらぶら遊んでゐました。

或る晩、此の子が眞蒼な顔をして走つて歸つて來て『恐い恐い』と言つて泣くものですから、よくわけをきいて見ますと、何でもその義春さんに恐い話をきかされ、かへる時に恐がらされたといふのです。それは大變だといふので、此の子の父親がまだ生きてゐた頃で、早速その義春さんの家に行つて茶碗に唾液をもらつてかへつて、それを水にかして飲ませたことがあります。それから同じやうなことが二三度もありました。その當時はそれでも何の変りもありませんでしたが、その後はちよいちよい風邪をひいて床につくやうになりました。それからといふ

ものは顔色もだんだん悪くなつて來まして今ではこんなによせてしまひました。

それに、その義春さんもそんな事があつてから間もなく床についてしまひ、それから半年近くも患つてゐたでせうか、とうとう死んでしまひましたので一層何だか氣がかりでなりません。」  
と言つて早やうるんだ眼からは涙さへ落としてゐた。

僕はをばさんの様子を見ては慰めずにはゐられなかつたので、

「それは御心配でせう、早くお醫者さんに診せてごらんなさいよ」といふと、をばさんは涙をふきながら

「それが……：今の生活では二人の親子がやつとその日の飢を凌ぐだけで、薬さへ買ふ事が出来ませんし、それに此の子の父親が生きてゐる時からずつと私ども一家は媽祖様を信仰いたしてゐましたので今も二人とも眼病から何とかして救つていただかうと思つて之れ此の通り毎朝お詣りして、お線香の灰をいただいてかへつては水にとかして毎日何度も二人で眼につけてゐます」

七 茶屋のをばさんの話

と言ひつゝ、泥水でも入れたやうな茶碗をとり出して見せながら右手の人さし指にその水をつけては寝てゐる子供の眼の中に入れてゐる。

それを見せられた僕は啞然として何の慰めの言葉も出せなかつた。ポケットから拾錢白銅貨を二つつかんで其の臺の上におくなり、黙禮して急いでそこを離れた。

何だか全身をその恐ろしい病氣に包まれたやうにゾツとした。

靜かに歩きながら今の親子の姿を頭に描いてをばさんの話を思ひ出して見た。

あの話から考へると、死んだといふ父親の病氣の時にも醫者には診せなかつたのだらう。恐らく祈禱をする人でも呼んで來て、病人の枕邊で、鐘や太鼓をうち笛を鳴らして祈禱でもしたのだらう。

神や佛を敬ひ、お祈りをすることはいい事だ。併し枕許で太鼓や笛を鳴らされた日には幾ら健康な者でも病氣になつてしまふ。まして病人を前にしてやつたならば助かる人でも助かる筈はない。

そればかりか、眼に灰をつけたり、人の唾液を飲ませたりするなど、

あまりにも考へが足りない。

あ、迷信は恐ろしい。

街の人人を此の恐ろしい迷信から早く救はねばならぬと固く心に誓つた時、自動車のけたたましい警笛で我にかへつた。

道を左にさけながら帽子をとつて額の汗をふくと、涼しい風が氣もちよく顔をなでた。

## 八 交 通

私は今朝父の用事で嘉義まで行つて來ました。

朴子を出たのが朝の七時で、向ふに着いたのが八時少し前でした。それから大急ぎでいひつけられた用事をすませて再び自動車に乗つたのが九時に五分前でした。九時を合圖に車は朴子をさして走り出した。お客は私の外に十一人も乗つてゐましたので大してゆれもせず十時には朴子に着くことが出來ました。

家では私の歸りがあまり速かつたので、皆意外の面持で、父は

「お前はもう行つて來たのか」

ときかれました。

昔だつたらどうだつたらう。嘉義へ出るといへば星をいただいて家を出て、星をいただいでやつと歸りつくといふ工合、それに道は悪くて、今日の様子しか知らない私等にはとても想像もつかない程だつたといふことだ。まして金を盗まれるといふやうなことも度度あつたといふ話をきいては旅する人の難儀がうかがはれる。

ところが今日では自動車は朴子を中心として義竹・布袋・東石の郡内は勿論、遠くは嘉義・北港・水上・塩水へまでも一日に數回乃至二十回も往復してゐる。そしてこれにあてられてゐる車台も十數台の多きに達し、道路も年年改修され、橋も完備されたので、どんな雨降りでもほとんどん通つてゐる。

尚蒜頭を中心に、嘉義・港墘間・水上・蒜頭間は明治製糖の社線が通じてゐて一般の便宜を圖つてゐる。

私だちはどちらを利用してても極く僅かな時間で縦貫線の客となることが出来る。

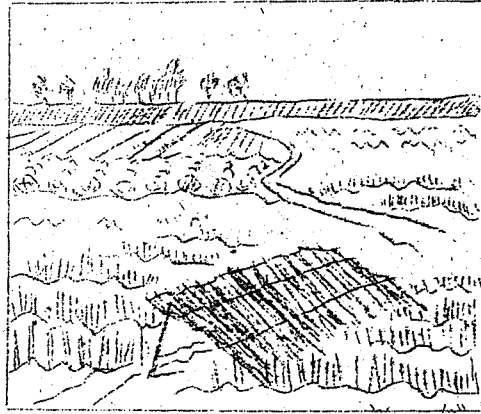
交通が各方面に及ぼす影響は大きなもので、その便不便は土地の盛衰を左右するものである。私達は夜となく晝となく貨物を満載したトラツクが走つてゐるのを見て、郷土の前途に何となく心強さを感じる。

## 九 伸び行く農業

天高く澄みわたり大氣みなぎる田圃の中では農夫達か一生懸命に働いてゐる。

我が郷土の田圃はもうどこでも青青として風の吹くままに波を立ててゐる。甘蔗・稻・甘藷が主で鬼仔潭邊りでは蔬菜類が多く栽培されてゐる。

嘉義道路の並木の下で二人の青年が休んでゐる。先程迄野良仕事をしてゐたがお晝のモーターサイレンが静かな大空を傳はつて來たので樂



しく中食をとりながら聲高らかに語り合つてゐる。

「どうだ、今年はいぶんとれるだらうね？」

「いや、ところが稲は駄目だ此の前の風で二割位減  
收だよ」

「ああ、ほんとにね………」

二割といふと大きな損害だね」

「あの風さへなかつたら今年の水も十分灌漑するこ

とが出来たのだからね」

と言つてさも悲觀してゐるやうである。

二人は大きな辨當を皆平げてしまった。

「ああ、これで又元氣が出た。午後は野菜の虫をとらう」。

「ええとらう、たくさんついて困る、早く取らなければ全滅だ」。

野菜島にはこの邊であまり見ない根深太葱・牛蒡・人蔘・花椰菜・蕃茄  
が大分伸びてゐる。只蕃茄の少し虫にやられたのがちよいちよい見える。

けれども立派に伸びてもうおいしさうな實がなつてゐる。

そよそよと風が吹い来る。秋だのに、此の辺では珍らしい小春日和だ。木の下で休んでゐた二人の青年は仕事の疲れでとうとう氣もちよささうに木にもたれて眠つてしまつた。この青年達は一昨年學校を優等で卒業し友達が上級學校へ行くのに目もくれず、農業に従事してゐる、父がどうか經營してゐた農園も此の青年達がやるや　なつてから急に見達へる程整頓され、年年収入も増んでゐる。今まで父のやつてゐたのは只多收栽培で、優良品の栽培については少しの研究もしなかつた、それがために郷土人の嗜好に適しないから多くとれても、人人から歓迎されなかつた。

臺灣種の土白菜や大根しか作らない。畦中・株間も極度に狭ばめて播種し、間引といふやうな事は殆んどやらない。肥料にしても、基肥は施さず、只追肥として人糞尿をやる位なもので而もその方法は新しいものをどんどん頭から無造作にまきかける状態　であつたから纖維は硬いし、營養價値も少かつた。

併し農會の指導獎勵は農夫たちの自覺を促して漸く優良蔬菜の産出を見るやうになつた。尚かうした青年の研究に依つて往時に比して長足の進歩を遂げて來た。父がいつも出來ない出來ないところばしてゐた根深太葱・牛蒡・人蔘・蕃茄等も此の青年たちの手によるやうになつてからは立派に出來た。「やはり學理の研究は必要だ」といふ聲をやつと近頃百姓だちの中からきくことが出来るやうになつた。

木の下で靜かに眠つてゐた青年たちは、ものの三十分とはたたないのに、もう起き上つた。そして早速身仕度をして來て田圃の仕事にとりかかつた。

「この地方の土は殆んど砂質壤土だね」

「さうだ、此のよい土に恵まれた上に水利の便もいい此の朴子の農業の將來は有望だ」。

「成る程、嘉南大圳が通水されてから、どの作物も増収を見るやうになつたのも當然だね。」

「増収ばかりではなく、まだ地方も永續されるよ」。

「え………併し年に納める租税も大へんだね」。

「租税を納めるのは當然な義務だよ、只物價が安くて折角收穫した物も大した金にはならないけれども我等はとにかく全心全靈を打込んで働けば自らお金が入つて來るのだ」

二人は蕃茄の摘芽や虫取り除草などしながら語りつづけてゐた。

そこへ保正さんが鍬を肩に、とぼとぼとやつて來て

「おお、なかなか立派になつたね」

二人は誰かと思つて顔を上げて見ると、日頃いろいろと世話になつてゐる保正さんなので。

「やあ、をぢさん、今日は」

と挨拶した。保正さんは二人の青年を見てさも感心したやうな顔付で又歩き出した。

此の保正さんは朴子での豪農家で、田畑數十甲歩を持つてゐる。その大部分は皆佃人に作らせてゐるが頗る同情のある地主で佃人とはいつても

一〇 先生のお話「埃について」

協調してやつてゐるため、世間に多い小作紛争など、あの人の佃人からは殆んど聞いた事がない。皆な六ヶ年十ヶ年といふ永い間に亘つて契約してゐるから佃人は安心して一生懸命に働く事が出来るのだ。此の地方でもとかく起り勝ちだつた争議も近頃あまり耳にしないが、そんなになつたのも、あのやうな理解のある地主がゐるからである。全く私ども農民の鑑だ、と、保正さんの後姿を見送りながら二人は話し合つた。

一〇 先生のお話「埃について」

季節風は朝から強く吹いてゐるので、教室には未だ四五人の生徒しか来てゐない。

机の上は埃で眞白になつてゐる。生徒たちはその前に坐つて、指先できのふ習つた字を書いたり、人の顔を書いたりして遊んでゐる。そこへ先生が來られて。

「やあ、お早よう、埃が多くて困るね、皆で机の上をきれいにふきませ

う。それから先生がお話して上げるから、ね」

生徒だちはよろこんで雑巾をもつて、急いで机を残らずふいた。

「さあ、お話を上げてよう。皆さんの家でも埃が多くて困つてゐるせうね。校庭の木や花壇の草花をごらん、先だつてまでは、濃い緑を浮べて生生としてゐたのに、今日などはあんなに汚れてしまつて、それを見る私どもの心もでも曇らせてしまひます。こんなに埃は此の地方の美觀を大さう傷つけますが、そればかりではない、もつともつと朴子に住んでゐる私どもにとつて恐ろしい事があるのです。毎日そんな恐ろしい所で生活をしてゐても、皆さんは一向氣がつかないやうですから、今日はそれについてお話を上げてよう」。

と言つて、先生は更に椅子を前にすすめて、次のやうなお話をして下さいました。

「昨年此の朴子のいろいろな調査をしました。その中で最も驚いた事は一ヶ年の死亡者の中で、その三分の一が呼吸器を病んだ人なのです。呼吸器病と言つても、たくさんありますが、その中で此の地方に多い

ものは肺炎・肺結核・気管支炎などです。

それ等の原因についても亦、いろいろな場合がありますが、肺炎といふ病氣は氣溫や氣壓の急変に依つて起る場合が多いのです。暖い日がつづいてゐるかと思ふと、急に寒くなる。そんな場合に、それに對して私どもは衣服の用意を充分にしないし、又私どもの皮膚もその氣溫の急変に對して抵抗する力がない爲めに、遂に此の肺炎に襲はれるのです。肺炎はこのやうに急にやつて來るものですが、それに反して肺結核は急にはやつて來ないが非常に恐ろしい傳染病です。此の病氣にかかつて初めはさほど苦痛を感じない爲めに大抵の人は放つておく。又少少体の工合が悪くとも多くの人は一家の爲めに仕事をつづけねば生活に追はれるから強ひて働いてゐる。そんな人がいよいよ働けなくなつてたほれる時は、もう餘程の重態で、それまでには多くの人人にも傳染してゐる場合が多いのです。

このやうな呼吸器の病氣は最も塵埃を避けねばならないのに、さうした点に恵まれてゐない此の附近では前に述べたやうな大きい死亡率を

示してゐます。して見ると、之れ等の病氣の多い原因の一つとして此の塵埃を上げることが出来る。

殊に此の肺結核の病原菌である結核菌はただ肺を冒すだけではなく、他の内臓や眼や骨、どこでも冒すものです。眼などを冒されると、兩眼の失明は免かれないし、骨ならば、思ひきつてそこを切斷しても又他の部分が冒されるといふやうに、非常に恐ろしい病氣ですから街民が擧つて注意しなければこの恐ろしい病氣を街から除くことは出来ないのです。

その外、トラホームにしても、その患者の多いことは此の埃に對して街の人人が無關心であるが爲めで據立ててゐるものです。」

そこまで話された時、給仕が何か書類をもつて回覽して來た。先生はしばらくその書類に眼を通してゐましたが。

「では此のお話は之れでとめますが、ここに表があるからよくごらんなさい。

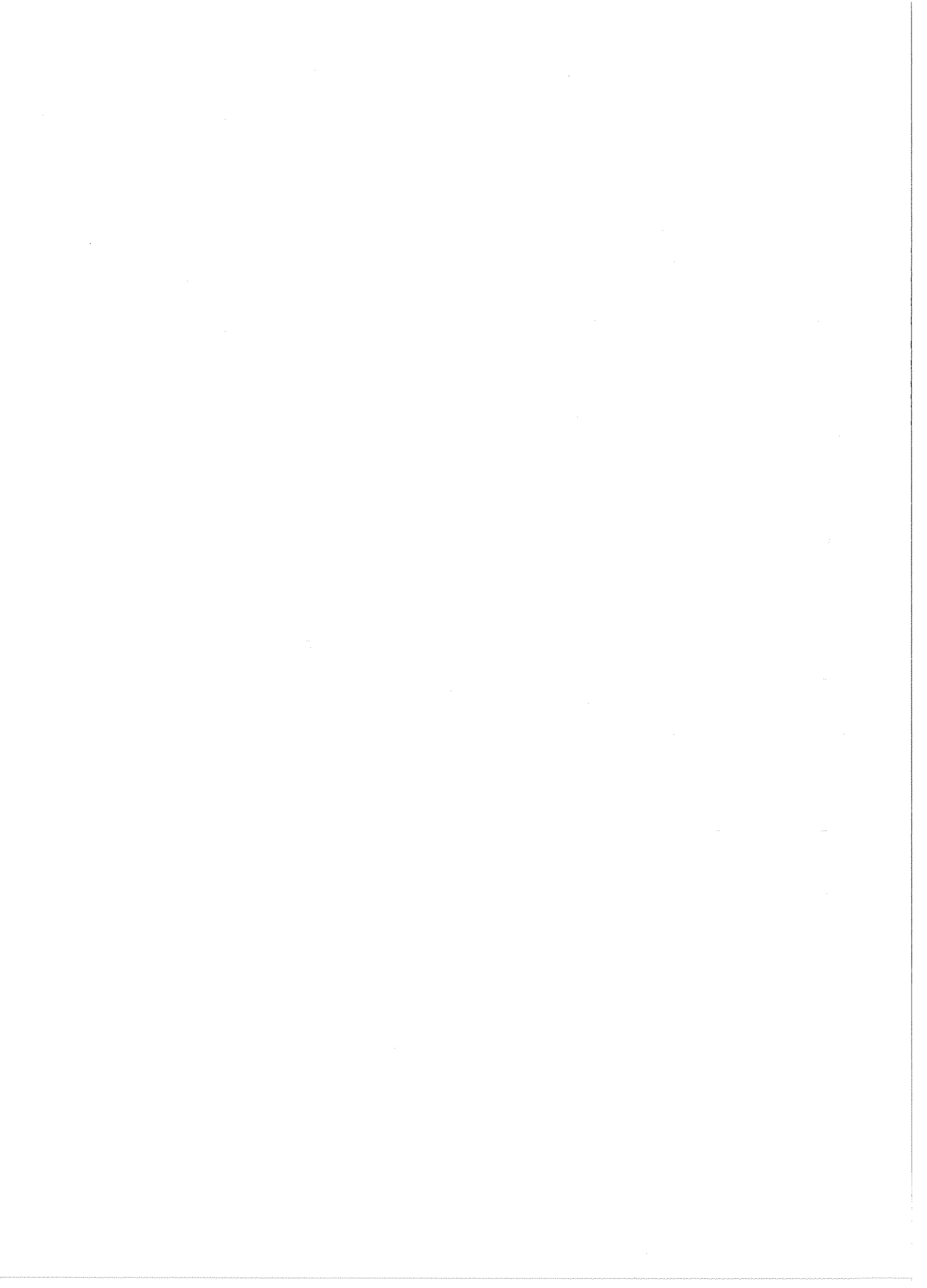
このやうな事は街民が協力して豫防、驅除に努力しなければならぬ事

一〇 先生のお話「埃について」

ですから、一人でも多く私どもと同じ考へをもつた人を作りませう」と言ひながら表を机の上において、急いで事務室の方へ行かれた。だまつて聞いてゐた生徒だちは何だか急に恐ろしい病氣にでもかかつたやうな氣がするので、無理に大きい咳をして見ながら恐ろしいものにも觸れるやうな氣つきでその表をのぞいて見た。

◎呼吸器病死亡者比率（總死亡者二對スル千分比）

支氣管炎		肺結核		肺炎		病名	年
							朴子
不詳	七〇	不詳	二七	不詳	九九		昭和二年
五一	六九	一〇八	二六	一八一	一〇一		全三年
三九	七〇	一一四	二五	二二五	九六		全四年
五〇	不詳	九〇	不詳	一八五	不詳		全五年



一 活けるミイラ

## 一 活けるミイラ

(一) 街の北方

牛稠溪の流れる所

そこに活けるミイラが

一人棲んでゐました

彼は人の形をして

人の着物をつけてゐました

食物も寸分違ひません

しかし彼は心がありませんでした

萬物の靈長としての

清い高い心がありませんでした

(二) 彼は金を見ると

目がくらみました

とつていいか、悪いかも考へないで

彼はうまい物を見ると 腹がうゑました

食べていいか悪いかも考へないで

彼は自分の爲になる事なら

何でもいとはないでやりました

しかし他人のことは

考へた事がありませんでした

未だ嘗て一度も

### (三) 彼は莫大な富と

宏壯な家を持つてゐました

併し彼は何の爲に

それを持つてゐるかを知りませんでした

貪しくて餓ゑる人があつても

知らぬ顔をしてゐました

棲む家がなくて困つてゐる人があつても

知らぬ顔をしてゐました

(四) 彼は悪魔のいふことは

何でもよく聞きました

「わしを拜めー、さうしたら

この全世界をやらう。」

悪魔がかう囁くと

一も二もなくひざまづきました

それで彼はこの世にあるものは

何でも持つてゐました

併し人として最も大事な

「廣い心と高い理想は持つてゐませんでした。」

恰もエヂプト二千年來の

死せるミイラの如く

而も彼は生きてゐるが爲め

街の人から「活けるミイラ」といふ

いとも芳しい名を奉られるやうになりました。

## 一一一 樸仔脚①の変

改隸以來全島到る處に土匪が蜂起して良民を苦しめてゐたが、その中でも全島民を驚かした大事變は突に樸仔脚の変である。

明治三十四年の初め頃から樸仔脚附近の匪情は日に日に不穩になり、同年九月には圍仔内②の事變が起つた。それから後は本地方の匪賊の勢は益々盛になつて晝でも群をなして兇器を持つて乱暴をするやうになつた。その後更に布袋嘴③で警部補と巡查が殺されたり、吳竹仔脚では富豪が襲はれたりして近く大舉して樸仔脚を襲ふとの噂があつたので官民

共に警戒を怠らなかつた。

時は明治三十四年十一月二十三日午前四時である。突然數百の匪賊④が樸仔脚の東南端安溪厝方面から街内に攻め入り、三隊に分れて、一隊は支廳長宿舍を襲ひ、一隊は郵便局に向ひ、本隊は支廳を包圍した。その時支廳に居た藤田警部補が銃聲に驚かされとび起きて見ると、もう支廳は包圍されて他との連絡を絶たれ、匪賊は盛に砲撃してゐる。直ちに永山警部補と共に部下を指揮して防戦に努めたが、構内が廣くて守るのに不便である上に賊勢が頗る盛であるため、遂に支へきれず止むなく事務室に退き、ここで固守防戦した。

支廳長宿舍及廳員宿舍を襲つた匪賊は支廳長を始め支廳員全部を殺し、財物を掠め、更に宿舍に火を放つた。不意の襲撃を受けた庄崎支廳長は夜具をけつて立ち、枕許にあつた劍をとつて賊にきりかかつたが、大勢の賊が一時に乱入したので遂に銃殺されてしまつた。

一方郵便局を襲つた匪賊は先づ電話を切斷し、電話機を破壊し、金を奪ひ、書類を焼却して殆んど一物をも残さなかつた。宮下局長を始め、

局員及其の家族に至る迄全部虐殺され、鈴木公醫も自宅で銃殺された。尚一部は公學校職員の宿舍を襲つたが職員は父兄の知らせで早くのがれた爲め、幸に難を免かれた。

支廳を固守した藤田警部補等は各方面の急を聞き、力を分けて支廳長宿舍及び郵便局の救援に向はうとしたが支廳防備の力が足りないのと、支廳長を始め、支廳員皆戦死したとの知らせを受けたので、そのまま支廳を死守する決心をした。やがて他の方面に向つた匪賊も本隊に加はつて賊の勢は一層盛になり、遂に支廳事務室に攻めよせて來た。その時先頭に立つて指揮をして居た賊の一人が彈丸に中つて倒れたので他の賊もその勢におそれて突進する者がなく退却して包圍攻撃の形をとつた。

樸仔脚支廳が土匪に圍まれたとの報が傳はるや布袋嘴の派出所員と分遣隊員は直に救援隊を作り應援に赴いた。途中栗子崙・鴨母寮の兩派出所の巡查も同隊に加はり、同日午後三時頃下竹圍庄に到着し、樸仔脚南側に集つてゐる匪賊と交戦した。それとほぼ同じ時刻に新營分遣隊は鹿草分遣隊及び同地派出所の一隊と合して、鹿草道路から來て樸仔脚の東

南端に集合してゐる匪賊と交戦した。又嘉義方面から來た救援隊⑤は午後三時半樸仔脚の東端に到着し、優勢な匪賊と激しい戦を交へた。匪賊は主力を集めて抵抗した爲二時間以上も激戦をつづけたが賊を破ることが出来なかつた。所が支廳の重圍はまだ解けないばかりでなく、刻々と危険が迫つて來たので、江本課長は部下の一隊を率いて賊勢の弱い東北に廻り、自ら先頭に立つて勇敢に支廳の裏から突進した。やがて別役中尉の一隊も匪賊を破り、他の救援隊もつづいて街内に進入し賊を撃退することが出來たので重圍に陥つてゐた人人は万歳を連呼してこれを迎へた。

撃退された匪賊は蘆菜埔方面に逃げたので警察隊及び軍隊の一部は直に追撃し、蘆菜埔方面の甘蔗畑で一隊に追つき砲撃を加へたが、日が暮れた爲めに遂に賊の跡を見失つてしまつた。尚港墘方面まで追撃したけれども及ばずしてそのまま歸つて來た。

この度襲つて來た土匪は數百名に達し、腕と胸とに赤色の布片の徽章をつけてしるしとし、五六名の匪首は赤色の旗を打ちふつて指揮したさ

うである。そして街内に進入するや彼等は「吾吾は街民に害を加へるものではない、唯支廳員を殺す爲に來たのだから汝等は平素の通り安心して稼業につけ、若し我等に敵對するものがあるなら街民であつても殺すぞ」といつた。その目的は先づ樸仔脚を攻めとり、進んで嘉義を襲撃する計劃であつたさうである。

その後支廳に於ては殘余の匪賊及び匪賊を助けた者や物品を供給した者を調査して嚴罰を加へ、更に警戒を嚴重にした爲め、匪賊は全く影をひそめるやうになつたので街民は以前の通り安心して業につくことが出来る様になつた。

註：①樸仔脚は今の朴子である。

②圍仔内は今の東石庄管内にある。

③布袋嘴は今の布袋庄布袋である。

④匪賊首領黃茂松。

⑤嘉義方面から來た救援隊は嘉義守備隊別役中尉の一隊と江本警察

課長の一隊のことである。

## 一一三 朴子街協議會

ここは街役場二階の會議室，中央に議長である街長が座を占め，それから左右へ街協議會員がズラツとお行儀よく坐つてゐます。來賓の方方の顔も多數見えてゐます。時計が丁度九時を打つた時，議長が徐ろに口をひらいて。

「本日は御多忙の所わざわざお集り下さつて有難うございます。(中略)只今から御相談申上げる事柄は皆街の死活に關する事であるから何卒御遠慮なく御意見を申述べて下さい」。

と簡単な挨拶をされる。次に助役さんが立つて次の問題を聲高らかによみあげました。

- 一、縦貫鉄道海岸線本街通過申請に關する件
- 一、水道設置並に公園造營に關する件

一、その他……………

次いで議長は縦貫鉄道の當街通過に關して州及び總督府へ陳情したこと

や、鉄道は總督府が敷説するとしても、その用地をその地方で負担する位の覺悟がなければならぬことや、水道は北港にも既に出來てゐるかう朴子にも是非ひきたいことや、それには總督府なり、州なりから補助を受けるとしても相當な經費を要することや、水道が出來上つた曉にはその附近に公園も一つ造りたいこと等累累と説明されてから最後に

「かういふわけで縦貫鉄道にしろ、水道をひくにしろ、乃至は公園の造營にしても本街將來の發展を期する上から見て且保健衛生の点から見ても最も重要なものでありますから、今日皆様に御圖り申した次第であります。何卒この点に意を留められました十分の御研究を御願ひ申したいと存じますでは第一項からいきませう。どなたからでもどうぞ御遠慮なく」。

かう附け加へました。一同沈黙やや少しくあつてから甲氏が立ち上つて、エヘンと咳拂ひ一つしてから、

「エエ、只今議長さんから御説明のあつた議案第一項に對して聊か私に卑見をのべてみたいと思ふのであります」。

と前置をして、それから重重しく口を開いていふには

「本街は嘉南平野の中央に位し、位置頗る良好であります。然るに本街が今日迄遅滞として進まないのはなぜでせうか？……私はその最大原因を交通の不便にあると推察するのであります。交通が街の死活に及ぼす影響の大きいことは、本街のみならず、古今の例に徴しても明らかであります。なぜかならば交通が便利であれば物資の集散が悉くその街を中心にして行はれるから、自然數多の人や金が流通することになり、随つてその街は繁榮するわけであります。それ故縦貫鉄道の西部線が實現するならば如何なる犠牲を拂つても本街を通過せしむる様努力しなければならぬと思ひます。」

と先づ第一項の讚成演説を試みました。議長は皆を見て、

「どうです皆さん、異議はありませんか」と問ふ。

「異議なし異議なし讚成讚成。」

議長「では皆さんの御承諾を得ましたから後で、塩水・西螺・北港・麻

豆等の街と相談した上，更に州なり總督府なりへ陳情することに  
しませう。第二項へ行きます。」

といひ終るやいや 末席に居た乙氏かすくつと立ち上つて，

「私の意見を述べて見ます。水道を設ける必要は縦貫線のそれと同じく，今更喋喋と論ずる必要はないと思ふのである。むしろあまりに遅きにすぎたやうな感がある。只これをどこに，そして如何に設けるかが問題であらうと思ふ。そして先決問題は金だ？水道設置に要する資金を如何にして捻出するかが目下の緊急要務だらうと思ふ：：：：世界をあげて經濟難になやまされる今日！街の財政もさうゆたかではあるまいと思ふが議長！その金をどうして捻出する？」

とこの人は見るからに氣短かさうです。始めから議長に喰つてかかります。そして何者をも恐れないやうな顔をしてゐます。

議長「經費ですか，合計十八万円，その中の三分の二は州と總督府の補助を仰ぐとして，當街は残りの三分の一を負擔しなければならな  
いと思ひます。」

乙氏「さうですか、分りました。しかし街民はそれだけの金を負担し得るかどうか？そして負担せしむるとせば如何にして負担せしむべきか：：：これが今日圖るべき重大問題だらうと思ひますでなければ徒らに砂上に樓閣を築くやうなあはれな結果になりはしないかとも心配してゐます。諸君如何？」

と今度は皆へ顔を向けました。この元氣旺盛な青年議員乙氏の勢におそれをなしたのか皆答へようともしませんでした。その時のことです。ひどい近視眼鏡をかけた丙氏が。

「私は出し得るだらうと思ひます。街民約二万人，三千五百戸，一戸平均二十円，出せないことはないでせう？」

乙氏「一戸平均二十円？：：：といふのは街民全般に一樣に同じ金を出させるといふのですね，金のある人もない人も」

丙氏「それはさうですよ。さうするのが當前ですよ，金がないなどいふのは大ていうそですよ。この街にはそんな貧乏人は居ないやうに思ひますね。又金持だからといつて余分に水をのむわけでは

ないですからね」

と近視議員はすましたものです。これを聞いた氣短かな青年議員の顔にはありありと憤怒の色が浮びました。併し近視議員はそれが見えない爲か更に。

「三千五百戸とすれば、一戸當り二十円も出せば上等な水がのめるわけですね、皆さんこ………」

とまだ何かいはうとするのをさへぎつて乙氏憤然と立ち上つて大聲叱嘖していふ、

「私は丙氏の考は根本的に間違つてゐると思ふ」

その聲が途方もなく大きかつたので近視議員始め、居眠りしてゐた他の議員も皆ビツクリしました。乙氏は更につづけて

「街には富めるものあり、貧しきものあり、これは動かせぬ事實だ。

丙氏が『街にはそんな貧乏人は居ない』といはれたが、それは認識不足者の寢言としか聞きとれない。それを富めるものからも二十円、貧しきものからも二十円出させるといふことは甚だ不都合であると

思ふ。君——貧しま者の二十円は十ヶ月の生活費になることを君は知らぬのか：：：現在街には君のやうな者がゐるから困るんだ。かういふ考を持つてゐる人が街民を代表して神聖な協議會員になつてゐることを僕は協議會員の一人として恥かしく思ひ、且街民に對してすまなく思ふのである。君——君はそれでも街の先驅者としての面目があると思ふのか。」

と怒りにまかせて丙民を完膚なきまでに痛撃しました。論じ方に多方の無理はあつたが、彼の正義に立脚した燃ゆるが如き意氣と、大胆な態度は満場を壓して尚あまりあつたやうでした。それ故誰も丙氏の爲に弁解しようともせず、又彼に反駁しようともしませんでしだ。それで乙氏は今度は皆に向いて、

「私は財産の割で出させた方が一番公平な正しいやり方だと思ふ、皆さんどうでせう。」

多少躊躇してゐた人もあつたが大多数は

「その方がいいでせう」

といつて讚成しました。議長は時計を見て。

「では大多數御讚成の様ですからさうしませう。具体的方案は後で再び御圖りするとして公園を併せて造ることはどうです」

といふとこれも皆異議なく可決しました。

議長「では午前中は先づこれ位に切り上げて後の問題は午後に廻しませう。皆様御苦勞でありました。」

## 一四 小泉校長遭難記

本文は第一代校長小泉順先生が、明治三十四年十一月二十三日土匪襲來に際し、遭難したことをかかれたものである。

普天の下，率土の濱皆我が王民でなければならぬのに，領臺數年後我が臺灣は僅かに北部が稍稍おさまただけで，中南部に至つては柯鐵・賴福來・黃國鎮・林添丁・阮振・林少猫などの匪魁が各各險しい所に據つて，互に助け合ふやうな形をとり，これらの土匪は晝でも尚各地に

出沒して良民をおびやかしてゐる。それで土地の金持は皆之等に金をや  
つて各各自分の安全を圖つてゐたのである。だから内地人の中南部旅行  
は實に危険で、物を奪はれたり、さらはれて人質とされたり、殺された  
りする者が日日出て来る。そして郵便物を送るにも必ず兵士をつけて行  
くやうな有様であつた。私は明治三十三年五月に國語學校講習科を修了  
しすぐに臺南縣へ行くやうに命ぜられた。けれども前に申した様な時代  
であつたから、割合に安全な海路をとることにして、基隆から安平に、  
それから臺南に入り、當地①に赴任した。

所が臺南嘉義間にも危険な所があつて、時々土匪の爲に殺される者が  
あることを聞いて、大いに警戒しながら陸軍補廠の臺車にのつて、朝臺  
南を出、夕方新營について一泊した。その時は丁度蕃仔山の土匪を討伐  
中であつたので、大砲の響や、鐵砲の豆をいるやうな音をきいては身の  
既に危険地帯に入つたことを知り、内心甚だ穩やかでなかつた。尤も始  
からかういふ目にあふのは覺悟してゐたけれども今更かういふ物騒な音  
をきくと、あまりいい氣もしないものだ。けれども旅館の女中は少しも

心にかけてゐないやうに、まめまめしく働いてゐるのを見て恥かしい氣もしたので、強ひて平氣な顔をして入浴し、夕飯の膳に向つた。ところが飯が固くてのどを通らなかつた。さては驚怖の爲に飯の味迤變つたのだなと思つたが、さうではなく臺灣米②であることを知つた。今後そんな米で暮さなければならぬのかと思ふと胸が一杯になつて來た。その工所在地附近にはあの恐ろしい土匪がいつも出沒して良民をおびやかしてゐるが、果して自分は之に耐へ得るかどうかと、あれやこれやと思ひつづけて夜もろくろく眠れなかつた。實に新營の一夜は今日も尚忘れることが出來ないのである。

かういふ風にして、當地に着任して見ると、ペストが盛に流行してゐるので、更に心配が増した。しかも土匪の爲に受ける害は日に日に増して行くので、知人にあへば必ず土匪の話で持きりであつた。そしてどうしたらその害からのがれることが出来るだらうか、又若し攻めて來たら何で防がうか等と話し合つては警戒してゐた。

明治三十四年の夏も過ぎて、初秋に入ると先づ布袋嘴で警部補が斃れ、

圍仔内庄では巡査が殺され、吳竹仔脚では富豪が襲はれて、主人がさらはれ、その父は殺されたなどと盛に流言が行はれ、果ては近く大舉して當地を襲ふとまでいひ出したので官民共に相當の警戒をしてゐたのである。この時當朴子公學校の内地人職員は私の外、教諭佐分利山三君、岡辰二郎君で、家族は佐分利君と奥様とお子さんと私の家内と全部で六人である。その時は皆銃獵をしてゐたので休みには大抵獵に出てゐた。

時は明治三十四年十一月二十二日、明日は新嘗祭であるから、夜明けから鴨獵に出かけようと思つて彈藥、わらぢ等を用意して早く寢ようとしてゐる所へ青年が二三人たづねて來て、

「明日獵に出かけられますか。」

と聞く。おかしなことをきくものだなと思つて

「行くよ。」

と答へると、彼等がいふには

「ここ暫くの間は獵に出られてはいけません。今この地方は各庄とも土匪が多少來てゐるから、内地人の田舎行、殊に銃獵は一ばん危険で

す。」

といつて止めた。その時は丁度鴨がたくさん来て一番獵の多い時であつたから、大へん惜しいとは思つたが危険を冒して行くのも馬鹿らしいと思つたので、彼等のいふ通りにすることとし、禮をいつて寢についた。

二十三日午前四時半、夜は未だ明けしないで、只鷄の聲がここかしこに聞えて来る時、爆竹の様な銃聲に目をさまして、急ぎ外へ出て見ると、佐分利、岡の兩君は既に起きて土匪襲來のことを話し合つてゐたので、一しよに本島人の方へ避難することとし、宿舍裏門から出て近所の生徒の家に行つたのに、岡君一人だけ來ない、生徒にさがさせたけれども居ないから別の方へ行つたのだらうと思つて五人だけでその家にかくれた。そしてどうせ夜があけたら退却するだらうなどと話し合つてゐた。

所が夜が明けても銃聲が止まず、外の方が急に騒騒しくなつたので、私は行つて戸のすきまから見ると、澤山の人か三三五五して何か眺めてゐるから、戸をあけて外に出て見ると、數名の武装した本島人が支廳の方に向つて走つてゐた。この時一人の父兄が物もないので私を家の中

に引つぱりこんだ、ビツクリしてきくと。

「先生、あれは土匪であることを知りませんか。萬一彼等の目にふれたら、先生のこの胸は彈丸で貫かれましたぞ、あああぶなかつた。」  
と父兄は胸をなで下ろしながらいふのであつた。實際私は街民が少しも恐れる所なく彼等に接近してゐるのを見たから

「ああこれは壯丁が出て土匪を退かせる爲にさわいでゐるのだ。と思つた。」

だのに彼等があゝの恐るべき土匪であるとは………その時、若しあの父兄が私を家の中につれ込んでくれなかつたら、私は三十才を一期として彼等の毒手に斃れたに違ひない。これ私が九死に一生を得た第一回である。

暫くしてから小使が喘ぎ喘ぎ訪ねて來ていふには、

「支廳長も斃れました。郵便局員全部・公醫など皆慘殺されました。そして今官舎に火をつけたから、盛に燃えてゐます。」

といったから始めて今日の土匪が普通の掠奪を目的するのではないことを知つたので、俄かに恐ろしさが増して、隙があつたらにげ出さうとし

たが、時は既におそく、前後左右土匪にかこいまれて一歩も外へ出る事が出来なかつた。午前九時と思はれる頃、十五六才の娘③が顔色をかへて来て、左の方の戸をあけて早くここから逃げなさいといふ、理由は分らないけれども、危険が身に迫つて来たのを知り、一同そこから家と家との間幅三尺ばかりの所に走り込んだが、そこは行詰つてゐるし、最早先に進むことも出来ず、仕方なく一同ここにかがんでゐた。

所が逃げ出す時に佐分利夫人の抱いてゐたお子さんの額を戸際の煉瓦に強く打ちつけた爲、ここに來ても大聲で泣くので、土匪に悟られてはと思つて口に手をあてて、聲のもれるのを防いだ。後で聞けば、土匪は我我がここにかくれてゐるのを聞いたものだから、主婦に向つて、

「戸をあける、この内に日本人の教師が居るだらう。」

といつて内に入らうとしたのを主婦が

「いやそんな人は居りませんよ。」

と答へて入れさせまいとしたら、土匪は

「うそをいふな、そしたらお前の家に火をつけるぞ。」

とおどかしてゐるのを、傍できいてゐた娘が「これは只事ではない」と思つたから、走つて来て我我を逃げさせたのだと。我我が逃げ出すとほとんど同時に、土匪は表口からドヤドヤ入つて来て、隈なくさがしたさうだが、何等異状を認めなかつたからそのまま出て行つた。若し逃げ出す時、正面の裏口からだつたら後姿を見られる所だつたが、偶然に左側の室の裏口から出たのだからよかつた、運がよかつたのはこればかりでなく、佐分利夫人が息子さんの縵袍④をのこして出たのを、家内が拾ひとつて走り出た。若し残したまま逃げ去つたら、必ずあやしまれて、更に追及されたばかりでなく、累を家人にも及ぼしたであらう。これ九死に一生を得た第二回である。

我我がここ逃げこんで来てからも、小使の弟が訪ねて来て

「今土匪はすべての内地人を殺してしまつて、先生方をしきりにさがしてゐます。路で現金を人人に示し『校長の所在を知らせたものには五十金、その他のものにはすぐ三十金やる』といつてゐます。」

といつて知らせてくれたが、今はもうどうすることも出来ず、暗に死刑

の宣告をされたやうになつた。夜明けに寝まき一枚だけつけて出て來たものだから，身には寸鐵も帶びず，若し土匪が來たら只死ななければならぬ，宿舎には彈丸をこめた鐵砲もあり，亦三尺の秋水⑤もある，只で死ぬよりか一層の事家へ歸つて，これらの武器を持つて來て，花花しく戦はうと幾度も立たうとしたが，又一面から考へて，雉も鳴かねばうたれはすまいに，今頃出ては却つて不利ではないかとも考へられて，どつちともつかずに苦悶し，果ては若し自分が死んだら老父はどんなになげくだらう等と死後のことまで，思ひ頼ひながらかがんでゐる中に，午前十時頃，人の來る音がしたから，いよいよ來たな，よし，來たらとびかかつてやらうと身を構へてゐると，それは土匪ではなく，黃炳焜君⑥であつたので，握りつめた拳も自然とゆるんだ。そして形勢を問ふと，炳焜君のいふには。

「刻刻危険があなた方の上に迫つて來ました。最早ぐぐぐしてゐる時ではありません。私は今やつと一苦策を案出して來たから，私についてここを脱出しなさい。」

と。我我はその策のどんなものであるかを聞く間もなく、唯炳焜君について出ると、街の曲り角に本島人の婦人⑦がゐる。炳焜君に土匪の居ない合圖をする、我我は之に力を得て、ひた走りに走つて、やつと樸仔脚の北にのがれ出し、牛稠溪を渡らうとすると、右手に武装した本島人二人が我我の方に向つて来るのを見たのでこれはいよいよ最後だと思つた。併し尚多少の距離もあることだし、のがれるだけのがれて見ようと思つて川をわたるのを急いだ。相憎佐分利夫人が懷妊中であつたので、なかなか涉れなかつた。之を助けながら漸く向ふの岸に上つて、あの二人⑧を見たけれども、もうどこにも見えない。とうとう田寮迄逃げて一しよについて来た炳焜君と外一名に案内されて、一軒の民家に入つて休んだ。

川を渡らうと思つて走つて来た路を我我の通る約五分前に一隊の土匪が樸仔脚に向つて通過したさうで、若し我我の通るのが五分早かつたら、途で土匪に出合つて彼等の毒手に斃れたであらうに、僅か五分間の違ひで虎口を逃がれることが出来たのである。これ九死に一生を得た第三回である。

樸仔脚から田寮まで約十町，ここまで無事ににげて来たから，稍稍安心すると同時に非常にのどがかはいたので，半濁の不良水をのんで暫く休んでみると，炳焜君の父君が，男女の本島人服を持って来て是非この服にかへなさいとすすめる。けれども日本男子の面目にかかはるからと思つて，その厚意だけを謝して，變装はしなかつた。それから更に伴はれて北に北にと進み，晝頃樸仔脚を去る一里の後崩山に辿りついた。そこで甲長⑨謝某の家に入ると，急いで晝食の用意をして非常によくもてなしてくれた。この日は夜明けから未だ一物も口に入れてゐない，只半濁の水をのんだだけだけれども，あまりの驚怖と疲勞の爲であらう，誰も飯を食ふものがなかつた。私にしても普通は一杯の日本酒で顔が赤くなるのに，此時だけは多量の臺灣焼酎をあほつても一寸も反應がなかつた。

炳焜君その他は狀況偵察の爲に樸仔脚に歸つた。一同寢室に横はつて休息する。これまでは自身生死の間にさまよつて，他人の事は思ふひまがなかつたが，始めて安心すると同時に，岡君の安否を案じ，何とかして之を確かめようと思つて，人を樸仔脚につかはし又樸仔脚から来た人

にきいたけれども、一寸も分らない。併しその分らない所が即ち安全である證據として稍稍安心した。岡君が萬一彼等の毒手にかかつたものであつたならば必ずその死骸を發見しなければならぬのに、一日中そんなことがないのを見ると、必ずどこかにかくれてゐるに違ひないからである。

人生の問題は甚だ多いけれども、生死の問題を第一とし、金錢の問題を第二とする。今自分は第一の問題を通りこして第二問題に入つたのである。宿舍は無事であつたらうか、衣服や道具は掠奪されかつたらうかなどと心配し出した。此時樸仔脚の方から父兄が來ていふには

「支廳長庄崎惣次郎・支廳員山下矢七・同人妻力ネ・嘉義廳雇阿多秀吉・同船津勝三・郵便局長宮下剛吉・技手藤江長作・雇三橋進・同人妻キノ・公醫鈴木虎雄・商人安藤源助の十一名は殺されました。永野巡查は重傷を負ひ・支廳長妻トヨ・鈴木公醫妻マサ、同長男一男の三人はさらはれ、稅務課員の官舎は火に焼け、支廳長宿舍・郵便局官舎・商人の家等の家財は一つものこらずとられ、その上戸障子・疊に至る

迄。皆或は焼かれ、或はこはされましたが、先生の宿舍は表門も裏門も皆しめてあつたから安心です。土匪が表門を破らうとしたのを、近所の者がだまして行かせたら一物も失つてゐません。」

と。これで第二の問題も無事に通過した。唯切齒憤慨に堪えないのは同胞十一名が怨を呑んで、彼等の毒手に斃れたことである。我我は唯暗涙にむせんで頭をたれるだけであつた。

ややあつてから支廳の藤田警部補から使が来て

「嘉義から應援隊が来て午後五時土匪を撃退し、追跡したけれども、蘆菜埔方面へその踪跡を失つた。併し樸仔脚は今平穩無事ですから早く歸る様に。」

といつてすすめられたが、夜にはなつたし、疲れても居るので、明朝歸るからといつて返事し、夕飯を食て眠らうとしたが、庄民が皆警護の爲だといつてここに集つて来て篝火を焚いてさわぐし、精神も興奮して到底眠るとが出来なかつた。寢返りを打ちながら眠らうとする時、主人が来て

「今土匪が追及して來ましたから、人の氣付かない小屋に御案内しませう。」

といつてくれたが、私は承知せず、甘蔗島に案内してくれよといつて頼んだ、主人は野外は寒いから、といつて止めたが、私か飽くまで甘蔗島を主張して、とうとう布團をかして貰つて、一同甘蔗島に入つた。私がこんなに甘蔗島を主張したのは他でもない、土匪が今一里の道を遠いとも思はないで、追跡して來たのを見ると、必ず甲長を脅かして、我々の所在をさがし求めるに違ひない、甲長も自分の安否にはかへられいから必ほんとうのことをいふであらう。家の中にかくれてさがし出されるよりも、甘蔗島に入つて更に位置をかへて、彼等を捲かうと思つたからである。それで島に入つてからすぐ私南方を、佐分利君は北方を探檢したけれども、南方は十數町の間の一つも甘蔗島がなく、その上陰曆十三夜の月は皎皎と照つて晝よりも明るいから、到底位置をかへることが出来ない。北方はといふと、北港溪がすぐ島の近くゐるから渡ることも出来ず、止むなく運を天に任せて、その甘蔗島にかくれてゐたのである。

秋の虫は千里皎皎たる月になき，夜の風は娑婆と蔗葉を搖がしてゐる。冷氣が身に泌みて思はず身ぶるひをした。跣天踏地とはかういふ場合をいふのであらう。ああ故國遠く離れた南方の地は今や我等に身の置き所さへ與へないのだ。一團五人緘然として敢へて語らうとする者もない。

午後十一時頃，土匪の一群は我我のかくれてゐる所から約一町の所を通り，北港溪をわたつて行つた。之が樸仔脚を襲つた土匪で，蔗菜埔方面で解散し，各各その巢窟に歸つたもので，之等の土匪は斗六方面から來たものである。

午後十二時頃主人が來て，

「もう危険はないから，家に入つてお休みなさい。」  
といつたら，家に入つて寝た。

明けて二十四日，早く朝飯をすまして歸つた。途中で迎ひの者に出合つたから，つれ立つて一緒にかへつて見ると，岡君も無事で出て迎へてくれた。お互そこで萬歳を三唱し無事を喜んだ，婦人達は感極つて只すすりないてゐるだけであつた。岡君は我我と別れてから壯丁につれられ

て、街内の製油工場の油桶の中にかくれてゐたのである。

我々が歸つて來た時は未だ血なまぐさい風が街の中に満ち満ちてゐた。同胞十一名の死骸は郊外の榕樹⑩の下に横つてゐるとの事であつたが、私はこれらの不幸な同胞に敬意を表し、ひたすらその冥福を祈つただけで、侮辱を加へられたその殘骸には接しなかつた。

樸仔脚を襲つた土匪は只物を取るのが目的ではなく一つの革命を起さうと思つて來たのであることは、内地人だけを殺して、本島人には一寸も危害を加へなかつたことを見ても分るし、又飲食物やその他の物を高い値段で買つて一つも奪はなかつたのを見ても分る。

樸仔脚にゐる内地人が支廳構内の者を除いて全部毒手にかかつたに拘らず、公學校職員と家族だけ不思議に全部助かり、しかも一物もとられなかつた事は一は天佑でもあり、又一は炳焜君その他父兄の庇護によるもので、感謝に堪えない次第である。

半歳は黄塵し埋められ、半年はペストに苦しめられたこの樸仔脚に私が滿十三年八ヶ月の長い間勤続したのは只惡因縁のみといへようか。

今や私は病の爲め、止むを得ずこの第二の故郷を捨てて親愛なる知己、子弟と離れようとしてゐる。萬感胸に浮んで感慨に耐へないのは決してわけのない事ではないと思ふのである。ああ

大正三年一月

小泉 順

註：①當地とは朴子のことである

②當時の臺灣米は至つて粗惡で到底今日の比ではない。

③この娘は生徒の姉である。

④縵袍（ランパウ）とはぬのこのわたいれどてらのこと。

⑤秋水とは刀のことである。

⑥黃炳焜氏は現朴子街會計役黃如臨氏の令兄であつて當時支廳の雇員をしてゐた人である。

⑦台湾婦人を見張りに立てたのが即ち炳焜君の一策である。

⑧後に川で見た二人は村落駐在の巡查君であることを知つた。

⑨當時の甲長は今の保正にあたる。

⑩今の公學校裏の榕樹をさす。

# 一五 王得祿

今から二百五十年ばかり前、鄭克塽①が清に降参して以來、我が臺灣にも多くの文人を出したが、武人として名を成し、特に爵位を授けられてその勳功を稱られたものは王得祿一人である。

彼の家は代代江西南城にあつたが彼の曾祖王奇生は康熙六十年の朱一貴の亂の際、千總として臺灣に渡り討伐後居を臺灣に移し、諸羅縣の溝尾庄に住むこととなつた。溝尾庄は即ち今の太保庄太保で、後年王得祿が太子太保の榮爵を授けられてから太保庄と呼ぶやうになつたのである。

得祿は乾隆三十五年五月二十一日に此の溝尾庄に生れたが、幼にして父母を失ひ兄夫婦の手によつて育てられた。生れつき聰明で少年の頃より武藝を好み、僅か十五才にして軍人となつた。得祿が身を軍籍において翌年即ち乾隆五十一年に彼の有名な匪賊林爽文が彰化で亂を起し、彰化城を攻略し、竹塹城②を陥れ臺灣の中北部は殆ど賊の手に落ちてしまつた。同年十二月初旬勝ち誇つた勢で彰化より大軍を率ゐて諸羅城に

攻めよせ、城壁を掘り崩して、雲霞の如く城内に亂れ入り遂に城を陥れた。

此の時彼は年僅かに十七に過ぎなかつたが、諸羅城陥るや直ちに府城③に急を告げて援兵を請ひ、自ら義勇軍五百を募り、總兵柴大紀に従つて討伐に赴き奮戦して諸羅城を回復して之を死守す。然るに賊の勢は日に日に加はつて、周圍は盡く賊にとりかこまれてしまつた。一方援兵はなかなか來ない。その豪雨は永く降り續いて河水は氾濫し病死者は多く兵器彈藥は缺乏し、あまつさへ糧食は絶えて今や城内の人人は木の根を掘り豆粕等を以て飢を凌ぐといふ悲惨な有様であつた。かかる苦しみの中にあつても城中の人人は益益其の志を堅くして城を固守すること十ヶ月に及んだのである。この間得祿は僅か十八歳の若年で官軍を率ゐる度度出て戦ひ賊軍をなやますこと實に三十三回に及び其の勇敢な働きは漸く上官の認める所となつた。

乾隆五十二年十一月福康安は征討使の命を受け、鹿港に上陸して彰化を回復し進んで諸羅を救はんとしたが賊は牛稠溪の險に據つて固く守り

なかなか城中との連絡が取れない。一方官軍の來援を知つた城内の士民は援軍の入城を坐して待つよりは寧ろ敵の圍をついて進み出で援軍との連絡を圖るに如かずとなし、得祿は義勇兵を率ゐて賊の圍をくじき、牛稠溪の賊を破つて漸く援軍との連絡を得たのである。十數ヶ月の間敵の重圍に陥り全く他との連絡を絶たれて苦しみ惱んでゐた城中の人人の喜びは到底筆舌には盡くされない。

その後も得祿は福康安、柴大紀に従ひ各地に轉戦し盡く匪賊を平定した。

此の匪賊討伐に於て得祿は其の功を賞せられて千總に任ぜられた。彼れの若年で此の榮譽を受けた事は異數の拔擢であつて如何にその功の拔群なるかを語るに十分である。乾隆五十八年范夫人を娶り翌年雄志を抱いて支那内地に渡つた。

當時支那海上一帯に互つて海賊多く北は遠く山東地方から南は廣東地方に至る間、或は商船を襲ひ或は沿岸の民家の財物を掠める爲め近海の渡船や沿岸の良民の生活は常に不安であつた。そこで得祿は銅山營の

參將李長庚に隨つて數年の間寢食を忘れてこれが討伐に努めた。

嘉慶九年十一月には海賊掃湯の功により早くも澎湖副將の榮位を得た。命を拜するや直ちに雄躍して澎湖島に渡り専心その任に當つた。然るに澎湖島は台灣門戸であり、一孤島なるため攻めるに易く守るに難き不利な地である。殊に當時の如き海賊の横行甚しい時に於ては一層その詹險を感じた。そこで彼は先づ地理と從來の歴史とにかんがみ其の防備の必要を説いて官民協力して資金を出し沿岸の要所に砲台を築き海賊の襲來に備へた。嘉慶十年正月果して賊魁蔡牽は澎湖島を襲ひ之を占領せんとしたを得祿は前年築ひた砲台を以て之をむかへ撃ち遂に匪賊を走らせた。その後も蔡牽は幾度となく海上を横行して商船を掠める爲め之れが討滅を期して十四年九月蔡牽を定海の漁山沖に追ひつめ連日連夜之を猛撃したので賊はその勢に恐れて外洋に逃げ出さうとした。得祿は之を見て直ちに部下を指揮して其の退路を遮つたので遂に死の免かれざるを知り必死となつて奮戦した。此の時得祿は賊の一彈にあたつて船中に倒れた。けれども勇敢な彼れは再び立つて痛手を忘れ自ら兵器をとつて部

下を勵まし盛に攻撃したので蔡牽も今はこれまでと覺悟して自ら其の船を沈め妻子と共に海に投じたので餘賊も亦投じて海底の藻屑となり或は降つた。嘉慶初年より十數年に互つて支那海上を荒し官民を苦しめた海賊も今は全くその影を絶つに至つた。この報一度上聞に達するや直ちに得祿を子爵に敘し且つ種種な品をお授けになつた。

道光二年得祿は多年匪賊の討伐に従ひ心身の過勞のため六月職を辭して郷里にかへり保養する身となつた。

道光十二年九月復復諸羅に張丙等の一揆が起つて官民を殺害し財貨を掠めて島民を驚かした。此の時得祿は廈門に寓してゐたが、この報を受け直ちに義勇兵五百を募つて水師兵と共に樸仔脚に上陸し官軍と協力して匪賊を討ち十二月遂に之を捕へ漸く亂を平げた。

得祿は其の功により太子小保に敘せられた。張丙の亂を平定するや得祿は城壁の破損の甚しきを見、直ちに城を修築し砲壘を築き倉を設けて穀物を貯へ今後の匪亂に備へた。又彼れは匪亂の多い爲め世人の心を學問に傾ける者の少いのを憂へて城内に塾を設け盛に教育を奨励した。

道光十八年嘉義の沈知等再び亂を起すや得祿は地方の爲めに老齡の身を忘れて三度起つて此の匪賊を滅ぼした。亂平じや功により太子太保の榮位を授けられた。

島の内外は平穩になつたが外交關係は漸く複雑になり各地沿岸の警備が必要となつて來た。二十一年五月得祿は七十二の老軀をいとばず命を奉じて澎湖島に渡り専ら防夷の事に當つた。

同年十二月得祿は多年心身をささげて國事に努めた爲め遂に病を得て十二月二十八日澎湖島に薨じた。

王得祿は始めて林爽文の匪亂に従軍してより大小幾十の戦ひを重ね道光二十年病の爲め職を辭したが嘉義の匪亂出ずる毎に自ら起つて之をしづめ又その傍ら心を教育に用ひ且つ老軀をいとせず澎湖島に止まつて公事につくし遂に病の爲め薨じた。其の忠誠の終始一貫かはる事のなかつたのは實に後生の鑑とするに足るものと言ふべきである。翌年三月清帝は王得祿の功績を賞せられて伯爵を追贈し、太子太師に敘せられた。王得祿の墓は現在東石郡六脚庄双涵にあつて墓域の廣さ約一甲、墓前には

幾十の石像があつて生前の偉勳が偲ばれる。彼れの子孫は今尚大保庄及び嘉義附近に居住してゐる。

註：①○鄭成功—鄭經—鄭克塽。

○清の江南を定むるや、廈門に據りし鄭成功は明の魯王を奉じて臺灣に走り、和蘭人を追ひて、代りてこの地に據り明室の恢復を企てしが遂に志を得ずして死せり。成功の子經も亦父の遺志をつぎ屢屢、清を侵しが、孫克塽に至り幼弱にして將士服せざりしかば、遂に清軍に滅され、以後臺灣は清領となれり。

②竹塹は今の新竹を言ふ。

③府城は今の台南なり。

... 諸君... 諸君... 諸君...

... 諸君... 諸君... 諸君...

... 諸君... 諸君... 諸君...

... 諸君... 諸君... 諸君...

... 諸君... 諸君... 諸君...

... 諸君... 諸君... 諸君...

... 諸君... 諸君... 諸君...

... 諸君... 諸君... 諸君...

... 諸君... 諸君... 諸君...

... 諸君...

## 附 録

### 一、郷土の青年に

幼時私は「家の餅より鄰りの粟團子」といふ言葉を度度きかされた事を思ひ出す。

若い人たちはただ新しいといふ事だけで流行を追ふ。そしてそれが直ちに發展だ、進歩だと考へてゐるものが多いやうである。毎日見ることに馴れてゐる物はその價値がわからない。

或る人が本島人の服を評して、

「本島服は世界中一等經濟的でしかも便利な服だ」と言つた。

大いに味はふべき言葉である。労働にも至つて便利だし、洗濯するにもボタン一つはぶす必要はない。それのに青年たちはその便利な服をぬぎ

棄ててわざわざ労働に不便な服と着かへてゐる。

或る家では息子が家繼ぐやうになると、父が永い間苦心して家の周圍に育ててゐた木麻黄の生垣を惜氣もなく伐り倒して煉瓦塀を築き上げた。

木麻黄が郷土の氣温に適し風致の上から或は土の流失を防ぐ點から言つても煉瓦塀などの遙かに及ばない氣づかずに……。。只新しい物がほしい、人に負けないやうにみえを飾り度いといふ心からこんな事をやつてしまつたのだ。

此のやうに考へて見ると、昔の人は學校こそ卒へて居ないがやつぱりえらかつたのだといふことがうなづける。

その外、一軒の家の中にも或は一つの農具についても、若い者の考へも及ばない程よく工夫されてゐる事と見出すであらう。しかしかやうに言つたからとて決して古い習慣になづむことを勧めてゐるのではない。

郷土のすべてを見る眼を養つて價值のあるものはどこ迄も伸ばし、悪いものは之れを捨てて他から長をとり入れるやうに心がけなくてはならぬ。

附録 二、郷土の調べ方 (一)自分の家について

心ある者が道を歩くと必ず両側の並木を見て、そこに學問のあることを忘れぬであらう。その並木が何の役に立つのか、又その目的にそふには之れ以上の木はないか知ら？等々考へて見るであらう。次に「郷土の調べ方」として掲げたものは郷土を知つて更に郷土を伸ばす方法として一部分だけ載せたのである。

常に朴子街は動いてゐる。その動いてゐる朴子街を充分に見きは今日の郷土よりも明日の郷土をよりよい所とせねばならぬ。

## 二、郷土の調べ方

### (一)自分の家について

(1)家のつくり方

○材料について

○衛生の上から↓通風・採光・井戸と便所との距離

○宅地利用の状況

○風致から見て  
農家ならば

○土地の利用状況

○種苗・肥料の作り方・施し方，購入方法

○作物の変遷

○耕作器具の変遷

○害虫の駆除・豫防方法

○産物の貯藏法・販賣法

○家畜・家禽について↓飼育方法・費用・収益等

(ハ) 商家ならば

○商品の種類及原價と賣價・仕入地

○運送の方法↓購入・販賣の場合及運送費

○販賣の方法↓どの地方が多いか。よく賣れる時期・賣れない時期，

現金と掛（賣買）

○賣殘品の處理

附録 二、郷土調べ方 (二)街の人口の動態について

○商品の賣れ行き，の將來に對する考へ

○客に接する際の態度について

(二)家の衣服しらべ↓保存方法・所有枚數・價格・時代と衣服の流行・耐久性等につき

(ホ)廢物利用の狀況↓例へば(はがき↓土瓶しき，座ぶとん)

(ハ)昔の食物と今の食物との比較

それに依つて現在を考へると，昔の人は夢にも考へなかつた程，  
ぜいたくな點もあるだらう。

## (二)街の人口の動態について

(イ)轉出入者についてきいて見ること

○何の目的で轉出入するのか

○それ等の人人の職業は何か

○どこの地方から來，どの地方に出かけるのか

等等，きいて表をつくつて見ると，此の街の現在及將來を知るのに，

又經濟狀況を知るのによい材料とならう。

(口) 街の婚禮について

- 男女の年齢↓早婚者と晩婚者とを結果から考へて見る
- 婚禮に要する費用↓節約できるものはないか

(三) 土地の價格變動について調べる

畑 (キツ二甲一)			田 (キツ二甲一)		
全五年	昭和四年	年 種別	全五年	昭和四年	年 種別
九三三	一、一八三	上	八一四	一、〇二九円	上
			六六四	八三五	中
七九六	九五七	中	五三四	六八一	下
			七一五	八〇五	上
六四二	七四七	下	六一〇	六九四	中
			四七〇	五六〇	下

店 舗 (一坪ニツキ)		宅 地 (一坪ニツキ)		年 種別
全五年	全四年	全五年	昭和四年	
五〇	六〇	一〇	一五円	上
三〇	三五	五	七	中
一〇	一五	三	五	下

附録 二、郷土の調べ方 (三) 土地の價格變動について調べる

○土地の価格は常に変動するものであるから注意して居なければならぬ。

(四) 街の職業 (昭和五年調査)

計	其他	官公吏		商業		工業				農業		
		七三人	那役所	戸數	種別	戸數	種別	戸數	種別	戸數	種別	
三四七五戸	一五二九戸	一七	街役場	一七	藥種	四	製靴	一六	冶鑄	三五八	自作	
		四三	學校	一一	洋雜貨	二〇	金銀紙	五	物	四九八	自作並小作	
		四	銀行	四八	雜貨	三	線	七	金銀細工	四二九	小作	
		六	信用組合	七	菓子	一二	香精	四	染色	一、二八五	計	
		九	郵便局	一一七	中商業者	六	米	二一	木竹細工			
		一一	醫者	一三二	小商業者	一〇二	麵類		製油			
		一六三	計	三三三	計							

(五) 農業について

(イ) 農業者調査

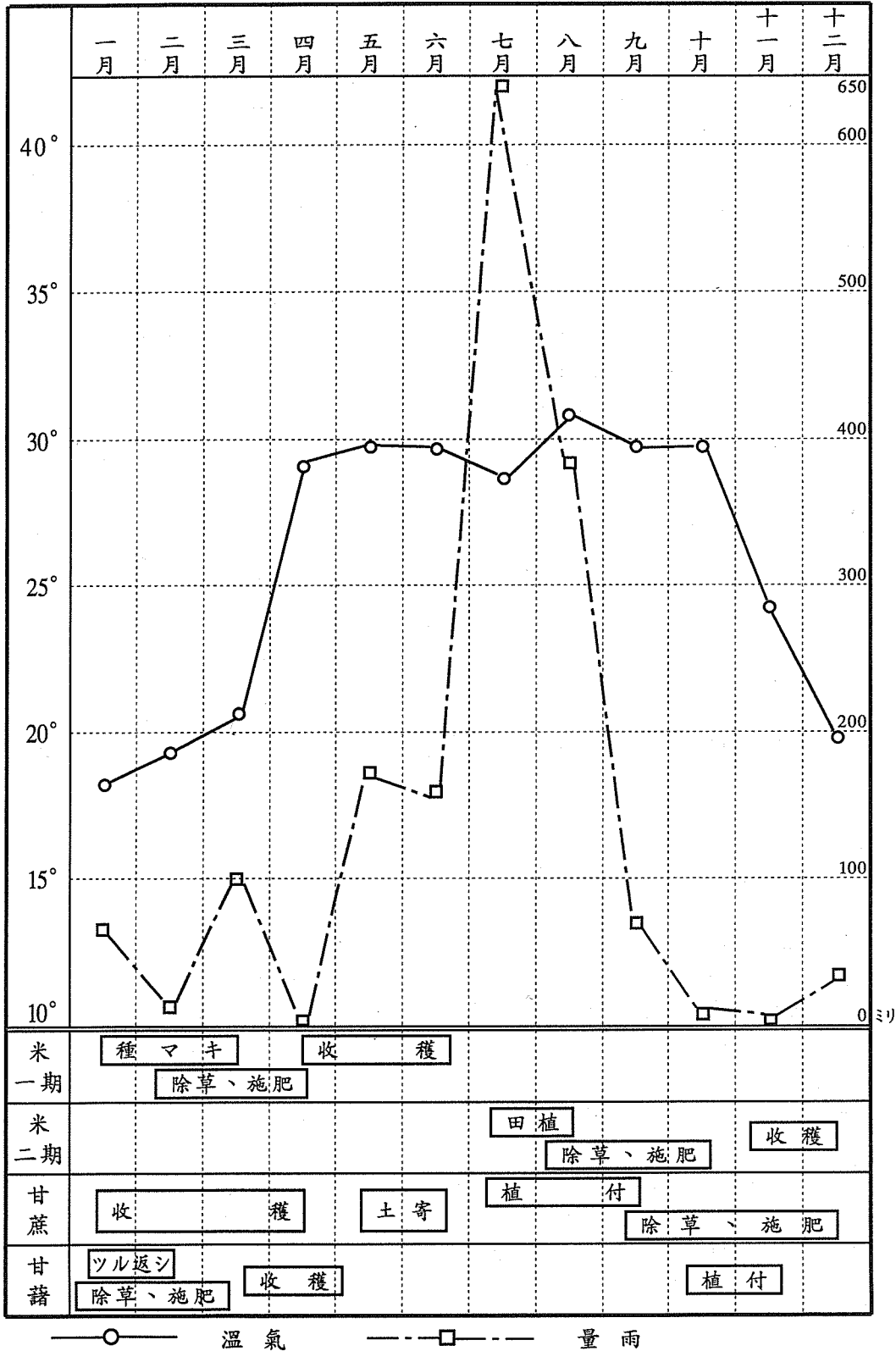
全五年	昭和四年	年		種別
		戸数	人口	
三五八	三六三	戸数	人口	自作
二、二一五	二、二六四	戸数	人口	自作並小作
四九三	四八七	戸数	人口	小作
三、〇八〇	三、一一〇	戸数	人口	計
四二九	四二二	戸数	人口	
二、六七八	二、四七五	戸数	人口	
一、二八〇	一、二七二	戸数	人口	
七、九七三	七、八四九	戸数	人口	

(ロ) 農家戸数と耕地平均（昭和五年）

地目別甲数		農家戸数		農家一戸平均甲数	
八八一甲	田	全戸数	(本島人ノミ)	田	
二七九六甲	畑	農家戸数		畑	
	山林	歩合		計	
一〇三・四甲	原野	三三三二			
三七八〇・四甲	計	一二八〇			
		三八・二九			
		〇・六八八甲			
		二・一九二甲			
		二・八八〇甲			

附録 二、郷土の調べ方 (五) 農業について

(ハ) 主要作物と毎月平均気温及雨量 (昭和五年)



(二) 主要作物面積及收穫高の比較（昭和五年）

植付面積	收穫高	一甲當	作物
七八六・六三甲	九、六九七石	一二、三二七石	水稻
一、二三〇・七八甲	一六、三〇九石	一三、二五〇石	陸稻
二、〇一七・四一甲	二六、〇〇六石	一二、八八六石	計
九六〇甲	一〇五、六三二、〇〇〇斤	一一〇、〇三三斤	製糖用
四甲	四九四、八〇〇斤	一二三、七〇〇斤	生食用
九六四甲	一〇六、一二六、八〇〇斤	一一〇、〇九〇斤	計
七五九甲	二五、一五一、一二〇斤	三三、一三七斤	甘藷
七六甲	一、四〇二石	一八、四四七石	落花生
一四甲	二三石	一、六四三石	胡麻
一四六甲	三三三石	二、二八六石	豆類
六七・五九甲	一、七〇九、八八〇斤	二五、二九七斤	蔬菜

附錄 二、郷土の調べ方 (五) 農業について

(ホ)果樹數と其の收穫高(昭和五年)

年	昭和		四年		種類
	收穫	樹數	收穫	樹數	
五年	一七八〇	二二三	一七八〇斤	二二三本	バナナ
	二〇五二	二三三	二八七八	三一九	木瓜
	八三九二	三一五	七三九〇	二九八	龍眼
	一四七五	四六	一四七〇	四六	文旦
	九一五〇	二〇三	八二五五	二七六	斗柚
	七九七	九一	三一〇	五〇	レンム
	全	全	全	不詳	バンザクロ

(六)交通調査

次の表は高二の生徒が學校の西北の十字街路を通るものについて調査した表です。十一月二十三日は丁度朴子招魂祭の當日だったので人出が平常よりも多い。此の調査は僅か二時間であるが、更に朝六時から八時迄、八時から十時迄といふやうに交代交代で一日中のものを調査すると面白いと思ひます。

(イ)時日 昭和六年十一月二十三日 自午前八時 晴天  
至午前十時

七六七	人	オートバイ	自 客 動 貨 車	自 轉 車	牛 車	リヤカー	人 力 車	
			一七	二	一八七	七	五	二

(ロ)時日 昭和六年十一月二十九日 自午前八時 晴天  
至全十時

五五九	人	オートバイ	自 客 動 貨 車	自 轉 車	牛 車	リヤカー	人 力 車	
			一四	五	二〇二	七	一三	.

(ハ)尚朴子街の交通網を作つてごらん下さい。

### (七)諸事項の部落別調査

次に示す各表は昭和六年十月に高二の生徒が調査したものです。部落に依つて通學してゐないところがあるので朴子街全体の状況を知られない憾みはありますが、之れに依つて各部落の一斑を知ることが出来ると思ひます。

附録 二、郷土の調べ方 (七) 諸事項の部落別調査

(イ) 部落別果樹數調査

計	部落														種目							
	双溪口	下竹園	新寮	鴨母寮	炭後	炭前	大榭柳四保	大榭柳三保	大榭柳二保	大榭柳一保	十一保	十保	九保	八保		七保	六保	五保	四保	三保	二保	朴子一保
九三二	五一三	三	一	三	三八	一六	六	一〇	三	三四	一五六	一七	八	八三	六	・	三	・	・	・	三三	バナナ
二三四	二五	一	・	五	・	八	四	一八	五	一二	八	五	一二	二五	一一	一	三六	・	五	三八	木瓜	
一五八	一二	・	・	・	七	二	八七	三	二〇	一	五	六	八	四	三	・	・	・	・	・	・	マンゴー
三九五五	八六五	一〇一	一三	一八	二五三	三六	五六	一一八五	八〇	三八八	九七	五〇	四〇	一三	二七四	七二	五三	二七	二	一七	三一五	クバンザ
三〇六	・	一	一	・	八	九	・	・	・	三八	一五	一一	・	二一	・	・	四	・	・	二二	九六	文旦
八四七	四六五	九	・	四	・	一二	一八	・	一五	五三	二三	七三	二八	・	二二	二六	六	・	・	一	九三	龍眼
七	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	二	・	・	・	・	・	・	・	・	・	五	ブドウ
六九	・	一	・	七	・	・	・	・	・	七	一一	四	・	二一	・	五	・	・	・	一	一二	桃
八六	・	二	・	・	二五	二	五	・	二	三四	・	・	・	・	・	・	・	・	・	五	一一	レンム
一〇	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	六	・	四	・	・	・	ザクロ
一一	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	六	三	・	・	・	・	・	二	・	ミカン
九	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	九	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	シヤカ
六一	五	一	・	一	六	・	六	・	五	八	一八	七	・	二	・	・	・	・	・	四	・	トヨウ
二三七四	・	・	・	・	二 三 二 五	・	五	・	・	・	・	・	・	・	・	・	五	・	・	・	・	アップル

(口) 部落別家畜家禽の調査

計	双溪口	下竹園	新察	鴨母察	炭後	炭前	四保	三保	二保	大榑柳一保	十一保	十保	九保	八保	七保	六保	五保	四保	三保	二保	朴子一保	部落		種目	
																						水牛	黄牛		雜
一一二一	三二〇	一〇	八〇	三六	九一	一〇一	六二	四八	二〇〇	九四	四三	三〇	.	.	七	五	一	一	.	.	二			牛	
二六九	一〇二	八	一八	五	六	八	一一	一三	.	七	二八	三七	六	.	五	二	.	四	一	一	七			牛	
五	.	.	.	.	.	.	.	.	五	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.			雜
一三九五	四一二	一八	九八	四一	九七	一〇九	七三	六一	二〇五	一〇一	七一	六七	六	.	一二	七	一	五	一	一	九			計	
六一六七	六九二	九五	一九七	三四六	三四五	四四七	三二六	二〇二	五〇〇	八三二	四七五	五二五	一五三	九三	一九五	一四四	一二二	五七	二五	一六五	二三〇			豚	
一四五四	四一〇	九	二九	二	八三	五三	七五	二五	三〇	二五九	九五	一四五	四四	.	五二	三四	三	二	三	一	八一			山羊	
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.			羊
一五七一六	三四五〇	二四七	四四五	四三五	六九〇	一四九〇	五四〇	一二八	四六四	二八四八	一五八六	九三〇	二四六	四三二	二三六	二〇八	二〇〇	三三二	一三八	二九八	四八三			雞	
八〇七一	一三六三	二四	六八六	五五七	六三二	一二〇〇	七四二	四六	三〇	一九九〇	一一三	三二五	九	三七	八六	二三	三八	二八	七	二七	一〇九			家鴨	
一八九八	二三五	四	七九	四九	一一〇	一〇二	一三四	六四	二〇〇	七二	五三	一五四	八三	八七	一二六	四八	四二	一七	二二	七五	一三三			鳩	
九九	一八	.	.	.	九	.	.	.	五	一四	三	一七	.	.	.	.	.	三	.	.	.			鵝鳥	
一八	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	八	.	.	三	.	.	.	.	七	.	.			七面鳥	
八三	.	二	.	.	.	.	.	.	.	.	八	.	.	.	六五	.	.	.	二	六	.			兔	

附録 二、郷土の調べ方 (七) 諸事項の部落別調査

附録 二、郷土の調べ方 (七) 諸事項の部落別調査

(八) 部落別新聞雑誌購読状況調査（各部落本島人家庭ノミ）

計	部落														種目							
	双 溪 口	下 竹 園	新 察	鴨 母 察	炭 後	炭 前	四 保	三 保	二 保	大 楨 榔 一 保	十 一 保	十 保	九 保	八 保		七 保	六 保	五 保	四 保	三 保	二 保	朴 子 一 保
三	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	一	二	・	・	キング
三	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	一	・	・	二	・	・	婦人雑誌
八	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	二	・	・	三	・	・	少年クラブ
一	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	一	海
三	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	三	・	・	小學生
二	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	二	・	・	文藝
四	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	四	・	・	・	・	・	・	・	青年
七	・	・	・	一	・	・	・	・	・	・	二	・	・	二	・	・	・	一	・	・	一	講談クラブ
三一	・	・	・	一	・	・	・	・	・	二	・	・	・	九	三	・	二	・	一	二	・	計
二三	・	・	・	一	・	・	・	・	・	二	・	・	・	五	二	・	二	・	九	・	二	戸數

(二) 部落別時計調査

部落	種目	柱時計	置時計	目覚時計	懐中時計	腕時計	計	一戸平均	全戸數	何レモナキ家	時計屋
朴子一保		五九	一二	三	三	四二	一一九	〇・八	一三六	三五	・
二保		五二	三〇	一	四	一四	一〇一	〇・七	一四四	五三	一
三保		七〇	二三	七	一三	一三	一二六	一・一六	一〇八	二	・
四保		七五	六	五	一一	一六	一三二	〇・八	一七二	四五	・
五保		八六	一八	一八	三二	五四	一九四	一・三	一四五	四二	一
六保		四六	一四	九	一六	九	九四	〇・五六	一六七	八三	一
七保		三二	二二	三一	一五	四三	一三三	一・〇八	一二三	三二	・
八保		五三	二〇	四三	一四	一六	一四六	一・〇五	一三八	四二	・
九保		四一	四	一二	九	二〇	八六	〇・七	一一六	五六	・
十保		四七	一五	一五	九	三三	一一九	〇・六九	一九八	八一	・
十一保		六四	一七	八	三六	二七	一五二	〇・八	一八二	五二	・
大榑柳一保		一三	三	五	四	五	三〇	〇・二五	一二〇	八七	・
二保		三〇	二	・	三	五	四〇	〇・三	一三六	七〇	・
三保		五	五	三	八	二	二二	〇・二四	九五	七九	・
四保		一一	五	三	三	二五	一〇六	〇・二三	一〇六	八六	・
炭前		一五	五	・	六	三	二九	〇・二	一四九	一二五	・
炭後		三〇	一	・	九	二	四二	〇・三六	一一五	七六	・
鴨母寮		六	二	一	三	一	一三	〇・二四	五三	四八	・
新寮		一一	三	一	・	二	一七	〇・二四	一二	五五	・
下竹園		九	七	三	・	八	二七	〇・六七	四〇	一七	・
双溪口		九六	・	一	・	五	一一	一・四	〇・五	二三〇	一五六
計		八五一	二三四	一六九	一八一	三三〇	一七六五	〇・六四	二七三六	一二三二	五

附録 二、郷土の調べ方 (七) 諸事項の部落別調査

## (八) 廟の調査

方方を歩き廻つて一番目につくのは廟の多いことです。それ等の廟について次の事項を調べてごらん下さい。それに依つてその地方の人人の風習などの一斑を知ることが出来ます。

(イ) どなたを祀つてゐるか

(ロ) 廟の由來

(ハ) お祭の日とお祭の日の有様、お祭の方法

(ニ) 維持費その他の諸経費の負担の方法

(ホ) 人人の廟に對する信仰の様子

(ヘ) 常に廟の保護にあたつて居る人はないか（保管人のやうな）又その人と廟との關係について。

## (九) 教 育

人口二萬に足らない此の街に男女兩公學校が設けてあり、兒童の數に

於ても他の地方に比べて比較的多いといふことは街民の一般がそれだけ教育に心を向けてゐるといふ事が考へられて大へんうれしく思ひます。

殊に年年入學者の増加を見、又街に男女の夜學（國語講習所）が設けられて、國語を普及されて居る点、街のために誠によるこばしいことです。

しかし兒童數や學校の卒業生の數が多いからと言つて他の地方よりもこの街が發展してゐるとか、街民が向上してゐると、早合点してはなりません。街民の向上といふことはその一人一人が向上し始めて言ひ得られるのです。

次に昭和七年四月此の公學校兒童の家庭のみの國語普及の状態を調べて見ました。勿論その理解程度は各各人に依つて異つてゐますが、その概略を知ることが出来ます。皆さんもその部落について調べてごらん下さい。此の表に依つて女子の方が男子に比べて遜色のあることや、年とつた人よりも若い者に普及してゐることがうかがはれます。

附録 二、郷土の調べ方 (九) 教育

種別	家族	
	祖	父
國語ヲ解スルモノ	八	七
國語ヲ解セサルモノ	一九二	三九四
計	二〇〇	四〇一
總數ニ對スル	〇・〇四	〇・〇二
理解者ノ比率	〇・三三	〇・〇八六
種別	父	母
	兄	姉
國語ヲ解スルモノ	二九一	八〇
國語ヲ解セサルモノ	五八三	八五一
計	八七四	九三一
總數ニ對スル	〇・三三	〇・〇八六
理解者ノ比率	〇・七六	〇・四五
種別	父	母
	兄	姉
國語ヲ解スルモノ	二九一	八〇
國語ヲ解セサルモノ	五八三	八五一
計	八七四	九三一
總數ニ對スル	〇・三三	〇・〇八六
理解者ノ比率	〇・七六	〇・四五
種別	父	母
	兄	姉
國語ヲ解スルモノ	二九一	八〇
國語ヲ解セサルモノ	五八三	八五一
計	八七四	九三一
總數ニ對スル	〇・三三	〇・〇八六
理解者ノ比率	〇・七六	〇・四五
種別	父	母
	兄	姉
國語ヲ解スルモノ	二九一	八〇
國語ヲ解セサルモノ	五八三	八五一
計	八七四	九三一
總數ニ對スル	〇・三三	〇・〇八六
理解者ノ比率	〇・七六	〇・四五
種別	父	母
	兄	姉
國語ヲ解スルモノ	二九一	八〇
國語ヲ解セサルモノ	五八三	八五一
計	八七四	九三一
總數ニ對スル	〇・三三	〇・〇八六
理解者ノ比率	〇・七六	〇・四五

○公學校兒童就學歩合

年度	性別	
	種別	種別
昭和七年度	就學兒童	一、〇四五
	學齡兒童	一、七一
昭和六年度	就學兒童	一、〇三〇
	學齡兒童	一、六三六
昭和五年度	就學兒童	九七四
	學齡兒童	一、六二一
昭和四年度	就學兒童	九三五
	學齡兒童	一、六二七
昭和三年度	就學兒童	八六八 <sup>人</sup>
	學齡兒童	一、六〇四 <sup>人</sup>
昭和七年度	歩合	六一・〇七
	歩合	四二三
昭和六年度	歩合	六二・九六
	歩合	四三五
昭和五年度	歩合	六〇・一五
	歩合	三九二
昭和四年度	歩合	五七・四七
	歩合	三七〇
昭和三年度	歩合	五四・一一
	歩合	三二〇 <sup>人</sup>
昭和七年度	歩合	二五・七一
	歩合	一、六四五
昭和六年度	歩合	二六・四〇
	歩合	一、五七一
昭和五年度	歩合	二五・七一
	歩合	一、五二五
昭和四年度	歩合	二四・四六
	歩合	一、五一二
昭和三年度	歩合	二二・〇八
	歩合	一、四九四 <sup>人</sup>

## (十) 遊戯・娯樂の調査

(イ) 大人の行ふもの

(ロ) 子供の行ふもの

(ハ) それ等の遊戯娯樂の長所短所について考察してごらん。

## (十一) 街民性について

先づ自分自身を反省し、それから近所の人人について調べ、次第に廣い範圍の人人について調べてごらん下さい。

## (十二) 街に於ける主要日用品の價格

常に物價の変動はあるものですからそれ等の一覽表を作つておいて、変動ある毎に記入して行くこと、尚、その変動はどんな原因に基いてあるかと言ふ点についても考へて行くことが大切です。

## (十三) 郷土に於ける子供の年中行事表

次に年中行事表を作つて見ました。之れは街の行事や遊び、毎月の自然物のあらましを月別に書いたに過ぎません。これをもとにして皆さ

附録 二、郷土の調べ方 (五) 郷土に於ける子供の年中行事表

んの毎年やること、見るものなどを記してもつと詳しい行事表を作つてごらん。

七	六	五	四		月		
			三〇	二九	日	行	
一一	一〇 一七	七頃 二七	三〇	二九	三一	日	行
暑中休暇	時の記念日 始政記念日 短縮授業開始	立夏 海軍記念日	靖國神社祭 建功神社祭 身体検査	天長節	入學式 神武天皇祭	行事	行事
・水遊び ・水泳ぎ	・百日草 ・万壽菊 ・蓮霧 ・マンゴー ・こほろぎ ・さりぎりす ・螢	・つくばね草 ・ばら ・くちなし ・寶探し ・鯉のぼり	・李 ・遠足	・鶏頭 ・雲雀	・日日草 ・アスパラガス	自然物及遊び	
・田草とり	・田を耕す ・第二期作田植	・苗床(第二期) ・第一期作收穫 ・甘蔗植付始まる	・甘蔗收穫終る ・もとの先生へお手紙を ・お墓詣り			仕事其他	
	五月 五		二二 二三	二二	三月 三	月日	行事(旧曆)
	五日祭		媽祖祭		三日祭	行事	



附録 二、郷土の調べ方 (土) 郷土に於ける子供の年中行事表

	一 二	一 二	一 二	三
	八頃 一〇 二三	一五 二五 二八	一 二 三 四 五 六 七	三 六 一〇 一五 二五
	立冬 國民精神作興詔書御下賜 記念日 新嘗祭	年賀郵便取扱開始 大正天皇祭 クリスマス 終業式 通信簿 冬休み 除夜	四方拜 拜賀式 書初め 初荷 元始祭 政治始め 店開き 新年宴會 始業式 七草粥	節句 地久節 陸軍記念日 學藝會・展覽會 卒業式 修業式 通信簿 褒賞授與 學年末休業
	かくれんぼ シネラリヤ 柱 鬼 つばめ 楊 桃	金盞花 大賣出し 佛桑花	石竹 カーネーション トマト 霜(年に依り) 凧	フロックス こま 金蓮花 茄子 霞
	落花生の植付	年賀状 冬休みの計画を立てる 第一期作苗床	書き初め 冬休み生活反省 茄子の植付 田を耕す 落花生收穫	田の草とり 施肥 お墓詣り 休み中の計画を立てる 新學年の準備
	一五	十一月	十二月 二四 二九 三〇 冬	三月
	三界公生	冬至	送神 除夜	清明祭
	新 年	祖先の祭 迎公生 上天元	新 年	

## (四) 迷信の調査

(イ) 夢などに依つて運がいいとか、病人は全快の見込がないなど言ひ傳へてゐるものが多いやうです。その他の事柄についても随分たくさんあると思ひますから、それ等の迷信をすべて記しておいて、十分之れについて考察して見るのが大切です。それ等の中には全く據りどころのないものや識者の顰蹙を免かれぬものが随分ありますから一日も早く街民の蒙をひらいてやりませう。

## (ロ) 疾病と民間療法

。ト占師を招くとか、つまらない昔からの言ひ傳へに拘はつてゐるなどは一日も早く改めねばならぬ。これについて聞いてゐる事を出来るだけたくさん集めてごらん。

## 。醫藥的動物及植物

昔から行はれてゐる療法で動植物を用ひるものも郷土には非常に多い。中には高價な賣藥に劣らねやうなものが無いとも限らない

からつこれも成る可く廣く調べ實物を採集して見る事も大切です。

### (五) 傳染病について

次に掲げてゐる表を見れば郷土の人人が如何に衛生觀念に乏しいかがよくうかがはれる。殊にかかる傳染病については罹つてゐる人も、さうでない人もお互が注意し合はなくてはならないのに、郷土の生活を見てゐると、かうした事には全く無關心であるかのやうに思はれる。

本街は殊に往時十數年の久しい年月に互つてあの恐ろしいペストに苦しめられてゐる。その苦しさ、悲惨の狀態は多くの街民の頭に刻まれてゐる筈であるのに………。

「喉もと通れば暑さも忘る」といふ言葉があるが、やはりその例に違はず今日の街民の頭には往時の苦しみの幻影すらも止めてゐないやうである。

傳染病は他の病氣と異つて一人の不心得が直ちに街全体に災ひするのであるからお互に充分氣をつけて行かねばならぬ。

殊に街の商況が盛になれば、それだけ人人の出入も多くなるのであるから社會に及ぼす迷惑も亦大きいわけである。  
 。傳染病患者及死亡者調査

病名 種別	年度	
	昭和三年	昭和四年
マラリヤ	患者數 七、一八〇 死亡者數 二三	患者數 四、二九〇 死亡者數 一三
肺結核	患者數 二、六九〇 死亡者數 五三	患者數 二、六九八 死亡者數 五〇
麻疹	患者數 一三一 死亡者數 五	患者數 不詳 死亡者數 三
丹毒	患者數 死亡者數	患者數 六 死亡者數 一
百日咳	患者數 一四 死亡者數	患者數 死亡者數 三〇
傷チフス	患者數 三 死亡者數 二	患者數 八 死亡者數 四
破傷風	患者數 一一 死亡者數 九	患者數 一〇 死亡者數 五
トラホーム	患者數 九、九一三 死亡者數	患者數 一〇、三一七 死亡者數
計	患者數 一九、九四四 死亡者數 九二	患者數 一七、三二九 死亡者數 七六
	患者數 死亡者數	患者數 一七、一三二 死亡者數 五一
	患者數 死亡者數	患者數 死亡者數

附録 二、郷土の調べ方 (五) 傳染病について

### (六) 死亡者調査

次に昭和三年より三年間に於ける朴子街の死亡者の年齢と死亡月別死亡原因とを示した表を掲げておきます。

それに依つて幾歳頃の人が一番多く死んでゐるかを知つてその原因などについて考へ少しでもそれを防ぐやうにとめませう。又月別を示した表に依つて人体と氣候との關係なども考へて見ることも大切です。

#### (イ) 年齢別死亡調査

年齢		年	
自一才	至五才	昭和三年	二二三
自一才	至五才	昭和四年	二一四
自一才	至五才	昭和五年	二一八
自一〇才	至一〇才	昭和三年	二一
自一〇才	至一〇才	昭和四年	八
自一〇才	至一〇才	昭和五年	一二
年齢		年	
自四六才	至五〇才	昭和三年	二五
自四六才	至五〇才	昭和四年	二三
自四六才	至五〇才	昭和五年	六
自五一才	至五五才	昭和三年	一九
自五一才	至五五才	昭和四年	一五
自五一才	至五五才	昭和五年	一二

附録 二、郷土の調べ方 (其) 死亡者調査

計	至四一才 自四一才	至四〇才 自三六才	至三五才 自三一才	至三〇才 自二六才	至二五才 自二一才	至一六才 自一六才	至一五才 自一才
四九一	一四	二三	一九	一八	二四	一五	一七
四四三	一九	一二	二二	一七	一六	一七	八
三五五	九	一三	七	五	六	一〇	八
	至九〇才 自八六才	至八五才 自八一才	至八〇才 自七六才	至七五才 自七一才	至七〇才 自六六才	至六五才 自六一才	至六〇才 自五六才
	.	五	一三	九	一二	一二	二二
	.	.	九	一〇	一四	一三	二三
	一	一	六	六	九	一二	一二

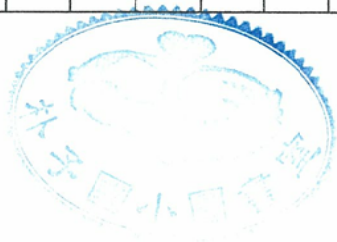


附録 二、郷土の調べ方 (共) 死亡者調査

淋巴腺結核	肺門部	腎臓結核	腎臓炎	破傷風	脳震盪脳出	脳膜炎	脳充血	脳貧血	脳溢血	心臓衰弱	心臓瓣膜病	老衰病	初生兒黄疸	マラリヤ	
一	・	五	五	一	三	一	二	一	二	二	二	四	一二	一三	
二	一	一二	四	・	三	三	一	二	・	二	六	五	一〇		
一	・	四	五	・	二	・	・	二	・	・	三	一二	五		
一	・	五	・	一	三	・	二	二	一	・	四	四	八		
一	・	五	四	・	・	一	二	一	・	・	二	一二	三		
一	・	五	三	・	一	・	一	・	二	一	三	三	五		
關節炎	半身不隨	多發性筋炎	ン發疹	全身へフラ	全身濃症	硬變	肥大性肝臓	扁桃腺潰病	胃潰症	腹膜炎	膿胸	肋膜炎	萎縮腎	動脈硬化症	發育不良
・	一	・	一	一	二	一	・	二	・	五	・	一	二		
・	・	一	・	・	・	・	・	・	一	・	二	・	三		
・	・	・	・	・	一	一	一	三	一	三	二	一	三		
一	・	・	・	・	・	・	・	一	二	六	三	・	・		
・	・	・	・	・	・	・	・	一	三	五	・	・	四		
・	・	・	・	・	二	・	・	二	・	二	・	・	・		

附録 二、郷土の調べ方 (共)死亡者調査

脚 氣 腫	衝 心 性 脚 氣	早 生 兒	肺 浸 潤	膀 胱 炎	腸 チ フ ス	麻 疹	腸 虫 病	十 二 指	臍 帶 出 血	胃 出 血	子 宮 出 血	坐 骨 神 經 痛	左 側 骨 折	紫 斑 病	流 行 性 感 冒
.	.	二	.	.	.	二	一	.	.	.	.	.	.	.	二
.	.	.	.	.	二	三	.	.	一	一	.	.	一	三	
一	.	三	一	一	三	三	.	.	.	.	.	一	二	四	
.	一	一	.	.	一	.	.	一	.	.	.	.	.	.	.
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	一	.	.	一
.	.	一	.	.	一	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
麻 痺 狂	ヘルニア	ワ ル 氏 病	ブ ル シ 病	テ タ ヌ ス	乳 腺 癌	舌 癌	肝 臓 癌	水 癌	頸 部 癌	顎 下 癌 症	胃 癌	服 毒 自 殺	背 柱 骨 折	リ エ ス	背 椎 ア
.	.	.	.	一	.	.	.	一	.	.	一	.	一	.	.
.	.	一	一	.	.	.	.	一	.	一	一	.	.	.	一
.	.	.	.	.	.	.	一	.	.	.	一	.	.	.	.
.	.	.	.	.	.	.	.	一	一	.	一	.	.	.	.
一	一	.	.	.	.	.	.	.	.	.	一	一	.	.	一
.	.	.	.	.	一	一	.	.	.	.	一	.	.	.	.



附録 二、郷土の調べ方 (共) 死亡者調査

産褥熱	黒水熱	生力沈衰症	敗血症	肝硬変症	溺死	壓搾死	轢死	丹毒	癩病	縊死	中毒	燐中毒	昇汞中毒	生力薄弱		
・	・	・	一	一	一	・	・	・	・	一	・	・	一	・		
二	・	・	・	・	一	・	・	・	・	一	・	・	・	・		
・	一	一	三	二	三	・	一	二	一	二	・	・	・	・		
二	・	・	二	・	一	・	・	・	・	・	一	・	・	・		
・	・	一	一	・	三	一	・	一	・	五	・	・	・	・		
・	・	一	四	一	一	・	・	一	・	・	・	一	・	一		
不全	僧帽弁閉鎖	縮心症	ウマチ	關節リ	火傷	心臓麻痺	疫痢	急性貧血症	ネフローゼ	扁桃腺炎	哺乳障碍	微毒	癩病	喘息	膿毒症	中酒麻痺
一	・	一	一	・	一	・	・	・	・	一	・	二	一	二	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	一	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	一	・	・	・	・	・	二	・	四	・	・
・	一	・	・	・	・	・	一	・	・	・	一	・	一	一	・	・
・	・	・	・	・	・	一	一	・	一	二	・	四	・	四	一	一
・	・	・	・	・	・	・	一	・	・	一	一	四	・	四	・	・

附録 二、郷土の調べ方 (共) 死亡者調査

メ レ ナ	初 生 兒	百 日 咳	肝 臓 萎 縮	背 部 濃 症	脊 髓 病	腦 水 腫	肝 臓 炎	水 腫	横 隔 膜 病	腹 水	盲 腸 炎	ン ザ	イ ン フ ル エ
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
.	.	.	.	一	.	.	.	.	.	.	.	.	.
.	.	.	.	一	.	二	一	一	一	一	一	.	.
.	.	.	.	.	一	.	一	.	.	.	.	一	.
.	.	.	一	一	.	.	.	.	.	.	.	.	.
一	一	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
合 計			計	尿 毒 症	肺 澎 脹 不 全	腸 捻 轉	佝 僂 病	萎 黃 病	神 經 衰 弱 症	頭 部 瘧	腸 膜 炎	喉 頭 結 核	
四 九 一			二 六 九	.	.	.	.	.	.	.	一	一	.
			二 二 二	.	.	.	.	.	.	.	一	.	.
四 四 三			二 五 七	.	.	一	.	一	一	一	一	.	.
			一 八 六	.	.	.	一	.	.	一	.	.	.
三 五 五			二 〇 七	一	.	.	.	.	.	.	.	.	.
			一 四 八	.	一	.	.	.	.	.	.	.	.

(終り)

# 四、郷土史年表

年	月日	重なる事項
明治二十八年	一〇、一一 不詳	混成第四旅團長伏見宮貞愛親王殿下布袋嘴に御上陸 キリスト教傳來 甘牧師教會堂を建設す
三十年	九、一	朴子郵便局開設
三十一年	一〇、一	朴子公學校開校
三十二年	四、一七 八、五 一〇、一	朴子公學校に教育勅語御下賜 暴風雨襲來 朴子公學校速成科卒業式舉行
三十四年	一一、二三	土匪樸仔脚支戸を襲ひ支戸長以下十一名殺害さる
三十五年	六、一一 七、一二 一〇、九	暴風雨の爲め牛稠溪氾濫し被害多し 兒玉總督南部巡視の爲め當地通過 宮本待從武官地方巡視の爲め來朴さる

附録 三、郷土史年表

附録 三、郷土史年表

三十六年	八、一九	暴風雨
三十七年	一一、一七 四、五 七、一九 一一、七	道路開通式盛大に舉行さる（嘉義より各所に通ずる） ペスト病流行 暴風雨襲來 地震あり
三十八年	一、六 三、二七 六、二 一二、二七	旅順開城大祝賀會 朴子公學校本科第一回卒業式舉行 日本海海戰祝賀會 朴子公學校新校舍落成移轉
三十九年	三、一七 四、九 四、一九 八、二九	嘉義广下未曾有の大地震 ペスト病大流行 嘉義广下再度の大地震 暴風雨襲來
四十一年	一、三一	ペスト病猖獗 捕鼠の獎勵（五日間に四万四千三百三十四匹を捕へる）
四十二年	八、二九	日韓併合祝賀提灯行列

附録 三、郷土史年表

四 年	三 年	二 年	大 元 正 年	四 十 四 年	
<p>一四、二九 一一、一〇 一二、一五</p>	<p>一五、一八 六、三〇 一一、八</p>	<p>五、一五 七、一九</p>	<p>五、一 九、一六 一二、一三</p>	<p>六、 九、一</p>	<p>一二、一八</p>
<p>内田民政長官地方巡視ノ夕メ來朴 御大典奉祝提灯行列 配天宮落成式舉行 津田广長臨場</p>	<p>ペスト病大猖獗 暴風雨 青島陥落祝勝提灯行列</p>	<p>降電 暴風雨襲來</p>	<p>朴子小學校開校 未曾有の大暴風雨襲來 被害者千二百余名 九月の暴風雨被害者に對する御下賜金傳達式舉行</p>	<p>本島人男子の斷髮行はる 暴風雨の爲め出水</p>	<p>朴子・嘉義間の汽車開道</p>

附録 三、郷土史年表

五年	六年	七年
<p>七、二七 一一、三</p>	<p>一、一四 四、二六 九、二四 一一、二 七、一 一〇、二二</p>	<p>一、六 二、二七 四、二五 六、六 九、一八 一一、三〇 一二、一 九、一</p>
<p>朴子信用組合設立 立太子式奉祝提灯行列</p>	<p>火災（四戸全焼） 旋風豪雨 被害多し 同風會主催の國語研究會 朴子小學校落成式 嘉義に於て飛行大會行はる 北白川宮成久親王殿下御渡台遊ばさる</p>	<p>小山支広長・台北広へ轉任・東石支広長は田村菊三郎氏に決定 ベスト病熄滅祝賀會 朴子公學校附近の廢墓地整理 安東總督 依願免官 明石中將 總督となる 電燈始めて点火 愛國婦人會主催善行表彰式舉行 補助貨幣不足のため代用切手發行 防鼠の爲め設けたる亞鉛板撤去</p>
		<p>相賀広長總督府土木局長に、相川茂郷氏嘉義広長となる 臺灣教育令發布</p>

九 年	八 年
<p>一、二、六</p> <p>枝川知事初巡視</p> <p>國勢調査施行</p> <p>陳添貴氏外十四名街協議員任命</p> <p>朴子街役場設置 黃媽典氏街長となる</p> <p>森永信光氏第一代の郡守に任命さる</p> <p>自治制度の發布 樸仔脚支戸を廢し東石郡役所を置く</p> <p>府令第四八號を以て街庄の名稱及管轄區を定められ朴子街改む</p> <p>樸子幼稚園開園式</p> <p>農産物品評會開催（五日間）高田殖産局長相川広長來朴</p>	<p>五、一九 嘉義銀行朴子出張所開設</p> <p>五、七 皇太子殿下御成年式（奉祝會）</p> <p>六、二八 歐洲大戰講和條約調印，七月一日全祝賀會</p> <p>八、二五 暴風雨襲來</p> <p>八、二六 暴風雨襲來</p> <p>九、 コレラ病大流行</p> <p>一〇、二五 暴風雨被害に對し參万円御下賜せらる</p> <p>一〇、二四 明石總督薨去（府葬） 田健次郎男總督となる</p> <p>一一、一 初代軍司令官陸軍大將柴五郎氏任命さる</p> <p>一二、二八 台南聯隊守永隊長以下千二百名來朴</p>

附錄 三、郷土史年表

十一年	十年	
<p>一、一〇 三、 八、二二 九、二八</p>	<p>一〇、二五 一〇、一 九、一四 九、三 八、三一 八、八 八、六 七、四 五、二二 三、一〇</p>	<p>一二、七 七、二四 一〇、二〇 一一、一</p>
<p>本日午前九時四十分相当強度の地震あり 脳脊髄膜炎流行 暴風雨 全</p>	<p>東石自治會發會式 台灣第二聯隊司令官奥田少將巡視 コレラ病大流行につき全街民に予防注射 暴風雨 街中に悪鬼横行の噂盛につき人心安定のため媽祖祈禱 在郷軍人會東石分會發會式 御外遊中の皇太子殿下御歸朝，御安着奉祝會 暴風雨 自治制施行一週年記念式提灯行列 吉岡州知事巡事</p>	<p>巡視中の枝知事布袋港外にて行方不明の報傳はり媽祖廟にて一行の無事を祈願せり 暴風雨のため被害甚大 久邇宮邦彦王殿下並全妃殿下御來台 御離台</p>

附錄 三、郷土史年表

	十三年	十二年	
<p>一、二六 五、一〇</p>	<p>一、一〇 四、一二 四、一八 六、九 九、六 一二、二七</p>	<p>二、一一 二、一七 三、三 三、一八 四、一 四、七 五、二五 九、二七</p>	<p>一〇、三〇</p>
<p>皇太子殿下御成婚奉祝會 朴子街役場落成式舉行 園藝品評會 孝子節婦善行者表彰喜多知事 大 竹内務部長臨場 大婚二十五年奉祝會</p>	<p>松井州知事巡視 納税優良區の表彰 東石郡公會堂の開館式 暴風雨 第三代郡守桑原氏 着任</p>	<p>節婦及優良保正の表彰式 高明寺の入佛式 嘉南大圳管理者 枝徳三氏來朴 腦脊髓膜炎發生 予防注射 朴子女子公學校分離開校 齋藤元壽郎氏第二代郡守となる 故伏見宮貞愛親王殿下布袋嘴御上陸記念碑除幕式 暴風雨</p>	<p>朴子婦人會發會式</p>

附錄 三、郷土史年表

昭和 二年	昭和 十五年 (元 年)	十四 年
<p>二、一一 二、一六 三、二七 四、一二 六、一一 七、一六 八、二五 八、三〇</p>	<p>一、一五 二、一七 五、一 五、二七 六、二八 一〇、一七 一二、二五</p>	<p>七、八 九、一四 一〇、一 一〇、三一 一二、二一</p>
<p>優良街庄及篤行者義僕の表彰 桑原郡守 台南市助役に轉任 秋永長吉氏後任郡守に決定 東石農業補習學校開校式 知事臨場 午後一時九分地震あり 鴨母寮分教場開校式 暴風雨 地震あり 片山知事初巡視</p>	<p>信用組合第十回總會開催 席上役員の攻撃等大紛争 物産品評會及教育警察展覽會(三日間) 東石農業補習學校開校 木下内務局長地方巡視 午後一時四十一分 地震(被害なし) 暴風雨 大正天皇崩御 弔旗掲揚</p>	<p>暴風雨襲來 全 國勢調査施行 天長節祝日・孝子節婦善行者表彰 降霜 作物の被害多し</p>

		三 年	
一、一三	東石橋渡初式舉行	一二、二五	朴子公學校校庭に於て大正天皇御一年祭遙拜式舉行
一、一四	東石郡役場落成式 片山知事臨場	二、一一	紀元節 優良街庄 十五ヶ年勤績吏員篤行者表彰
二、三	街庄聯合品評會 市街の裝飾 假裝行列 旗行列 媽祖行列	四、二九	天長節 祝賀會及奉祝旗行列 行はる
三、九	故久邇宮邦彦王殿下の官民合同追弔會	九、五	暴風雨 牛稠溪大出水
五、六	公會堂に於て自治會主催の民眾音樂會	九、一八	秋永郡守 依願免本官 齋藤拾雄氏郡守に任命さる
五、二七	朴子救濟會初會式	九、二八	秋父宮殿下御成婚・官民合同奉祝會開催
七、一八	片山知事巡視	一〇、一	朴子公學校創立三十周年記念式舉行
暴風雨		一〇、二三	信用組合某書記 公金消費事件發覺
		七、三〇	二宮第二聯隊長地方方巡視のため來朴
		一一、一〇	御大典奉祝式舉行 奉祝宴 提灯行列
			八十才以上の高齢者二十九名に天杯及酒肴料御下賜の傳達式

附錄 三、郷土史年表

五 年	
<p>一〇、二九 一〇、二四 一〇、一 九、二八 七、三一 七、三〇 七、一一</p>	<p>八、一〇 八、一一 九、六 一〇、二 一〇、一三 一一、三 一一、一六</p>
<p>霧社討伐中の坂井巡查戦死す 杉本文教局長來朴 男女兩青年團合同例會に臨席 第二回國勢調査施行 暴風雨被害者に對する御下賜金の傳達式 暴風雨 名尾知事地方巡視のため來朴 着、當地に一泊 分着朴小憩の後北港に向ふ、後續部隊は市街戦をなしつつ 午後二時半</p>	<p>全 被害甚大 朴子嘉義間の汽動車溪南駛附近にて脱腺 負傷者三十余名 神宮式年遷宮式遙拜式舉行 東石忠魂碑改修除幕式舉行 菱刈台灣軍司令官除幕式臨場 明治節 自治會主催の朴子官民合同國民体育會開催 朴子街蔡德來氏外四名の宅全焼 郡下畜産大品評會 朴子に於て開催 朴子方面委員設置 石塚總督巡視のため來朴 役場に於て無料診斷をなす 赤十字社の巡迴診療團來朴 役場に於て無料診斷をなす 台灣歩兵第二聯隊の一部耐熱行軍のため來朴、前進部隊は午前九時三十分着朴小憩の後北港に向ふ、後續部隊は市街戦をなしつつ 午後二時半</p>

六 年	
一一、六	名譽の戦死者坂井巡查部長の警察葬は名尾知事臨席のもとに盛大に行はる
一二、八	台南州下大地震 被害甚大 霧社討伐隊歸朴
一二、九	討伐隊の大慰勞會
一、一六	總督石塚英藏氏依願免本官 太田政弘氏臺灣總督に任命さる
一、一七	總務長官人見次郎氏依願免本官 高橋守雄氏總務長官に任命さる
四、一四	濱口内閣總辭職 若槻禮次郎男に大命降下
五、九	名尾知事依願免本官 横光吉規氏臺南州知事に任命さる
五、一七	渡邊臺灣軍司令官來朴
五、二八	納税優良區の表彰
五、三一	庶務課長大輪季八氏嘉義郡へ 後任は森安朝情氏
六、五	賀陽宮殿下本日御來臺
六、三〇	台南州警務部長坂口氏來朴
七、三	小栗内務局長地方巡視のため來朴
八、六	横光州知事初巡視
八、一	デング熱大流行 州下の患者五万人を突破す
九、二三	野田衛生課長のデング熱予防講演會
一一、二三	朴雅吟詩社創社十周年記念式
一二、一三	朴子招魂祭三十周年記念につき盛大に行はる 犬養總裁に大命降下

七 年	
一、一三	總務長官木下信氏休職 新に平塚廣義氏任命さる
三、二	總督太田政弘氏辭職後任は 南弘氏に決定
三、一五	州知事更迭 今川測氏任命さる
五、一五	犬養首相遭難 二十二日齋藤實男に大命降下
五、一九	故犬養首相の遙弔式を午後一時より高明寺に於て行へり
五、一九	今川知事巡視
五、三〇	臺灣總督更迭(後任は中川健藏氏に決定)
六、二八	川村内務部長巡視
七、二	郡下の保正會議及保正中の功勞者表彰，濟生會發會式
七、三〇	明治天皇二十周年祭遙拜式
八、四	暴風雨 下双溪に被害甚大
八、一二	下双溪水害視察のため知事來朴
一〇、二九	午後一時高明寺に於て故坂井巡查部長の追悼法會行はる
一一、二〇	恩賜診療行はる
一一、二四	朴子街助役 郭灶方氏任期滿了 高木隆吉氏後任となる
一二、一	地名の改稱(鴨母寮 蒜頭の如し)
四、二七	靖國神社臨時大祭につき官衙學校休業
四、三〇	嘉義支部庭球爭霸に於て朴子團優勝す
六、二六	平塚總務長官巡視
七、四	第一艦隊基隆入港
七、一〇	伏見宮殿下 布袋御上陸記念碑御成 街民舉つて宮殿下の奉送迎

九 年	八 年
<p>二、一 二、二〇 二、二三 三、一 四、二七 五、二〇 六、五 七、三 七、二〇</p>	<p>九、一八 一、三 一、七 一、五 一、二三 一、二九</p>
<p>紀元節祝賀會 建國祭舉行 台灣國防義會發會式 庶務課長異動（森安朝情氏は州勸業課へ後任は小田廉吉氏） 本日より四日間 皇太子殿下御誕生室中祝賀宴開かる 滿洲國帝制實施 靖國神社臨時大祭につき各官衙學校休業 臺南新報主催の嘉義台南間の自轉車繼走行はる （産業通路完成祝賀のため） 故東郷元帥の國葬につき街主僱の遙吊式行はる 齊藤内閣辭職 岡田啓介大將に大命降下 暴風雨襲來 應菜埔に浸水 郡下被害甚大</p>	<p>高明寺に於て滿洲事變戰没者の慰靈祭行はる 朝香宮妃殿下本日午前一時十五分薨御遊げさる 明治節の祝賀式并運動會中止 本日より國民精神作興週間—早天修養會（一週内）行はる 朴子上水道起工式 午前六時三十九分 皇太子殿下御誕生遊ばさる 皇太子殿下御命名式につき奉祝賀會及奉祝提灯行列を行へり</p>

邱奕松 輯錄

樸樹の蔭

中日文補充本



樸仔脚公學校  
朴子公學校  
朴子東國民學校  
朴子鎮第一國民學校  
朴子國民學校  
朴子國民小學





## (一) 朴子公の始り

邱奕松 輯録

明治卅一年十月一日台灣公學校令發布と共に同年九月八日開設せられたる、嘉義國語傳習所樸仔腳分教場の校舎、宿舍及生徒を其の儘引受け開校す「樸仔腳公學校」と曰く。

校舎 魚仔市耶穌教會堂

宿舍 媽祖廟内

職員 教諭稻熊喜之助（明治卅一年十二月十九日免官）

雇 蔡德輝（明治卅二年九月廿九日解職）

生徒 速成科三三名

本科 八名

明治卅二年十月一日速成科卒業式及第一學年修業式及本校第一回開校記念式を舉行す。

訓導郭伯秋

(明治卅一年八月卅日至卅七年七月廿五日  
水堀頭公轉出)

教諭武藤淑人

(明治卅一年十二月廿一日至卅二年二月廿  
八日死亡)

教諭佐分利山三

(明治卅二年一月廿三日至卅五年八月十六  
日嘉義小學轉出)

雇 黃炳焜

(明治卅二年十月九日至卅四年三月卅一日  
解職)

教諭兼校長小泉順

(明治卅三年六月二日至大正三年一月廿六  
日斗六公學校轉出)

雇 黃及三

(明治卅四年三月卅一日至卅五年七月廿八  
日解職)

雇 黃建昇(漢文)

(明治卅四年四月至卅五年七月廿八日解職)

教諭岡辰次郎

(明治卅四年四月十日至卅五年四月廿九日  
嘉義公轉出)

訓導羅渙之

(明治卅五年八月卅日至卅六年七月十八日  
打貓公轉出)

雇 張麟書

(明治卅六年一月廿三日至卅八年七月卅一  
日解雇)

教諭谷口東作

(明治卅六年七月十六日至四十年四月廿日  
打貓公轉出)

訓導陳登元

(明治卅六年七月十八日至卅八年五月廿四  
日嘉義公轉出)

訓導王殿沅

(明治卅七年七月廿五日至卅九年八月廿三  
日水堀頭公轉出)

訓導蕭嚴傳

(明治卅七年七月廿五日至卅八年七月卅一  
日解職)

雇 黃氏寶

(明治卅七年 死亡)

雇 黃氏等

(裁縫)

(明治卅七年十一月廿三日至四十年四月四  
日解職)

## (二) 日本時代の歴代校長先生紹介

邱奕松 輯録

### 第一代校長 小泉 順 (一八七九—一九一四)

茨城縣人，明治廿五年茨城縣師範學校卒業，内地の小學校訓導として七ヶ年間勤務，卅三年台灣總督府國語學校講習科卒業，六月公學校教諭として樸仔腳公學校初代校長に拜命。翌卅四年十一月廿三日（新嘗祭）早朝土匪襲来，學校職員は無事に避難する事が出来。當地に於いて連續十三年八ヶ月間，教育の爲に献身し其の功績顯著なり。大正三年一月末，斗六公學校第六代校長として轉任；九年四月同校に内林分教場を設立；十一年四月内林公學校成立として初代校長兼任。其後嘉義玉川公學校第四代校長に轉任；昭和九年二月逝去の由；朴子街各界及び生徒一同は二月廿一日高明寺に於いて故小泉校長追悼會を舉行す。

### 第二代校長 戸板守正 (一九一四—一九二三)

日籍，渡台後明治卅一年七月台灣總督府國語學校師範部卒業。他里霧（斗南）公學校第五代校長、西螺公學校第五代校長を歴任。大正三年一月廿六日樸仔腳公學校長に拜命；十二年朴子女子公學校成立初代校長として兼任。當地に於いて九年十ヶ月間勤績教育の爲に顯著なる貢獻あり，十二年十月八日依願免職内地に引き揚げ。

第三代校長 東園榮治（一九二三—一九二五）

日籍，渡台後大正二年一月末台灣總督府國語學校講習科卒業。蒜頭公學校第四代校長に拜命，十二年十月八日朴子公學校長に轉任，十四年三月卅一日依願免職内地に引き揚げ。

第四代校長 三好照藏（一九二五—一九三〇）

德島縣三好郡人，明治廿三年三月晝間村に生れ。四十三年三月德島縣師範學校卒業，小學校訓導として九ヶ年間勤務。大正八年四月渡台し台灣小學校訓導として嘉義、朴子兩小學校に勤務。十四年五月朴子公學校長に拔擢；翌十五年九月東石農業補習學校長を兼任。昭和五年八月西

螺公學校に轉任，翌六年六月勳八等に敘せられて七年十一月高等官八等を以て待遇された；續いて十二月正八位に敘し；八年八月勳七等となつた；九月西螺小學校長を兼任して十月從七位となつた。九年十二月高等官七等を以て待遇せらるるや，十年六月州知事依り十五年以上本島教育に盡瘁し勤勞不尠に付茲に始政四十週年記念日に當り賞狀を授けられた。十一年勳六等瑞寶章を授けられたが社會教化に國語普及に全力を注ぎ地方の爲めにも相當の貢獻をなしてゐる。

第五代校長 林 庄一（一九三〇—一九三四）

千葉縣人，明治四四年三月台灣總督府國語學校小學師範部卒業，台灣小學校教諭として教鞭を執つた。其後第七代塩水尋常小學校長に拔擢された，そして第三代北港尋常高等小學校長を經つて。公學校訓導として初代好收公學校長及び第六代北港公學校長を歴任。嘉義市視學依り昭和五年八月朴子公學校長に拜命；三年七ヶ月間勤務して本島教育に盡瘁し，九年四月依願免職内地へ引き揚げ。

第六代校長 工藤 豊 (一九三四—一九三七)

大分縣人，明治廿四年十月生れ，四十四年三月大分縣立杵築中學校卒業，四十五年三月台灣總督府國語學校師範部甲科卒業，同時に公學校教諭として斗六公學校に教鞭を執つた。大正四年一躍して蒜頭公學校第二代校長，其後民雄公學校第七代校長十三年五月白川公學校第五代校長に拜命。昭和七年四月敘從七位，十一月高等官八等待遇，十二月敘勳七等。九年五月朴子公學校長に拜命し；續いて十二年四月嘉義玉川公學校長として活躍。篤學之士台灣初等教育に對しては相當な功績を造つて居たもので州知事依り表彰されたる事數回である，高等官七等を以て待遇せられてゐる。

第七代校長 近藤賢司 (一九三七—一九三九)

茨城縣水戸市人，明治卅一年三月釜神町に於いて生れ；大正六年四月台灣總督府國語學校入學の爲め渡台；翌七年三月優秀なる成績を以て同校公學校師範部を卒業，台灣公學校教諭として教鞭を執つた。十年四

月下潭公學校第二代校長に拔擢された；其の後鹿草公學校第四代校長及鹿草庄協議會員兼任し，蒜頭公學校第六代校長に拜命。昭和二年七月台南州郡視學に拔擢し，北門郡に勤務；續いて四年六月新豐郡視學に轉任し。八年六月州知事依り十五年以上本島教育に盡瘁し勤勞不尠に付勤績表彰されたのである。九年四月歸仁公學校長兼歸仁農村青年學校長として補せられたが；十年四月一日台南州方面委員となつた；同年十月高等官八等を以て待遇せられたが；十二年四月朴子公學校長として拜命せられ，從七位勳八等に敘せられる。十四年四月嘉義玉川公學校長に轉任。

八代校長 松元輝興 (一九三九—一九四三)

鹿兒島縣日置郡人，明治廿六年十二月水野村に於いて生れ。大正二年三月鹿兒島縣立川内中學校卒業，同縣下旭小學校の代用教員となつた。三年三月退職して鹿兒島縣立師範學校本科第二部へ入學，拔群なる成績を以て同校を卒業，直ちに小學校訓導として内地の各小學校に五ヶ年間教鞭を執つた。九年六月末台灣總督府へ出向を命ぜられて，八月渡台し

たそして小學校教諭として嘉義小學校の教職を勤務。十五年五月竹崎小學校第四代校長として拔擢せられた；昭和三年九月小梅公學校第七代校長を経て，六年三月布袋公學校第十二代校長に拜命。十四年四月朴子公學校長として任命，此の間篤學有爲の士であるが社會教化に國語普及にも非常な貢獻をなされ。十年二月賞勳局依り勳八等に叙せられたのである；同年十月高等官八等を以て待遇せられて；同十二月叙正八位。翌十二年二月敘勳七等授與瑞寶章及從七位に叙せられたものである。十八年三月新化公學校に轉出。

第九代校長 西尾帝助 (一九四三—一九四五)

福岡縣鞍手郡人，明治廿八年一月生れ，大正五年三月拔群なる成績を以て福岡縣師範學校卒業，小學校訓導として内地の小學校に六ヶ年間教鞭を執つたのである。十一年十月台南州出向に命ぜられて渡台し；北港小學校に教鞭を執つたが。十二年二月公學校訓導として三月北港公學校に轉じたのである。其の後水林公學校第四代校長、鹿寮公學校第四代

校長を歴任。昭和十年二月高等官八等を以て待遇せられたが、四月正八位に叙せられた；同月九日大林公學校長に拜命。十二年從七位勳八等に叙せられてゐる；其後西螺公學校長に任命；十八年四月朴子東國民學校長として拜命，日本敗戦後の民國卅四年十月に内地へ引揚げ。

註述：括弧（ ）は朴子公服務年代をしめす。

(三) 樸仔腳事件始末抄録

邱奕松 輯録

一、明治卅四年度樸仔腳公學校日誌

十一月二十三日（新嘗祭）午前四時三十分約二百の匪賊當街に襲来し劇しく發砲するを以て職員及家族は皆出て遁る、小泉校長佐分利教諭及家族は午前十時迄附近の民家に潛し居りそれより後崩山庄に遁れ二十四日早朝歸宿す。今回の匪徒は只内地人を殺すを以て目的としたるものにして午後四時嘉義守備隊の來援あるまで退却せず内地人戦死者は支廳長、郵便局長其他男女十一名なり學校にも亂入して樂器及書籍箱を破壊し帳簿書籍十數冊及石盤等を破損又は紛失せしめられたり。

二、明治卅四年十一月二十五日小泉校長報告書

本月二十三日午前四時土匪當街に襲来し連りに發砲すれども當校職

員は何れも銃器を有せず且、支廳との連絡も此時既仁斷たれたるを以て家族共民家に逃れたり此の時午前四時四十分なり暫くして内地人の多くは殺害せられ小官等を討する事急なる由も聞きしかど此時は前後既に土匪の圍を受けたる時にして逃れ出づるに途なければ運を天に任して潛し居たり間もなく土匪は早く既に小官等の所在を尋ね出し門を排して入らんとする有様なるを以て止むを得ず其の鄰家の檐下に潛み居たり土匪は最初潛し居たる所のみ尋ねて其他に及ばずして去りたるを以て此時僥倖にも其害を免れたれど此處は後面逃れ出りべき道なき場所なるを以て人をして北方の道路土匪なき時を窺はしめ午前十時初めて逃れ出て、内厝庄を経て後崩山庄の民家に逃れたり午後八時土匪亦此庄に來りて小官等を討する由を聞き去つて近傍の甘蔗畑に入りたり既にして土匪は果して來りたれど敢て討することをせず二た手に別れて北港溪を渡り北港方面に去りたるを以て再び民家に還つて此夜を明し二十四日午前七時職員家族皆無事歸宿せり土匪は校舍に亂入して樂器及書籍箱を破壊し書籍帳簿十數冊鐘及遊戯品を持出したるのみにて遂に事務室には入らざりしを以

て教語謄本を始め奉り書籍諸器具等皆安全なり鐘は郵便局に遺棄しありたるを取戻したり。

### 三、明治卅四年十一月二十五日樸子脚支廳報告書

十一月二十二日匪首吳新欽、黃國鎮等の部下百數十名支廳に襲来すとの情報に接し支廳長警部庄崎惣次郎巡查以下二十名を引率し嘉義道路其他の要路を捜査するに匪跡なきを以て午後十二時歸廳寢に就りや翌二十三日午前四時三十分俄然銃聲の一刹那匪賊は二三に隊を分ち一は支廳長及稅務課員宿舍に闖入し支廳長及稅務課員山口属以下四名を銃殺し尙稅務課員宿舍に放火全焼に至らしめたり。

他の一隊は郵便電信局に闖入し宮下局長外局員二名を銃殺して金品を掠取し他の一隊は支廳内に突貫せんと試みたるも警部補藤田芳章は巡查十一名を指揮奮戰防禦に力めたる結果戰鬥十時間を持続することを得たり此の情報にて布袋嘴派出所警部補村上時雄は巡查八名巡查補二名壯丁四名を引率し布袋嘴守備隊より上等兵以下四名と共に應援に來り午後

三時頃嘉義よりは守備隊並に江本警務課長の率ゆる警察隊来援し所轄各派出所員も亦相集合せしを以て警察隊は一團となりて支廳裡より守備隊は嘉義道路より一時に呐喊進撃せしにより漸く支廳の圍を解くことを得たり匪徒は三三五五となり退却す此の事變に巡查小倉喜八郎、長野與三郎、日向清吉の三名は匪彈の爲めに負傷したり。

## (四) 媽祖顯化

### 鎮殿媽

半月庄林馬奉請媽祖來到牛稠溪南畔之樸仔樹下休息。神意永鎮樸樹下享受萬地香煙，信徒遂於樸仔樹下建廟供祀。旋媽祖扶乩童指點：「以此株歷經千載，日月照耀，風雨滋潤之巨大樸仔靈樹，雕塑金身供信徒膜拜」。善信乃遵照指示將牛稠溪畔此株巨大樸仔樹，剪斷上半段而留下半段削去樹皮，雕塑為今之「鎮殿媽」，因屬下半段樹幹、樹根收取大地靈氣，如今尚活不爛。

### 四季蘭

靈樹「四季蘭」與眾不同，出生非凡，產於湄洲聖域靈地，先天就含有靈氣，至於帶回配天宮植中殿與後殿中庭，即與鎮殿媽金身靈樹只隔一層磚壁，樹齡將近七十春秋，此間再受媽祖神靈貫通，樹幹強壯、枝葉茂

盛，神靈顯赫，救苦濟難，任求必應，拜受其祐指點信眾難計其數。爲應奧妙神靈，在廟宇服務台備「四季蘭葉」，以應信眾需求。

## 治妖魔

民國初期，在鄰近日閩所創設之蒜頭製糖工廠內，發生妖魔作祟，致使工場機械時故障、或者工人受傷，且延及附近民家，眾多居民病者病、傷者傷，慘不忍睹，眾人以恐懼心理，鬧得雞犬不寧，主事者紛紛到配天宮懇求媽祖治妖魔，在三媽聖像臨場，大顯神威即將烏狗精（狗骨）取出放進油鍋後，無形中病傷皆根除，此後工場亦平安無事。蒜頭糖廠本島人工員，由黃水盛倡議，於日據大正十年（民國壬戌）鑄造一座大香爐及一對大燭台，呈獻神殿前感謝媽祖之庇佑。

## 救病患

嘉義市勝田病院院長勝田一夫之妻，身染重病由自己病院治療，亦難見效，正束手無策之際，經傭人馬高建議，不妨赴朴子配天宮懇求媽祖慈悲，賜爐丹服用，結果見效救一命，爲感謝神恩，勝田院長特向日本內地

訂製直徑一公尺大燈籠，呈現神前，此燈籠已毀不存。

朴子郵便局長川瀨吉藏因重病垂危，不省人事，經郵差詹萬能向其眷屬建議，不妨赴配天宮懇求媽祖賜爐丹，一服見效；川瀨局長於復建後，特訂製藝術雕刻神案一座，呈現神前感謝庇佑，今尚存廟內矣。

朴子街公醫館內科醫師松浦保之慈母，病危已束手無策，幸得工役陳毯建議，奉請三媽金身臨宅鎮駐，日夜叩求庇佑；未幾，慈母康復，感動松浦公醫，為答謝救母之恩，特訂製藝術雕刻神案一座呈獻，今尚存廟之前殿耳。

## 解災難

日據時大正八年（民國八年）夏季，台南州知事枝德二巡視東石郡轄朴子街與東石庄，在閒餘活動時，由東石郡守森永信光、朴子街長黃媽典（配天宮管理人）陪同，於東石港內釣魚取興，突然發生一陣龍捲風，將三人所乘竹筏捲入海中，正在危急之秋，忽然出現一婦人溢出滿身香味，並將彼等救上竹筏無恙，當時州知事亦感覺奇異而問究竟，街長黃媽典即

答謂：「此乃配天宮聖母顯化所救」云，返歸朴子後，一行人到配天宮參香向媽祖神前叩謝恩，當時州知事在廟內，所聞香味確實與遇難時，拯救彼等出險婦人所溢出香味無異，更加信任無疑，乃在媽祖神前三跪九叩首，以示答謝神佑，旋致送匾額叩謝，另東石郡守、朴子街長亦呈獻匾額，今尚存殿內，其題曰：「母德汪洋」、「化育黎明」、「護國安民」等。

## 佑地方

日據末期，戰事頗激烈，據傳聞盟機（美軍飛機）曾經空襲朴子，其目標為轟炸朴子水塔，水塔是朴子地區自來水之水源。正在要投下炸彈時，偶然發現有一婦女騎在白馬上，且用裙巾將炸彈接著，然後丟進朴子溪畔，並無爆發。此騎白馬婦人，即是媽祖顯靈，雖然傳聞，頗富神話色彩，但言之鑿鑿，應可證明媽祖是無時無刻，都在保衛鄉土耳。

（作者：邱奕松。原文發表於《美哉嘉義》一書）

## (五) 樸街地號

大樸森森蔭樸津，開基一樹已歸神；

覃恩偉績同天后，長抱婆心護世人。

此首題「樸樹」詩，係朴子先賢楊桂山所咏，印證「朴子」源以媽祖婆與樸仔樹關聯極深。今配天宮正殿所祀鎮殿媽，則取牛稠溪畔，一株碩高茂盛樸仔樹幹，雕塑成媽祖塑像金身，樹根今仍活生生在地下不爛。

### 街名起源

溯源明末清初，遍處荒涼野原，僅點綴幾間農舍和數株碩大樸仔在牛稠溪畔。尤其數株枝葉茂盛樸仔，以蒼翠成蔭樹下，遂成旅途者或農夫，最受歡迎休憩納涼必需佳處。時附近半月庄，一位素仰媽祖虔誠信徒林馬，每歲均進香至天后宮，如此歷數十載未間斷虔敬，巡禮往回必經斯處樸仔樹下，為其休息驛站之一。

民前二三〇年（明曆卅六年），林馬以年邁之軀，仍不失其誠，遙遠

迢迢、拔山涉水、辛苦旅途、朝拜媽祖，鑑及已不勝荷，疲困不堪之進香活動。意請媽祖分靈迎回半月庄，宏願能晨夕恭拜，其誠竟驗求得聖像。在小心奉置篋中，曉行夜宿步上歸程，以沐雨櫛風越三日，抵牛稠溪南畔，天色已暮，細雨如絲，暫宿樸仔樹下小舍一夜。豈料附近居民聞篋中有媽祖聖像，竟然強求暫駐數日，設壇安置樸仔樹下供人膜拜，如此聞風來參詣者，絡繹不絕，致挽留多日仍無法迎歸半月庄，於是讓聖像永久座鎮於斯，便奠基立廟「樸樹宮」。林馬亦自半月庄偕眷，擇臨近開拓即今安溪厝一帶。

另一傳說，樸仔樹下有靈穴該屬天妃娘娘所居，因林馬不得無從意旨將聖像留此，豈真耶？聖像既留，居民便商議，醵資建廟供祀，未幾簡陋廟宇竣成，謂「樸樹宮」，因媽祖神靈赫濯、香火日盛。至民前六十三年（清道光廿九年），取自歲次己酉將宮號改「配天宮」。尤以媽祖恩波浩蕩、神威顯赫、遐邇蒙庥，信者前來朝拜日益增多，便廟邊擇居者漸多，街勢漸臻繁榮，於是市肆興焉。

夫部落因供祀媽祖婆而繁榮，媽祖婆亦發祥於樸仔樹下，則以標名「樸

仔」「腳」台語也，意「下」。日本據台後，鑒及「樸仔腳」地名太俗氣，藉民國九年（日大正九年），市區改正，重定街名，將舊名改謂「朴子」，「朴」與「樸」同，台灣光復後仍沿襲。關於配天宮詩曰：

配天宮闕壯崔巍、大耳香爐語帶譏；

元夕成群諸士女、花燈影下拜天妃。

詩句「大耳香爐」緣由日本據台後，闕朴子東北端，置「明治製糖會社蒜頭工場」，開工後一切不順，如工人受傷、機械故障、且波及附近民家，鬧得雞犬不寧，係妖魔作祟所致，工廠內本島人乃迎請朴子配天宮三媽解圍，於是大顯神威能驅除妖魔，使得平安無恙。民國十年（日大正十年）本島人一同為叩謝神恩，特鑄造大香爐與大燭台奉獻，因香爐兩邊有形如大耳朵而名矣。

關於詩句「花燈」，原係皇城於上元夜（元宵）張燈為戲之燈節，依《東京夢華錄》：「正月十五日元宵，大內前絞縛山棚，游人集御街兩廊下，歌舞百戲，鱗鱗相切，樂聲嘈雜十餘里。」當年嘉慶帝為體念功在國家王得祿提督家眷，在元宵佳節亦能享宮城張燈為戲餘興，恩賜太保提督

府第例年元宵准許自設娛賞，民前九十四年（清嘉慶廿三年），王提督妾林氏（六房朝經爲其所出），素仰媽祖婆神威，特製銅鐘叩謝外，並將恩賜「花燈」亦移設樸樹宮內，藉供媽祖與庶民共享，可知朴子配天宮元宵佳節「迎花燈」，係全島惟一「恩賜花燈」。

朴子最早地名應爲猴樹港街，依民前一九五年（清康熙五十六年）陳夢林《諸羅縣志》載有「猴樹港街」名，至民前一四八年（清乾隆廿九年）續修《台灣府志》載有「樸仔腳街，舊爲猴樹港街，今更名。」朴子地處牛稠溪支流南畔，溪寬水深，可使船舶自由航行；民前一八六年（清雍正四年），閩泉同安籍陳金生溯沿溪流卜居於斯，從事貿易。越歲，同鄉商賈數人來渡，建一、二肆店、仍是貿易；剛始肆店旁即幾株碩大樸仔，樹下有立祠供祀媽祖「樸樹宮」。當時藉竹筏以擺渡，由猴樹港（東石港）上溯牛稠溪抵網仔寮，集散諸羅縣境物資，斯處乃成中心市場商業繁昌對外貿易之牛稠溪河港都市。民前一七六年（清乾隆元年）至道光末葉，乃成笨港街外港，旋牛稠溪淤淺與猴樹港陸化，河港口便成沼澤溼地，致海灘隆起而延西伸，已失港口功能，終被今東石港所替代，但仍不失重要街

市。

### 牛稠溪，今朴子溪

亦寫成牛朝溪、或牛跳溪、近人稱樸仔腳溪，詩人以虞溪稱。《諸羅縣志》載：「牛稠溪，發源於大武巒（邑主山）、出大福興牛朝二山之北，爲牛朝溪渡。（往北大路渡此，夏秋水漲，小杉板頭船可入渡口載五穀）西過北新（莊名），至於小椽榔（莊名）爲龜仔港。又至西於猴樹港（商船輾集、載五穀貨物）、南出青峰闕（縣治以南總海口，自蚊港以內諸港，悉從此入，詳見下）入於海。猴樹之南爲土地公港、入於荷芭嶼。（莊名、嶼內爲眾流所歸與港會、水面甚闊，捕魚者日可百餘人，別見水利）」亦續修《台灣府志》載：「牛稠溪從西流經猴樹港之南，由青峰闕注入海」。可見其一斑，而且此種說法亦演變成一種口碑所留傳下來。詩道：

溪稱朴子古虞溪、水自新高匯海西；

興廢堪嗟東石港、一灣漠漠盡沙泥。

### 古街開元

清末屬大棟榔西堡之樸仔腳街，舊街狹小、路心開暗溝上蓋石板，成爲通道。日人據台後，於民前十二年（日明治卅二年），恐怖之鼠疫來襲，前後歷十五載，死亡數一千一百二十二人（官方資料），事實上恐超越幾倍數，舊街已籠罩滅亡邊緣；日本當局爲消滅鼠疫，曾經將此條舊街拓寬一次，旋又市街規劃，路面逐次拓寬，但以狹窄街道，兩側老式店舖，仍櫛比鱗次，古色古香；至民國七十八年拓寬成幅度十五公尺大道，景觀正在迅速改變中，新式大樓一幢幢出現，光陰脚步畢竟無法挽留也。

依據台灣在清代，移民生活方式及地理環境影響下，產生爲城市或農村及市街，三種聚落形態，而朴子舊街「開元路」，則尚遺存清代市街型痕跡可尋探。古代市街成因，乃早期聚落分散，大多農爲主，若干生活必須品都依賴外界補給，致各聚落出入路線交界點，便形成較具大市街以商爲主，且官府亦設司職掌政令宣導、教化推行、治安維持……等。

台灣在開拓當初，尤以蕃害、海盜、械鬥、社會不靖、政令未普及，故較大市街，譬如台南、嘉義……都築城池，以確保安寧爲旨。餘外之地，皆自民間團體組織民團，以確保地方維護任務，此種積極防禦性工作，

便直接影響市街內配置，故古代百姓為營建房屋，大多採取共牆「長條街屋」俗稱「蜈蚣陣」建築物。

關於蜈蚣陣市街配置，僅一條街道，每間街屋都朝向街面，比肩併排、蜿蜒而下。若外敵入侵，即守大街首尾兩端，極具防禦性功能，在台島最著名如此配置，則有鹿港不見天大街，淡水重建街，以及朴子開元路。「蜈蚣陣」長條街屋，早期採取到延街面，將屋面寬降最窄極限，在縱向進深卻儘拉長，產生寬四至五公尺，深卅至五十公尺，此種特殊配置，內部空間使用上頗充分發揮作用，但必採取多進及天井，藉彌補通風採光之不足條件。

自緩和海盜入侵，漢蕃衝突後，原有防禦性蜈蚣陣建築，在基本格局上逐漸走進瓦解之途，至今尚因地方建設影響，將原市街形態，漸被破壞無存，若將歷史文獻仔細考究，與現況核對下，舊街開元路所遺兩側舊屋雖無多，尚可窺出昔時市街風貌，令人追思懷古。詩曰：

五層崎接暗街幽、大統街連七崁頭；

一甲行行通五甲、看來大道曲如鉤。

「開元路」此條彎彎曲曲古老街市，係昔時樸仔腳最熱鬧惟一街道，似乎一條大神龍貫穿於東西間。清代末期，最基層行政區爲「甲」；自配天宮廟埕起點延西，則劃分有「五甲」：

一甲——自媽祖廟埕起延西至復成巷（通榮昌戲院及內厝）止一段。

二甲——接一甲末端延西至玉勝巷（今金瑞成銀樓邊）止一段。

三甲——接二甲末端延西至米市巷（通原東和戲院、昔爲土地公廟口）止一段。

四甲——接三甲末端延西至南通路口（原省議員蔡錦棟、端仁父子住宅）止一段。

五甲——接四甲末端延西至博文街口（創刺繡業蔡國謀宅）止一段。

### 五層崎

四面當年築銃樓，爲防搶劫敵三侯；

而今故地尋遺跡，不見殘磚片瓦留。

座落北通路與開元、黎明兩路交界一帶。溯源幾百年前牛稠溪改道，此處乃溪畔最高處，由最低至最高點，須經五段甚陟各異地層而到，故有

此名。係牛稠溪改道遺跡，依古時舊街頂端處以銃樓替隘門之設備，有防賊襲擊作用，對全街防衛上之重要設施。

### 暗街

座落開元路兩側，東自北通路西至媽祖廟口一段。昔時位在舊街頂端，以連接銃樓，屋間兩側乃狹小成黑暗街道，故有此名。

### 五穀市

座落媽祖廟口一帶。昔日為販售五穀市集之處故名。

### 大銃街

座落開元路兩側，自媽祖廟口延西五十公尺一段。昔時位在舊街頂端，連接銃樓、暗街等，均有防禦性關聯。

### 牛磨店巷

座落開元路自媽祖廟口延西卅公尺處，有巷道通南至中正路。此巷兩側尚存昔時商舖建築，令人懷古；緣由早期以大石磨動用牛隻駕馭，將綠豆或米豆磨成粉末工廠林立，故有斯名。

### 七坎頭

座落開元路屬一甲之段，早期築有店舖七間，指其中之頂間而有此名也。

### 復成巷

座落開元路通榮昌戲院或內厝巷道。緣由民前廿年（清光緒十八年）閩晉籍陳拔俊偕子世彰卜居於斯，營估糖販或簍仔貨，繁昌致富，店號復成，第三世昌波爲秀才；因店址闢拓巷道，後人以復成紀念之。

### 玉勝巷

座落開元路在第一市場對面巷、北通黎明路。緣由民前一二年（清嘉慶五年）、閩泉晉江東石汛人黃多俊首墾海埔庄，旋遷於斯以製售蔥油餅，經營得法即分傳玉珍、玉豐、玉勝諸舖以餅聞名；傳六房繁衍六世、子孫三百有餘，因店址闢拓巷道，後世以玉勝紀念之。

### 肉菜市

座落開元路兩側，在第一市場北邊一段。昔時豬肉或蔬菜攤販市集於斯，故名。

### 米市

座落開元路與市西路交界一帶。昔時路中尚有一座小土地公廟，四方均以糴糶米攤販市集於斯，故名。

### 米市巷

座落開元路通原東和戲院巷道，即通黎明路第二條巷。巷道北口，昔有一口大井泉水，可供鄰近居民之飲用，故「大井頭」稱；亦斯地曾為基督教傳教朴子發祥地之一。巷道南口，昔有一座小土地公廟，且販售白米，故巷以「米市」稱。

### 源遠號

座落開元路與市西路交界北端一帶。昔係「源遠」號廢墟。緣由民前卅年（清光緒八年），閩泉晉江人蔡涵昆仲卜居於斯，營估「源遠」船頭行，旋設油車製售土豆油，蜚聲實業；蔡氏內弟黃老達為原嘉義縣長。

### 振昌、振利號

座落開元路、東自南通路，西至文化北路一段。緣由清道光年間，閩泉同安人劉光平首墾鹽地仔，未幾遷徙於斯，分傳兩房以營「振昌」「振利」船頭行，專售陶器類、蜚聲實業，尚遺古厝或古牆，令人追思。

## 慶順號

座落於開元路與文化北路交界處。緣由民前卅年（清光緒八年）、閩泉籍陳信卜居於斯，經營烟酒販售，後置油車製售土豆油等，事業繁昌；曾任地方保正。

## 迎暗藝

六月初旬賽虎爺，街分上下競相誇；  
爭奇鬥巧裝詩意，觀客如雲滿市嘩。

係樸仔腳昔時一直流傳歷久不衰之韻事，土名十八棚，每逢虎爺生之前約一閱月，就常由頂街與下街居民，互相競起熱鬧氣息。自五月初開始，頂下街夜夜歡樂異常，紛紛敲鑼擊鼓，節目漸增至六月初六已達最高潮，雙方所有陣頭（宋江陣、獅陣、舞龍、八家將）及藝閣、七鶴、蜈蚣閣、桌仔藝、藝姐唱（歌伎坐在鐵枝台頂獻唱），紛紛出現，偶爾弄車鼓、唱馱犁歌，或落地掃、變奇術、演功夫、踩高蹺、南管、北管、民謠歌唱、太平歌、十一婆姐、搬海反、古裝劇、文明戲，諷刺話劇都搬出來表演。迎暗閣，初起自幼童擔任，旋漸轉至成人，參與競爭相拚，且愈搞愈

大。當競賽時恐因觀眾擁擠堵賽街道，均設開路先鋒隊，執開路牌外，尚用火球藉資威脅群眾讓路；一路許多火炬照明行列兩旁，以便各項藝陣表演。同時各備保鏢以防萬一發生爭鬥，有時賽戰趨於激烈，治安當局便輒出鎮壓，以免發生不測。此種熱鬧氣氛，歷閱月終於六月初六，陣頭之數依然延及數公里外，甚至要半夜始走畢，所謂城開不夜，萬人空巷；如此熱鬧異常，太平氣息，係民國前之事焉。

抱石相投趣聞

樸仔腳居民每年一度，迷傳為著驅疫鬼以石擊鬥之惡俗；有詩句可知其一二情景：

當年抱石競相投，南北團分鬥劣優；  
惡俗傳能驅疫鬼，負傷雖重亦無尤。

街內地號

安溪厝

厝號安溪溯舊名，蕃薯簽市日中成；

滄桑變後蕭條甚，惟有池王廟再營。

座落街東端，界自北通路以東一帶。緣由民前二三〇年（明永曆卅六年），居半月庄閩泉安溪人林馬，迎請媽祖聖像途經牛稠溪南畔樸仔樹下，結緣於斯土乃立廟供人膜拜；於是林氏便擇臨近自半月庄偕眷移墾，旋安溪籍移民陸續入墾，聚成一部落則名「安溪」為紀念。

開基廟擇莊最南端，毗連公塚（朴子國民小學今址），額安福宮以供祀池王為守護神，後列祀李、朱、邢、范諸王。即成五府千歲廟，俗稱安溪厝廟。廟立於康熙年間咸豐代受損、同治歲重建，旋幾度修繕至民國六十三年改建堂皇華麗廟貌，主祭日六月十八日。

民前廿八年（清光緒廿一年），乙未滄桑之變，日人在安溪厝成為統治地方核心，置衙門、學校、郵便局、公醫診所及日人商店。衙門「樸仔腳支廳」廢墟，座落開元與北通路交界東側，今闢開元路東段及用為配天宮香客停車場，周圍都是縣政府宿舍。學校即借用安溪厝廟為樸仔腳公學校創校第一、二、三屆畢業生學堂；後闢廟南邊公塚為校地，先後分設男女各校（即今朴子與大同兩國民小學前身），當年所清塚之遺骸均收祀在

今平和里布伯公萬善堂和下竹圍萬善廟。

民前十一年（日明治卅四年）十一月廿三日，發生轟動全島之「樸仔腳事件」，其舞台即安溪厝爲核心，義軍便殺死日人支廳長、郵便局長、公醫及吏員、商人等十一人，事後受累無辜街民數十人，被日本憲警大屠殺成爲冤魂。有詩道：

匪襲支廳記昔時，蟲飛入火太愚痴；

只今惟有沙崙後，殉難人留記念碑。

按詩稱「匪」係日據時之辭，指當年抗日義軍，日人爲其殉難官吏曾立碑兩基紀念，且每逢罹難日街各界均派代表祭吊一番，至台灣光復始停止；兩碑爲闢建公教人員福利中心時被廢無存。

### 蕃簽市

座落北通路與中正交界一帶。顧名思義乃清末時，庶民主食蕃薯簽，以設攤販售市集。

### 蕃簽巷

座落中正與山通路間，東自北通路西至光復路一巷道，此巷與牛磨石

巷係連貫之古時重要通道。巷道東端出口處一帶為昔時蕃簽市，故名。巷內尚遺古代客棧建物可尋探，值得追懷矣。

### 義興號

座落蕃簽市附近，緣由乾隆中葉，閩漳海澄人陳崇秀卜居於斯，「義興」號，設油車製售土豆油，蜚聲商界，傳七房，裔孫不斁。

### 魚仔市

座落街心地帶，範圍極廣闊，以中正路兩側至海通路之南，東自北通路西至市西路間，與下竹圍為界。

緣由於清末時，在今中正路與光復路相連之處，以專售鮮魚與海產攤販之市集，故名。開基神為蘇王，係地方守護神，早歲立有蘇王廟，因日人拓寬道路（今中正路）時被毀，神像輪流由爐主供祀，逮至民國四十年由周圭元發起建廟，於四十三年竣成，額「天公壇」，以玉皇上帝主神，蘇王副神；例年正月初九天公生及十月十四日蘇王生為主祭日。尤其天公壇所奉祀神像，或廟宇壁畫，均自鄉土藝家「圭元仙」手技，與藝術信念之結晶。他全力將藝術造詣融入於每尊神像，及每幅壁畫之上；無論大小

塑像，或畫中人物，皆栩栩若生、氣韻生動。他所有造形天成，細膩自然，最令人震撼之美，若以藝品觀賞，所遺傑作品，件件都難得寶物，故鄉黨應有維護責任。

### 菜園仔 亦稱下菜園仔

座落山通路南側；東自市東路西至市西路一帶。緣由清末時原荒涼之地，且點綴大小池塘，闢成菜圃，因東方亦有菜園，故稱「下菜園仔」。今菜園之地已築有嘉義客運公司朴子站，及南區中小企業銀行等。

### 菩提窟

座落朴子電信局大廈與對峙鴻賓旅社等周圍一帶。在清末有一座大石窟，水深廣闊。詩道：

菩提窟與菜園連，地到于今異昔年；

學校公私鱗次立，生徒男女達三千。

話說窟有段傳奇故事，日人來台不久，劫富濟貧義賊「妖怪」，常作案爲日警最頭痛人物。他軀體矮小，但一身好功夫，一條頭巾可登樓頂；因被追捕就潛入水內七暝七日，結局仍被逮捕。在處決當日遊街示眾，他

呼籲眾人「快來看吳妖怪被斬首，十八年後仍然是一條好漢」。

### 布埔仔 亦稱半埔仔、或頂菜園仔

座落光復路兩側、北自北通路南至南通路一帶。緣由清末時係縱浦橫塘之處，路東遍地草埔、路面點綴大小池塘，當年草埔若非用作放牧牛羊、使用以作染曝布之處。詩道：

古來荒野布埔頭，曝布還兼供牧牛；  
廢地而今成錦地，東西南北盡高樓。

今朴子警察分局座落在昔時池塘上，原日據時為築「東石郡役所」，曾動員街庄民勞動填土。今朴子市公所一帶，原一片荒涼，日據時士紳黃班爵等組設火力發電所於斯，曾經為朴子街民以早期享得電燈之文明生活，廢後仍一段長時間成荒野，爾後始建市公所。

### 義成號

座落天惠醫院後側一遍瓦頂平房係所遺古厝。緣由清道光年間，閩泉晉江人蔡冬，首墾占富厝；子清智遷移於斯，以營請負業，旋染布及置油車製油，以「義成」蜚聲實業。

### 長興號

座落中正路在第一銀行朴子分行後面一帶。緣由清咸豐年間，有蘇福、海昆仲移居於斯，以號「長興」營布舖，蜚聲實業。

話說魚仔市曾經有一奇人「大胖文淵」詩道：

肥人魚市憶文淵，心廣體胖重半千；

日食豚肩五斤肉，虎頭燕頤腹便便。

### 溪仔底

溪底從前是糞堆，爭營舞榭與高台；

夜來唱演榮昌座，士女成群撥不開。

座落黎明與向榮路間，東自春川宮西至南通路範圍，係牛稠溪改道廢虛。緣由牛稠溪水道北移，原溪底逐漸積沙浮良田，或將垃圾填平；同時有人遷移建屋，聚成部落號「溪仔底」。民家密集處即五層崎或媽祖廟北側爲今東段，但西段北邊仍存溪底痕跡大小水窟今填平，惟順窟南畔有民家焉。溪仔底填平後榮昌戲院就築在於斯，係較大建築物之一。

開基廟「北極殿」，供祀玄天上帝爲守護神，民前四十九年（清同治

二年）創建。最東段「春川宮」一帶爲當年牛稠溪北移前入口點，廢墟後逐年積沙存高，始「春姑婆與川伯公」先後鎮座，庶民於民前四十二年（清同治九年）立祠膜拜。日人據台後，擇祠堂東側建「屠宰場」、祠堂設「牛墟」；如今祠堂重建於原址稍前處一座美侖美奐之堂皇廟宇，額「春川宮」。宮西側正興工「北極殿」，亦宮對峙有一座配天宮第二香客大樓、宮東側已闢爲外環道路。原有屠宰場與牛墟已廢；並預定屠宰場廢墟將興建「老人俱樂部」。

### 皇帝夢傳奇

話說溪仔底在日據初期，發生一件傳奇故事，一位爲滿足其「皇帝夢」，曾招兵買馬，並戴起通天冠，穿起黃袍玉帶，設壇受眾朝賀，同時亦封官授將之舉；此種幻夢未幾揭開，日本當局即「招搖誦眾」，逮捕入獄，眾稱其謂「真主評仔」，而其中一位部將，眾稱「守備德仔」，即前縣長陳嘉雄之祖父，又胡量爲太監云。

### 內厝

夙傳內厝觀音亭，池有潛龍夜聽經；

信是地靈鐘毓秀，前人多博一襟青。

座落街最北端，在朴子溪南畔，與更寮庄（屬六腳鄉）對峙，今屬內厝里。昔年牛稠溪在於斯分支，將部落圍繞其中，使之外界隔絕，因被溪流所圍住於間房舍，稱內厝，思之亦宜。

開基廟擇在東南端，於清康熙初葉創建，奉祀守護神觀世音及迎請太子爺分靈供祀，額「龍樹亭」，俗稱內厝廟；例年六月十九日佛祖生，九月初九太子爺生。

望族黃氏為斯土大户，開基祖黃變公係閩漳漳浦人，於民前二〇〇年（清康熙五十一年），自平和縣和瑞堂溪口社渡台抵此。民前一八七年（清雍正三年）傳二世岱公，旋分傳五房，如今至十三世，繁衍於街內。

### 頂灰磽

座落黎明路兩側，東自玉勝巷西至博文街範圍。緣由清末時，斯地居民大多燒石灰謀生，境內置有灰窰，星羅棋布，蔚為壯觀，位在另一燒灰地之北，故冠頂字。

開基廟「巡天宮」，供祀五府千歲為守護神，民前五十三年（清咸豐

九年）由居民黃成、尤鳳、馮知等創建；至同治年間，由吳井發起改建；民前二一年（清光緒十七年）擴建；日據初期前殿已圯，且市區改制只存後殿，至昭和初葉重建；光復後民國六十五年重建二樓宮殿式廟宇、堂皇美觀，俗稱「頂灰礮廟」，主祭日為九月十五日。

道光中葉、閩泉南安籍，黃泮公派下四世黃權自蒜頭庄移徙於斯；傳三房至七世，有光勇或稱清，營土人間（碾米廠），並任地方保正；另有自然，亦出任地方保正。

### 宰豬成仔「歌仔戲」

居住頂灰礮廟北邊，姓陳名成，早期以屠宰販售豬肉為業，後來組歌仔戲團，題「登興社」，因經營得法風靡全島，最後分為兩團遍及台灣各角落。

### 樸街風味小吃

尤以大眾化吃食，經獨具匠心之烹調，使人在享受精美小吃，自有一種不可言喻之滿足。最有名之絕佳美味，皆出在頂灰礮，則是：紅狗仔之米篩目、柳狗仔之紅龜粿、加再仔之米糕糜、馮象仔之蠔仔餐、進旺仔之

綠豆粉粿和茯苓糕等，以美味可口，名聞遐爾，爲今之人恐無法享受，係值得懷念；於今最有名有長成和永久號出品之花枝丸。

### 鍾靈毓秀之地

頂灰磙尾之莊玉成四女莊氏無嫌、學名莊司雅子，係早年樸街唯一留學東瀛之女性；畢業奈良女子高等師範學校及廣島文理科大學；以「福祿培爾研究」論文，榮獲文學博士，其學位在全日本女性中，確爲鳳毛麟角。

網仔寮之黃文，係宰豚販肉爲業，並培養啓南、老達兩弟，學西醫而各自在朴子、大寮開業「回生醫院」；台灣光復後，黃老達乃獻身政壇，膺選爲嘉義縣議會議長及嘉義縣縣長；尤其值得一提乃啓南醫師育四男三女一門三代有十九位醫師以懸壺濟世，譽謂「杏林世家」。

### 網子寮

座落頂灰磙西北端，今博文街最北端，赴更寮庄（屬六腳鄉）最捷徑處。在清末時，自東石港船舶貨物，均移載竹筏，順牛稠溪沿流輸送至此，卸貨成爲擺渡據點，當年頗繁華一時；因朴子溪水道變遷，已陷入溪底中，如今無痕跡可尋探，詩道：

竹筏渡頭網子寮，舟車輻湊日連宵；  
滄桑變化無帆影，回首當年感寂寥。

### 下灰磙

頂尖窰過下尖窰，柳眼窺人燕語嬌；  
依舊桃花迎客笑，尋芳那得不魂銷。

座落中正路兩側延及山通路，東自市西路西至南通路範圍。緣由清末時，因以燒灰業爲盛，不減於頂灰磙，位在南側故取「下灰磙」。不知何故曾淪入風化區，將近一世紀之久。開基廟「保安宮」，供祀五府千歲爲守護神，溯源民前卅年（清光緒八年），因傳染病流行醫藥不發達，庶民只賴神朱、李、邢諸王庇佑，旋平安無恙；由楊英、黃地、王好等，以謝神恩發起建廟，民前廿七年（清光緒十一年）竣成，俗稱「下灰磙廟」，主祭日八月廿日。廟宇狹小，但在街中心，董事者將廟埕，租給攤販爲廟收入，喧嘩囂嘈。

### 高明寺

座落下灰磙南側，緣起民前廿年（清光緒十八年），菜姑陳賢、侯順

等，創建「正心堂」，供祀觀世音，時在頂灰磙。民國十二年（日大正十二年），士紳陳添貴參詣後，鑑及狹隘無嚴肅。以發心建蘭爲己任，募捐萬餘日圓，擇今處建寺，在當年是荒涼之地，無人敢去僅有林投巷，可通下竹圍。寺名「高明」與媽祖廟「配天宮」，係出自大學篇「博厚配地、高明配天」，以配天高明之意。例年正月十五日元宵佛前燈、四月初八浴佛節、七月十五日盂蘭盆會爲主祭日。詩道：

高明寺裡菜姑多，身入沙門莫奈何；

共信誦經能補過，朝朝夜夜念彌陀。

### 田仔

座落中正路兩側延及海通路，東自南通路西至博文街範圍。故名之。有頂下田仔之別，「頂田仔」即代天宮王爺廟一帶；「下田仔」即青田寺觀音媽廟附近。當年在海通路即是林投巷道，亦在今青田寺向代天宮至開元路與博文街交界，有一條深溝；此溝向南經下竹圍，流進荷苞嶼湖。

開基廟「代天宮」，供祀邢王爲守護神，民前五十一年（清咸豐十一年）創建。原一小祠，光復後由長老蘇坑、翁安順等倡建，民國卅七年竣

成，俗稱「田仔廟」，例年正月初四祖師公生、八月廿三日邢王生爲主祭日。

### 源興號

座落於開元與中正路間，南通路東側一帶；係清末時最有名船頭行，名望家蘇鳳榮所有。昔時建一座樸街惟一高樓大廈，題「源興樓」，此樓亦是朴子基督教發祥地之一，當年由長老陳璧玉醫師所租，暫闢基督教會福音佈道所，震動國際鼠疫傳染樸街時，當局爲驅除禍根乃下令拆掉。樓之前面有一水窟「源興窟」，水深廣闊，窟畔四方荒野，置有牛墟。詩道：

源興窟畔古牛墟，曾見賣牛不賣豬；

劫歷紅羊牛市改，高樓廈屋盡渠渠。

### 樸靈宮

座落田仔西南角處。緣由當年反清抗日時，赴難殉節者。馬革裹屍荒野郊外，失去收埋；歷經民國元年（日大正元年）時；東石人吳生意，以賣菜爲生，偶避雨樸樹下，忽聞香風陣陣，心知有異合掌默禱，未幾家道興隆，遂築小祠於樸樹下，額「樸仔公」，靈蹟常昭，香火日盛。民國十

三年（日大正十三年），唐山人莊其勇，以理髮爲業，曾自九鯉湖迎請呂仙祖分靈，安爐座鎮，旋拓闢海通路，祠堂近路邊，日人巡查部長及請負業王利，屢迫拆毀之舉，因被神責罰，未敢損一片瓦。民國五十三年春，庶民鳩工庀材，於是歲十一月完工，規模壯麗。

### 五甲尾

座落開元路兩側，東自南通路西至博文街範圍。緣由清代依照基層行政區，「甲」劃分，適處排行五甲爲最末，故名之。

當年街列爲最繁華之區，所有船頭行（貿易商），計有五十餘家，毗連林立。在五甲尾之端，築有「隘門」，爲治安上有效措施，即今博文街與開元路交界處。

嘉慶初葉，變公派下四世黃協海自內厝遷居於斯，座落開元與文化北交界北端。協海、馳贈奉政大夫、舉六房；其後三房澄澈、國學生、贈文林郎；六房澄照（星華）、光緒庚寅歲貢生、選用儒學、欽加五品銜賞戴藍翎、誥授奉政大夫。其長子鴻德（惠侯），軍功六品銜；次子鴻模（楷侯），軍功六品銜、樸仔腳區長；三子鴻藻（采侯）、光緒丁酉舉人，揀

選知縣；四子鴻翔、光緒壬寅舉人，裔孫啓顯，榮膺嘉義縣議會首屆議長，旋任省教育廳副廳長、建設廳長；所謂一門俊秀也。

### 東瑞號

座落開元路與文化北路交界西角處，今尚存四合院古厝，可尋探大厝身及庭院。清咸豐年間，閩泉同安人吳某，首闢澎湖，後移徙於斯，號「東瑞」以營估陶器貿易，名振一時，繁昌致富。後裔承恩於同治歲，欽贈從六品，即用同知，賞戴藍頂加藍翎，為清末時地方總理；朴子市長吳國禎為其裔孫也。

### 連謀號

座落開元路與博文街交界北端。清乾隆末葉，閩泉同安籍宗森公派下三世蔡士來，渡台卜居於斯，傳五房；二房後裔國謀，創業刺繡，號「連謀」名噪一時。

## 街外地號

### 應菜埔

樸街地號

清代屬大棟榔西堡，今朴子市永和里。座落街西北端，東接博文街（五甲尾、田仔）、西臨港墘庄（屬東石鄉）、南界崁後庄、北隔朴子溪與更寮庄（屬六腳鄉）對峙。緣由清末先民移墾時，遍地繁生應菜，一名空心菜，學名以甕菜，但以甕菜誤用頗久，以迄如今仍是，故有此名。另一說爲斯土在昔時，先民置有草仔廊，專問製蔗糖工寮林立而名。

### 大庄

座落最西端，與港墘庄爲鄰；以李姓爲大戶。開基廟「德安宮」，供祀池王爲守護神，俗稱應菜埔廟，創建於道光年間，九月十五日爲主祭日。

### 頂厝

原在大庄北端，位置朴子溪下游南畔；因每逢颱風暴雨，都受溪水氾濫之苦，生命財產頗受威脅，故遷移大庄東端，經街役場規劃，始有今「棋盤目」通道，井然有序，可尋其跡。開基神五府千歲爲守護神，至今尚未立廟，僅將神像輪流安奉於爐主宅，每逢八月十五日主祭時，才將神像移奉於集會所臨時壇，供人膜拜。

### 糖寮

座落開元路兩側，東自博文街西至省立病院宿舍範圍。清末時遍處置有貯存紅糖倉庫，及包裝工寮林立，因臨近「網仔寮」碼頭，所上貨紅糖都由此出。開基廟「順天宮」，供祀邢王爲守護神，民前五年（日明治四十年）創建，俗稱糖寮仔廟。

### 東竹圍 俗稱竹圍仔

座落海通路南側，博文街以西範圍，即「樸仔公」對面，延及朴子魚市場，至圓光寺一帶。緣由昔時先民入墾時，擇周圍林立竹叢爲牆，以防盜賊攻襲而成部落，因鄰近部落稱「下竹圍」，故以「東竹圍」稱之。開基廟「竹安亭」，主祀五府千歲爲守護神，民國廿年（日昭和六年）創建，俗稱竹圍仔廟。部落南端原一遍野原與田園，近年來人口增多逐漸闢住宅區，大廈林立；且設有朴子國民中學、大同國民小學，給學子求教頗多方便。

### 四角窟仔

座落省立朴子醫院宿舍與春秋武廟之間；昔時一條長方形深窟，四方由竹林圍住。傳說「豬母精」作祟，每遇黃昏後，若路經於斯者，不無提

心吊膽，而膽小者恐難過關；由此起緣有心人便於窟東南畔，在民國四十二年築圓光寺，供祀釋迦佛祖；另窟西北畔，在四十八年立春秋武廟，供祀關聖帝君，藉資佛與道之力，鎮壓一切不靖。

### 下竹圍

紙衣飛墜滿荊榛，下竹圍過易愴神；  
今日文明爭築屋，無妨近與鬼爲鄰。

清代屬大棟榔西堡，今朴子市竹圍、新寮、佳禾三里範圍圈內。爲市境中央地帶，面積最爲廣闊；三里部落正點綴於三角點處。北端以尖點處爲竹圍里、東南角點爲佳禾里、西南角點爲新寮里，有三點鼎足之勢。

東接大棟榔庄、西隔內荷苞嶼湖與崁後庄對峙、南隔外荷苞嶼湖與鴨母寮庄對峙、北界朴子街海通路。緣由於清末時移入拓墾於斯，乃擇幽篁處以竹籬茅舍，爲安居之所；一方藉竹林爲牆、可禦盜賊、或防強風，且取筍採竹材諸功能，頗爲一舉兩得，部落即成「下竹圍」稱。

乾隆末葉，變公派下三世黃百揆，自內厝庄移墾於斯；旋傳六房爲地方大戶。五房裔孫濬哲舉秀才、子國藩係外科名醫，並兼營糖廊致富；日

據初期任樸仔腳第三區長，未幾發生「樸仔腳事件」，被日憲警以通匪嫌疑軟禁，但全部家眷被屠殺罹難。民藝布袋戲師傅「石頭仔師」，為漏網之魚獲生，至光復後亡故。日據末期地方保正黃瑞龍，係百揆公後裔也。

開基廟「鎮安宮」，供祀五年王爺為守護神，乾隆年間由庄民王老食鳩資創建，至民國六十四年重建為堂皇廟宇，俗稱下竹圍五年王爺廟，主祭日八月十六日。部落南端為朴子第一公墓，在台島以佔面積最廣闊，民國七十四年經鎮長黃明樹，以大膽克服萬難，與活人及死人爭鬥中，完成清塚及公園化墓園興建工程，此座美觀綺麗之墓園將保留三分之一面積，於是歲十一月十一日啓用。

### 萬善廟

座落公園化墓園北端，將原於民國十年（日大正十年）所建之有應公廟拆除，稍後距五十公尺處興建新廟，即將廟宇與納骨堂均以擴建，藉以收納此次清塚所存無主骨骸，有所安居處所。

### 新寮

今朴子市新寮里，座落下竹圍最西南端部落，臨近內荷苞嶼西北畔。

緣由昔時原無部落可言，旋有人建「寮」於湖畔，漁獵或耕農維生，逐漸聚成部落因最末期所成，故稱「新寮」。開基廟「新福宮」，供祀范王與上帝爺爲守護神；光緒初葉由庄民張清釀資創建，至民前五年（日明治四十年）庄民張放養、鄭強故、黃鵝等改建，俗稱新寮廟，例年三月初三與六月十八日爲主祭日。史載有「土地公港」，究竟在今何處，依據口碑新寮庄面南端，稱謂「紅毛港」，是否？同一港異名，待考。

### 苦瓜寮

今朴子市佳禾里部分，座落下竹圍東南端部落，臨近外荷芭嶼湖東北畔。緣由於昔時先民建寮於湖畔，漁獵或耕作菜圃，所收成苦瓜量多質好，名聞遐邇，故名。民國廿四年（日昭和十年）新竹州大地主蔡燦煌，曠耕荷芭嶼，則委託簡金月偕龍潭、新埔、湖口一帶農民入墾；第二波又有永安，新屋之客家人助陣，及聚集有數十戶；每歲耕田可收二期作稻穀。開基廟「福安宮」，供祀土地公、土地婆及魏王爲守護神，民國二年（日大正二年）由李岸等倡建，原稱土地公廟，俗稱苦瓜寮廟。

同安寮、亦稱同鞍寮、亦名南坎

今朴子市佳禾里部分，座落苦瓜寮之東，外荷苞嶼湖內之沙嶼，爲湖中兩龍珠之一。據《諸羅縣志》載：「莊名，嶼內爲眾流所歸與港會，水面甚闊，捕魚者日可百餘人，別見水利」。今「大館」稱，緣由昔以大地主設「館舍」管理佃農及收租之處，故名。

### 荷苞嶼湖

荷苞嶼大水連天，藍鹿洲遊作記傳；

今日嘉南排水設，汪汪千頃變良田。

座落下竹園公墓南側，距街約二里許，嶼湖已不見，逐漸成良田，或池塘，中央貫穿一條嘉南水利會之荷苞嶼大排水，溝堤兩側較低窪，可尋探出痕跡。在康熙末葉，忽然瀦水成湖、周圍廿里；豪雨時，集鹿仔草，大糠榔、坑仔埔一帶之水，而注入湖中，然流入朱曉埤、與土地公港會合，故大旱不涸、捕魚者日百餘，廣闊湖水，水中洲渚，可容若干居民，成爲村落爲「荷苞嶼庄」。日據初期，太保庄王朝文（係王得祿提督九男）西席王棟梁，疏導牛曉埤、荷苞嶼，使嘉義地方下游、灌溉田疇、養殖淡水魚。

朱曉埤

座落大糠榔與馬稠後間，由荷苞嶼湖水所注成之埤；另稱「朱仔埤」。據民前一九五五年（清康熙五十六年）《諸羅縣志》水利篇載：「朱曉陂在外九庄大坵田，源由荷苞嶼大潭出、有泉，淋雨時，鹿仔草、大糠榔、坑埔之水，注大潭中，透至鬼仔潭止，大旱不涸，康熙四十三年管事同庄民合築。」

鬼仔潭 亦名桂潭

座落街東端與大糠榔之界，即今流經省立東石高級中學北側與西側，而注入荷苞嶼之一條大排水溝。昔時此潭甚至寬闊而水深，為樸街要赴縣城或大糠榔必渡之水，當年須經鹿仔草路，即今高明寺附設佛教徒公墓邊「高明橋」，每年在此溺死者不計其數，據說有厲鬼作祟，曾化為村夫邀請布袋戲到林投巷上演，故有此名矣。詩道：

朴子東邊鬼子潭，古來爭說鬼喃喃；

痴迷不解荒唐事，誤作含沙影射談。

大小糠榔

清代大糠榔堡之核心，座落街東端，東接新縣治、西連雙溪口、安溪厝、下竹圍諸庄，南隔荷苞嶼與馬稠後庄（屬鹿草鄉）對峙、北隔朴子溪與蒜頭庄（屬六腳鄉）對峙。

地名起源於先民入墾時，遍地荒野，前無大湖、後無高山，僅是一條彎彎曲曲，狀如神龍盤旋之大龍溝，貫穿於庄中，與莊名有關之糠榔樹更是杳然。此大龍溝據云鐘靈蘊秀，昔被遍地糠榔樹所覆蓋，先民入墾便聚居於斯，因開基於一大片糠榔樹間，故名大糠榔，而鄰近北端部落即謂小糠榔。

民前二八八年（明天啓四年）顏鄭拓台所闢十寨之一「大小糠榔庄」即指斯土也。民前二四七年（明永曆十九年）閩漳詔安人徐遠招佃開墾於此。（但涂姓開基祖廟沿革所載，係民前二三年即明永曆卅五年，自閩漳詔安仙堂荷仔埔社渡口之涂姓移民，涂遠等六房十八人所發現。）民前一九九年（清康熙五十三年）知縣周鍾瑄捐穀五十石，助庄民引牛稠溪水合築「糠榔庄陂」，為灌大小糠榔二庄之水利工程。

## 大糠榔

今朴子市大鄉、大葛兩里，因開發較早因此有幾座早期古廟，所供祀之神均為守護神。則有：「涂姓開基祖廟」，供祀媽祖，民前二二二年（清康熙廿九年）創建，歷經幾度演變，於民前七年（日明治卅八年）庄民涂大廣等醵資重建，主祭日三月廿三日。「育黎宮」，供祀城隍，民前一五〇年（清乾隆廿七年）創建。「福德祠」供祀福德正神，民前一五〇年（清乾隆廿七年）創建，祠邊立有民前一四八年（清乾隆廿九年）有關荷苞嶼石碑。「龍安宮」，供祀吳王，民前四一年（清同治十年）由涂賽、許吟、沈以等倡建。

### 小糠榔

今朴子市仁和里。開基廟「福安宮」，供祀元帥爺及五府千歲為守護神，民前九一年（清道光元年）由蘇某倡建，歷經幾度風水災，廟宇已損不堪，民前二年（日明治四十三年）由何蟬、王來旺、黃知高等醵資重建，俗稱小糠榔廟，例年四月廿四日、八月廿二日為主祭日。

### 雙溪口

清代屬大糠榔西堡，今朴子市雙溪、溪口兩里。座落街北端，東接小

糠榔庄，西隔朴子溪與占富厝庄（屬六腳鄉）對峙，南界大糠榔庄、北隔朴子溪與蒜頭、溪墘厝二庄（屬六腳鄉）對峙。地緣由朴子溪圍住北端與西側，亦東邊小糠榔有一條朴子溪支流荷苞嶼大排水向南流，故有如座落兩溪出口，故名之。

民前二一一年（清康熙四十年）閩泉南安人侯東興（東八），傳三房（岩、榮、國），及侯朝等，為雙溪口開基祖。清乾隆中葉，南安籍侯艷梅，傳二房，為雙溪口開基祖；侯集、傳三房（江、澤、弄），為官埔寮開基祖。

開基廟「石碼宮」，供祀林元帥（有三兄弟金身）為守護神，此神係侯姓移民自唐山「石碼宮」迎請分靈，民前八十年（清道光十二年）建廟，旋民前二八年（清光緒十年）由庄民侯桂仁、侯和主等重建，俗稱雙溪口廟，主祭日六月十二日。在下寮居民亦篤信林元帥，民國十年（日大正十年）立廟，仍額「石碼宮」，迎請林府副二元帥鎮座，至民國五十二年建新廟，主祭日六月十九日。

### 德化村、俗稱新結庄仔

今朴子市德興里，街東北端，東鄰大糠榔庄，西隔朴子溪與占富厝庄（屬六腳鄉）對峙、南接安福里天星新村、北界雙溪口庄。緣由在朴子溪北畔下雙溪庄，每逢颱風洪水頗受其害，如民國七年（日大正七年）八月朔夜半，風水襲擊災害慘重，并出人命；至廿二年（日昭和八年）七月洪水衝擊庄民生命財產受損慘重，地方長老前來朴子街，懇求黃媽典街長解救，便歸劃建村於斯，使有下雙溪庄民，求生安居之所，曰「德化村」，屬雙溪口庄轄，今存有宛然有序「棋盤通道」。開基廟「德安宮」，供祀保生大帝為守護神，於建村越歲民國廿三年（日昭和九年）立廟，俗稱新結庄仔廟。

### 鴨母寮

清代屬大坵田西堡，今朴子市竹村里。街西南端，東連竹子腳，東安寮二庄，西至龜仔港庄，南接南勢竹庄及樹林頭下庄仔（屬布袋鎮），北鄰炭前庄。緣源於嘉慶初葉，閩泉籍黃元渡台抵此建茅寮，以飼養鴨母為業，後來移民相繼入墾，以「鴨母寮」稱。開基廟「澤山宮」，供祀護國尊王、邢王為守護神；護國尊王係黃元之私佛，旋內渡便留給在庄民供拜，

於斯甚然顯靈，民前九年（日明治卅六年）庄民陳烏皮等修建，俗稱鴨母寮廟。民前廿年（清光緒十八年）創建「聖媽堂」，供祀三姑娘，主祭日六月廿二日，此神亦頗靈感。

### 過埤仔、亦稱張竹子腳

在莊西端，今竹村國民小學西邊，須越過極深埤水即到此，受竹林圍困，以張姓爲大戶，地名由此而來。民前十年（日明治卅五年）供祀山西夫子即關羽，如今未立廟藉集會所爲安座處。

### 龜仔港

清代屬大坵田西堡，今朴子市順安里。座落街最西南端，東接鴨母寮庄，西連貴舍庄（屬布袋鎮），南界樹林頭庄（屬布袋鎮），北鄰崁前庄。地名緣由，先民入墾聚落處，四周均被大小排水或埤塘困住，地形有如烏龜狀、有擺渡輸出入貨品，以港之名。

民前二八八年（明天啓四年）顏鄭拓台所闢十寨之一「龜仔港庄」即指斯土。民前二一七年（清康熙卅四年）所鑿「牛挑灣陂」，與民前一九六年（清康熙五十五年）所鑿「竹子腳陂」，此兩陂之水源，均出自龜仔

港。

開基廟「振安宮」，供祀邢王、土地公爲守護神，同治年間由蔡知倡建，民前三五年（清光緒三年）由徐祥、黃田、劉厘等改建；民前一年（日明治四十四年）修建，至光復後重建，額「順安宮」，例年八月廿三日、十月十五日爲主祭日。

### 崁前

清代屬大坵田西堡，今朴子市崁前里。座落街西端，東接鴨母寮庄，西連貴舍庄（屬布袋鎮）、南至龜仔港庄、北達崁後庄。地名緣由先民入墾於較高突深險地勢之前方而稱。

開基廟「福德宮」，供祀福德正神爲守護神，清道光年間創建。民前三七年（清光緒元年）地方發生瘟疫死亡慘重，居民祈願庇佑活命仍多，則建新廟謝恩，主祭日八月望日。供祀五府千歲「保安宮」，於民國五六年（清咸豐六年）創建，主祭日八月廿三日。

### 崁後

清代屬大坵田西堡，今朴子市崁後里。座落街最西端，東隔內荷苞嶼

湖與新寮庄對峙，西接貴舍半月（屬布袋鎮），南至崁前庄，北達應菜埔庄與港墘庄（屬東石鄉）。地名緣由先民入墾於較高突深險地勢之後方而稱。

開基廟「保良宮」，供祀吳王爲守護神，創建於清道光年代，俗稱崁後廟。

### 埔中央

座落崁前庄與崁後庄中間，地勢較緩平之野原處，故名，屬於崁後庄。

### 竹仔腳

清代屬大坵田西堡，今朴子市德家里。座落街中南部，東鄰新庄、西接鴨母寮庄、南界牛挑灣與南勢竹兩庄，北至鴨母寮。

地名緣由先民入墾聚落點，正在竹林之處，故名，俗稱吳竹仔腳。事實上庄之中央，貫穿南北中央公路，路界東側屬五鄰至十鄰，爲先民吳姓落腳根地，俗稱吳仔厝；而路界西側屬一鄰至四鄰，係先民陳姓所落根處，亦稱陳竹仔腳。

民前一九六年（清康熙五十五年），庄民在龜仔港北端，合築「竹仔

脚陂」，可灌輸附近一帶之田園。開基廟「關帝廟」，供祀關帝爺爲守護神，係先民入墾時隨身奉請來，旋建書房供祀外，亦供應學子讀書場所，民前七年（日明治卅八年）由庄民張富改建。

### 新庄

清代屬大坵田西堡，今朴子市新庄里。座落街東南端，東接馬稠後庄（屬鹿草鄉），西連竹子腳庄、南達牛挑灣庄、北隔荷苞嶼湖與苦瓜寮庄對峙。緣由先民入墾時落根點，因有前後成立村落，取意新立部落而來。

開基廟「北天宮」，供祀玄天上帝爲守護神，尚陪祀一尊由先民林姓自唐山隨身帶來「清大哥」金身；後來林姓之遺產均充爲廟香燈，始移祀廟內。清乾隆代由黃懋勇倡建小廟，至民前廿年（清光緒十八年）庄民吳堀、吳顯等醵資擴建，俗稱新庄廟，例年一月初六、三月初三、六月初十爲主祭日。

### 港仔墘

座落庄西端，爲入口處即頂角頭部落，周圍有窟在水邊而名。

### 新竹圍

座落庄南端，毗鄰後庄子（屬鹿草鄉）一小部落，周圍竹林亦是較遲開發而成，故名。

### 牛挑灣

清代屬白鬚公潭堡（按潭位置今鹿草鄉境，依民前一四八年清乾隆廿九年《台灣府志》載：白鬚公潭、在今頂下潭兩村之處），今朴子市松華、梅華兩里。座落街最南端，東接龜拂山，後庄子兩庄（屬鹿草鄉），西連南勢竹庄，南至東後寮庄（屬義竹鄉），北達新庄、竹子腳二庄。

緣由於先民入墾聚落地周圍均彎曲水溝，地勢形如牛隻拉犁時掛在肩部木頭之「牛挑」一般，故名。

開基廟「龍安宮」，供祀三山國王、五府千歲為守護神，早在民前五六年（明永曆十年）立一小廟，歷經幾度修建，於民前一二七年（清乾隆五十年）遷建於松華里現址，民前五年（日明治四十年）以震災復舊工程，由陳登財、翁知屎等董其事，俗稱生挑灣廟，例年六月初六、十月望日為主祭日。

依據「龍安宮」供祀三山國王，可推測早歲開墾斯土先鋒有客家人，

藉其手以筆路藍縷，完成首度雛形。清康熙年間，閩漳龍溪人陳有芳，分傳六房，其三房即入墾於斯；後裔振聲，精崎黃之術；登財，亦承衣鉢，旋出任區長、組合長，授佩紳章。

民前十三年（日明治卅二年）基督教傳播福音，在牛挑灣設教會，聚集揖子寮（屬東石鄉）、林內（屬六腳鄉）、樸仔腳、崁前諸地，遠道教友每禮拜日，皆跋涉數里許路程，前來崇拜心目中之上帝，可謂朴子區基督教傳道之發源地。

### 南勢竹

清代屬白鬚公潭堡，今朴子市南竹里。座落街最南端，東毗牛挑灣庄，西接樹林頭下庄仔（屬布袋鎮），南界下溪州與東後寮兩庄（屬義竹腳），北至竹子腳、鴨母寮二庄。地名緣由先民聚落點在竹林叢茂之南方一帶，故有此名稱。

民前二八八年（明天啓四年）顏鄭拓台所闢十寨之一「南勢竹庄」即指於斯。民前一九五年（清康熙五十六年）知縣周鍾瑄捐穀五十石，助庄民合築「樹林頭陂」，源由八掌溪尾出，長五六里誰許，可灌輸樹林頭，

南勢竹兩庄田疇園地。

地方守護神吳府千歲，係民國廿三年（日昭和九年）建廟，額「大華宮」俗稱南勢竹廟，主祭日九月望日。

### 附言

內載詩句係錄自朴子先賢楊爾材遺著《近樗詩草》之朴子竹枝詞二十首，楊氏有註其文曰：「朴子街市街改正古來之街名地名漸漸湮沒恐後人不知故以街名地名入詩以誌之。」

（作者：邱奕松。原文發表於《美哉嘉義》一書）

## (六) 王爺座談

疾風呼嘯之夜半，皎潔之月光而冷淡高懸於天空上，照亮著寂寞大地，夜闌人靜之街上已沉溺於陰森孤零之中。在此時刻，安溪厝王爺廟（在朴子國小對面），正在舉行一次守護街內各角頭神明座談會。聚集前來與會之神明，有當廟主人之池王爺外，尚有太子爺、何將軍、虎爺公、雷將軍、金王、林王、中軍爺、福德正神、城隍爺，有應公等眾神。凡有佔街內一席之地，被尊位神明而奉祀於廟宇，差不多，皆出席之列。

自廟內都流出熱鬧氣氛之聲音，使外面之人可以聽得見，諸眾神正是談得興高采烈似的。因難得一年一度聚集在一處，真是有說有笑，以七嘴八舌而談天說地，從未間斷話源帶來夜靜中之熱鬧氣氛。未幾，廟主人池王爺首先以主持人地位開言：

「各位！今夜如此寒冷之際，麻煩各位聚會並未有別之事，祇因近來街上一批青年輩，接受學校教育之後，逐漸運用其力量呼籲『爲何不除掉

廟宇不可！』、或『不打破迷信不可！』等緣由。」

「對此種問題之動態，便邀請各位共同磋商對策，藉以討論較爲適宜妥善辦法應對，免致此輩有所行動。假若真有行動恐對吾等名譽頗有所影響，尚且對吾等生存有所威脅。盼望各位盡獻替高見，商議一項最適當之處置方針，以免陷入絕境。」

正在此時刻，坐在旁邊之下灰礮保安宮主人邢王發言道：

「老兄！此種事應該是無多大問題！惟有藉著童乩出言，發出警告訊息而道：『悉聞最近一批青年輩，有意要毀滅各角頭廟宇，若是真有此行動，爾等必會遭受懲罰』，如此一來，彼等必不敢付之行動，而吾等生活，亦就可保得住焉。」

長長鬚鬚林王，便搖搖頭而道：

「此種辦法尚爲可行！但近來童乩可靠性頗受質疑，因有胡說亂道之行為，已引起街民對其信心動搖並有所轉變。若是藉用童乩而發，恐對吾等或將更慘遭之慮矣？」

「並無問題！方法頗爲簡單也！」

此刻聽見雷將軍即席大聲反問而道：

「爲無問題？却如今成爲吾等最嚴重之問題！爲何如此講耳？令人不解也！」

有應公則以輕鬆態度，頗有自信，續而答道：

「首先散播病菌於民間，使街民爲惡疫受痛苦；爾後患者必來求教保佑，屆時就可採用剛由邢兄所言，交由童乩向街民指點迷津，而發出警告曰：『爾等近聞有意搗毀所有角頭廟宇，令人非解？王爺便以病魔來懲罰爾等之不是也！』如此以來，彼等不但會驚慌起來，便不敢再有毀損之舉動，尚且更能比前進一步而信仰吾等神威，如此以來亦就可保得住吾等生存空間，必無問題矣！」侃侃而談其妙策。

眾神明聽取各自發言後，覺得此妙策頗爲妥善之方法，但正在此刻，側耳靜聽之長白鬚福德爺，則緩慢而發言：

「千萬不可也！雖是一種妙計：：：但諸位再慎思一下：：：如此散佈病菌加害街民確實良心過不去，卻有不妥之處，吾人絕對不贊成此策施。更想起吾等任務及保佑萬民，怎可目睹街民遭瘟疫痛苦之慘狀，真是萬萬

不得行也。假若真採取此法而行，想將來未必能得街民所敬仰，反而怨恨重重；且街上接受教育青年增多，逐漸開化進步，街民之智慧日益聰明。吾等雖在生時爲國爲民犧牲貢獻，逝世後獲得街民如此感念吾等功德，並立龐大壯麗廟宇，來紀念供祀吾等，應該對街民採取緩和善策開導爲宜。雖然昔時爲民不顧生命守護鄉境，但至如今，吾等已無法可施，最佳方法即吾等仍歸天庭，使每歲爲著吾等所耗盡龐鉅金錢，可用之於教育、衛生事業，或是生產上，如此以來吾等亦可安心在天庭享受萬地香煙。街上亦就更加繁榮，可謂一舉兩得之計也：：：不知吾見如何？諸位是否贊成吾見矣？」

條理井然而發，並撫摸著長長白鬚鬚望眾神一目，才慢慢而座下來，此時此刻「贊成！贊成！」之聲，絡繹不絕，眾神乃發自內心，覺得老前輩之言，頗有道理而異口同聲，喊叫出來也。

寒風使勁而的刮著深夜，窗戶震盪得「格格！格格！」作響聲，宇宙間正是充滿著，以蒼涼暗淡，且萬籟俱寂之間，熱鬧之聲音「哈！哈！哈！今夜真是頗愉快耳！」而傳聞至外面也。

（譯自日據時昭和九年朴子公學校編印《樸樹之蔭》）

## (七) 鼠疫傳染

乙未（公元一八九五年）馬關條約後，臺灣正由日本人開始統治，當時所有交通、水利、衛生等各方面設施，仍然非常簡陋。絕不像如今，科學進步，各方面設施非常發達，使眾人能過著很愉快而舒適之生活，當時醫學方面來說，實在是極不普遍且不充實，因此對於各地所發生之傳染病，亦就無計可施，束手待斃，使人人驚懼萬分，張惶失措，在此狀態之下，只有歸咎於鬼魔作惡。

當時，樸仔腳街（朴子）之衛生工作，事實上亦是無何種設施。僅有街上數間中醫藥房，負責診療工作。因此，對於傳染病之預防與醫療工作，以及公共衛生設施，真是無言可說。而且，街道之狹窄以及未普設排水溝系統，加上溪岸亦無堤防設備。雨季來臨，每年都會發生溪水氾濫成災之現象。同時，治安不力，時常有盜賊橫行四起，以致居民時到黃昏就緊閉門戶，無人敢於街道行走，鎮上有如死城一般。

時為防盜賊，家家戶戶都是以磚塊、石頭、土塊等，做為材料砌成一道厚牆，以備阻遏侵襲賊黨來臨。但是，併無考慮到，會影響住房光線與通風關係，致使房間內一片黑暗與陰溼，好似地牢一般。同時，在街道上，且有狹小而黑暗之「暗街仔」亦就是現在的配天宮媽祖廟前之東側一條巷街，乃是當時之遺跡。由此可知，在日據統治當初，雖派有日籍公醫，負責綜理一切地方衛生工作業務，但仍然無法對公共衛生工作，有何種之發揮與改革。當時居民對於一般衛生常識，亦極淺陋，對所發生之普遍傳染病，亦無法預防，短時間內要將其撲滅，亦相當困難。

明治卅三年（公元一九〇〇年），當平靜而向榮之樸仔腳街，竟被一件令人淒涼而恐怖之傳染病侵襲，此惡症係為聞名於國際醫學界之鼠疫病症，據傳它是由於當時，在東石港與我國大陸貿易，因船隻之往來頻繁，而從船舶貨艙內，所寄生之老鼠，所引起之病源。時物阜民安，居民亦不懂亦不介意於此一小靈精之傳佈，所以傳染越來越猖獗，此種置人於死地之恐怖，竟致釀成一大瘟疫。

首先發現三個患者之後，此後就在每年冬季期間，大肆流行著，因為

疫毒越來越深，且受害者亦就更眾。日本統治當局，爲此，亦著急萬分，乃化費十幾載心血，以克服各種萬難困境，而竭力於驅除撲滅工作，終於大正四年（公元一九一五年），以最後患者二名爲止，前後計達十六載期間之苦鬪，方撲滅淨盡。

依據有關資料記載，所列患者計達一千一百二十二。但根據遺老口言所透悉，在當時流行病症之樸仔腳街，以人口統計與自然人口增加率推算，其確實數字，可能超出幾倍。

當時，居民對於一般生習慣及常識頗爲淺陋，以及因討厭對消毒方法，及怕當局將自己房屋拆掉之心理作祟。當時因被拆掉房屋計達百餘間之多，而朴子街上最著名之源興樓亦遭被拆掉命運。在此情況之下，若在自己家中發現有患者疑義時，於是有所顧慮乃密而不宣將其隱瞞，類此情形亦不勝枚舉。但地方當局爲驅除鼠疫而拆除民房，對於整體朴子街容，却未加注意整頓一番，因此貫串於朴子中心地帶之彎彎曲曲開元路至今尤存，能不可嘆！

鼠族之流動性極爲廣泛，若果要全部將他剿滅，那真是一件困難重重

之大事。但眼見疫症之蔓延，而無法制止狀況下，給與居民之威脅，更加使恐慌異常，且給人提心吊膽，其淒涼氣氛，乃籠罩著整體之樸仔腳街。首先，來自溪仔底之居民趙某家，發生鼠疫患者而起，因其崇尚儒教，而純樸無知家人，乃不忍將患者隔離，且亦不知如何來消毒法，同時又缺乏醫藥，與不開明醫術，致使唯有一求神託佛來求治，結果仍然無濟於事，只有束手待斃而已。同時，亦有發生全家大小遭殃殆盡，而無人敢替收屍埋葬，置於不顧之悲慘事，竟有不少家戶。那一次鼠疫，真似閻羅王，操有生生死大權，有過之而無不及。

日本當局鑒於事態嚴重，對防疫工作乃採取緊急措施，以滅鼠為拯救方法；並截斷交通，翻掘地基，破壞房屋，剷除牆壁，捕捉老鼠，消毒衣服，隔離患者等等，而將房屋或有可能藏鼠之處，全部焚毀，以絕禍根。且將周圍全部用鋅板（亞鉛板）圍堵起來，以利捕殺老鼠，同時亦有隔離作用，至於大正七年（公元一九一八年）才將堵牆全部拆除。

鼠疫撲滅之後，為防遏再度發生，乃於東石海岸設防鼠壁，並配置一員防疫手為綜理一切業務。同時，於朴子街內，設置一所鼠族檢疫所，為

推行獎勵捕鼠工作業務，則以每隻老鼠給予日幣五錢或三錢不等之獎勵金，以便鼓勵眾人提高撲殺老鼠之工作興趣。在此一段相當時間內，頗收效果，依據昭和九年（公元一九二四年），於東石派出所轄內及朴子街一帶，所收買之捕鼠數量，有四千五百六十八隻之多。朴子所設之鼠族檢疫所，乃今朴子開元路之起端處，其遺址已改建為朴子國小教師新村，此件捕殺老鼠工作，一直執行至昭和十六年（公元一九四一年）方告一段落。由於各方面之重視與居民之覺醒合作，以積極之搏鬥精神，始能挽救在死海邊緣掙扎之眾人。

朴子鎮民眾，理應永遠不忘，此段慘痛恐怖之史實，亦屬空前絕後之浩劫。昔日從虎口救人，為撲滅疫魔而不顧危險，如今，應以前事可鑒，提高警覺，共滅鼠族，而共體為健康滅鼠等工作努力之醫官，警察人員以及防疫當局之苦心。

最後我們就所知的當時為朴子地區防疫出力醫師及地方人士概列於如後：臺北醫院院長倉岡博士、嘉義市勝田醫院院長勝田醫師、地方出身之西醫陳璧玉、鄭國樹、黃媽典諸醫師，及地方士紳黃連興、黃楷侯、黃慎

儀、蔡啓耀、陳添貴諸氏，其為地方出生入死服務精神實令人欽敬。

茲將當時鼠疫死亡情形分列如次：

明治卅三年	(民前十二年、公元一九〇〇年)	三人
明治卅四年	(民前十一年、公元一九〇一年)	一八三人
明治卅六年	(民前九年、公元一九〇三年)	七五人
明治卅七年	(民前八年、公元一九〇四年)	一九二人
明治卅九年	(民前六年、公元一九〇六年)	四一七人
明治四〇年	(民前五年、公元一九〇七年)	一一人
明治四一年	(民前四年、公元一九〇八年)	一四二人
明治四二年	(民前三年、公元一九〇九年)	八人
明治四四年	(民前一年、公元一九一一年)	一六人
大正元年	(民國元年、公元一九一二年)	二一人
大正三年	(民國三年、公元一九一四年)	五二人
大正四年	(民國四年、公元一九一五年)	二人
合計		一、一二二人

(作者邱奕松別號達梅 原文發表於第八期「嘉義文獻」)

## (八) 虞溪遷道

朴子溪的上游段原稱牛稠溪，而下游出口處昔稱爲猿江。現水流雖然溫柔而恬靜，但早年卻有一段奇妙而有趣的故事，且尚存有其痕跡。

牛稠溪發源於竹崎鄉後湖，長約七十一公里，溪流經嘉義市、民雄鄉、太保市與六腳鄉等境界，以至朴子流入東石港口。當時，進入朴子街內的水路，乃原朴子屠宰場經配天宮媽祖廟後面，繞過頂灰磘巡天宮王爺廟背後，再橫貫應菜埔而流出。此段今稱黎明路者俗稱溪仔底即爲當時溪床。

昔時，朴子溪的南畔，有一座奉祀媽祖的配天宮座鎮，而對峙的北岸，則有內厝莊民所敬奉，而歷史悠久的龍樹亭觀音媽廟。

兩岸居民每年夏季，均驚懼洪水爲患，沖毀堤岸。有趣的事情亦就是今年若是沖陷了南岸，那麼翌年必定毀塌了北岸。而南岸塌落時，北岸就浮起新生沙洲；北岸陷塌時，南岸就高浮起來。如此兩岸，每逢夏季，則良田變成溪床，而溪底就變成沃田，輪流交替著不曾間斷。

然而，有一年的夏季，連綿的豪雨，不斷的降落，造成了浩瀚的洪水，一片汪洋，水浪滔滔，眾人眼見水勢如此的，逐漸高漲，頗為擔心溪岸崩塌，必定會比往年厲害。本來今年應該輪到北岸的塌崩。南岸的居民因此較為放心，不過很怪的，就是塌陷下去的，竟然是南岸而不是對岸。一年過一年，接連四載，溪岸的崩陷，依然都是在南岸，溪水快要將樸仔腳全街，吞噬下去了。

街民惶恐，祈禱訴願，亦越顯得熱烈，且有瘋狂的狀態。到了第五年，南岸的田野，全部都變成了溪床，同時亦將配天宮媽祖廟剝落到溪中去了。街民驚怕所崇拜信仰的聖廟，將被無情的洪流所吞沒。

平時，潺潺細流而溫和可愛的朴子溪，點綴著樸仔腳風光，如今卻變成了惡魔似的，像殘暴的爪牙一般，正要粉碎著此純樸的街上。訴願禱告都歸無效，於是人心惶惶，議論紛紛，以為是不可克服的天災，有居民已準備避難的行動。

街上眾人集會磋商結果，首先要將媽祖聖像奉安於安全地帶。當時的廟宇，僅有對峙的觀音媽廟與此邊的媽祖廟而已，無疑的安全地帶，當然

對岸的觀音媽廟。於是要遷奉媽祖聖像到對岸，配天宮媽祖廟庭院，聚集了街上的信眾，正在鑼鼓喧天，熱鬧異常，要將聖像扶移到神轎上之際，媽祖顯靈似乎有了示意「不需遷移，鎮此守護本地」，可是眾人眼見水深危急，亦免不了疑信參半。

烏語花香的春季亦過去了，夏季接著來臨人間。談虎色變的濠雨，亦連下十幾日了，街上眾人亦紛紛開始逃避災難，認為水魔亦張牙舞爪，快將樸仔腳街淹沒下去了。雨水連日不曾間斷的下降，已有半個月了，街上白浪滔天，三日不見有退潮的徵象，街民覺得可愛的梓里，已無希望再留戀下去了，非遷移安全地帶不可了。可是第四日的黎明，水勢逐漸的轉弱而退下，竟未有絲毫的損害，反而內厝庄的北端，卻發見一道新生水路，將朴子溪河道變遷了，於是將內厝庄夾住於中間地帶，分成兩條溪流。

從此以後，配天宮媽祖廟後面所流過的溪床，因上流被沙石、樹枝、雜物等，堵塞著主流，乃逐漸的走向新生河道而流下，舊的溪道就逐漸的，積水不通而慢慢地變成爲池塘。後來的居民即將池塘填土蓋起房屋來了，尚有昔時的痕跡可尋，如今的朴子溪乃是昔時變遷的新生河道，而舊溪的

填塞，亦就將內厝莊接連到朴子街來了。

朴子詩人楊爾材「虞溪月」詩道：

朴子芳津碧一彎 水輪倒浸照潺湲

渾如牛渚興亡感 流水無情去不還

（作者邱奕松別號達梅 原文發表於第九期「嘉義文獻」）

## (九) 桂潭鬼話

在朴子街東端有一條狹長深溝，昔日流水清澈如鏡，俗稱潭。如今潭上橫掛著四座水泥橋，中間兩座均東石高中使用橋，而北端一座就是通嘉義，南端一座即通鹿草、另一座鐵橋為糖廠小火車使用。但往昔僅是木橋一座，係往大棟椰所必須橋樑；如今此一帶已成良田美園，并拓寬有外環道路，路旁均民屋大廈毗連。潭之東畔、即本地最高學府之東石高中，築有高樓巒宇、與堂皇大禮堂，儼然形成一處風景幽美之地。

昔日此一地帶，遍地雜草叢生、陰森恐怖，且荒蕪淒涼，傳說常有水鬼出沒作祟，所以一般都稱謂鬼仔潭。但今已稱「桂潭」名，較為順耳而清雅，大概意著保存一段昔時之傳說緣由耳。

樸仔腳東鬼仔潭、蓬蒿漏眼影毳毳；

爭傳鬼變成人狀、常入街中昌酒酣。

由詩句中亦可窺知其一二，水鬼不但常出沒於附近，尚且亦會往街上

買醉之說。相傳在鬼仔潭淹沒而死之亡魂，時常邀請布袋戲前來潭畔演戲，并約束演至黎明爲止，演者都不知觀眾皆是鬼魂，所謂演得興高采烈，仍不知演至何時，一幕演畢更接連下去，天還是尚未明亮。致使演員延續而演，終已精疲力竭，始聽見有雞啼聲音，此時刻忽然間一陣亂嘈嘈喊叫聲，一霎那之間，看戲者均已爭先恐後，爭向水裡而跳，逃得一乾二淨。演者頓時覺得莫明奇妙，定神一瞧始知身在鬼仔潭畔之林投巷底，嚇得真是魂飛魄散，不知如何是好，急忙中以緊急收拾離開於斯，此種事件便被傳揚出去。

心驚膽寒之眾街民，不僅爲著此事件之發生，抱著心情不安狀態，且每年均會發生在鬼仔潭溺水而亡，成替死鬼之事件。當年街民對鬼仔潭之鬼魂作祟，今人憂慮而有無能爲力之感，爲此街民皆爲因而不安，且連白晝間亦不敢走近一步至鬼仔潭畔，成爲一所禁忌之處。

有一年五月間，細雨朦朦、陰沉寧靜之深夜，街上每家却早已關門閉戶，正在此時刻有位青年阿漢，在此種沉寂恐怖所籠罩之黑暗裏，爲著趕急歸家之途，正巧走到爲眾人最忌諱之地——鬼仔潭畔橋邊。他在此時此刻

亦產生著，膽顫心驚，手腳皆軟，已無能為力而更走進一步之耐，聽見有奇怪聲音，好似在哀訴，亦如在號哭，更有嗟吁長嘆，所謂莫明奇妙之聲響，給青年阿漢，嚇得魂不附體，栩栩欲飛，為著要克服如此難關，不知如何為妙策，乃鼓足勇氣，勉強裝成若無其事一般，並壯膽而一路大聲喊叫、或唱歌，以匆匆前進，當走近橋端更要向前邁步之際，目睹前方竹籬間，「伊！伊！」響著，此種幽怨淒涼之銳聲，亦竹葉以「沙！沙！」擺動不停在作響。青年阿漢經過此種情景，在剎那間臉上亦一陣紅一陣紫，更成爲灰黑面孔，趕緊匍匐於橋頂，而爬越過即拔退，就一直拚命跑回家爲止。

家裡人眼見此種狀態，亦極爲驚異，連忙究明原因仍無法開口回答，最後只有動其雙手，在空中比手畫腳之各動作而已，而嘴裡却噤哩咕嚕，不知在講何言，總是說話不清楚。

「到底發生何事……你……」

經過一段時間，仍未反應，被急著兄長以大聲喊問，才氣喘吁吁而道：

「鬼……仔……」

以後聲音又依然模糊不清。

「到底在何處目見鬼仔？在鬼仔潭……平常就說，日落之後不應該走近該處！」

兄長頗爲震駭，並有所責備其不是，隔日青年阿漢，竟然發高燒動彈不得，僅躺於床上而爬不起床，此種事情終於被傳揚出去，更加好奇之街民，以爲紛紛談論之話題，大街小巷便成鬼話連篇矣。

甲道：「喂！你有聽見阿漢在鬼仔潭，遇見鬼魂之事實否？」

乙道：「唔！真有一事否？看見鬼仔潭之鬼仔？」

甲道：「撒謊何用也？確實有其事矣！」

丙道：「啊！吾亦曾聽聞有此事件，說是體軀頗高大，且伸出極長紅舌，引起吾鄰居亦爲此而驚慌不停。」

按丙家則居住在鬼仔潭鄰近不遠處，因此始有此言耳。

乙道：「鬼仔潭之水鬼，所謂再度淘氣起來！若不再以想妥辦法，藉資解決不可，譬如大拜拜普渡，或演幾場戲，恐難擺平而有平靜之佳日子過活矣！」

此事件發生之後，更加人心惶惶、戰慄恐懼氣息，已籠罩著全街上，雖然此間亦有勇敢青年，豪語而言：「真相如何？吾要赴鬼仔潭，探出究竟矣！」但只講聲音大，卻未見有所行動，仍是無人敢去之地步。正恰有位剛自學校畢業歸來青年，名稱陳義雄，是一位快活且性情剛強而大膽青年，頗為喜以逞強冒險之輩，他有志於臨場探睹其實況。

眾多街民對於陳青年此舉，均擋不住其行動，仍然不接受眾人善意勸告，決心以赴。是夜有頗多街民有意助一臂之力，有意要跟隨其後，但皆以一一拒絕，決意獨行其事，卻向鬼仔潭而前行。

街民一道：「喂！聽聞今夜青年阿雄，決意單獨前往鬼仔潭，要揭露出鬼魂之真面目！真有一事否？仍有此種傻勁之人物出現也！」

街民二道：「真有一事而去？若去注定會慘敗而歸，必將其嚇壞膽子不可耳。：：：此時刻可能已匍匐，嚇得魂不附體而逃回來之途：：？此人真是會說大話之輩！」

街民三道：「現今可能嚇得魂飛天外亦不一定耳？真所謂可憐虫之青年也！」

當晚將近十一點之際，自告奮勇獨行其事，以膽大包天之陳義雄，安然無恙則凱旋歸來，他右手提拿一條長白布，左手即執著紅布條。英俊勇敢之阿雄，便微微笑容而道：

「所謂鬼仔，亦就是此樣之真相也！」

溫和而出言，並極爲快活而「哈！哈！」大笑而起，眾街民亦目見如此情況，一時亦說不出話來，以茫然失措，而呆視著阿雄手中之物爲證實。

「誰爲搗蛋鬼呀？？」

眾人於臉上浮出一層疑問之神態。

（譯自日據時昭和九年朴子公學校編印《樸樹之蔭》）

## (十) 樸仔腳事件

民國前十七年（清光緒廿一年，日明治廿八年）馬關條約議定割讓台灣，即將台灣歸屬於日本為殖民地。島嶼人士獲知，一時譁然，愛國志士，誓死保衛鄉土，風起雲湧，浴血抗戰，決心不為異族奴隸，於是各地蹶起了義軍之組織，蜂起反抗日本帝國主義，給與日本當局頗多之困擾和犧牲，而台灣同胞為抗拒守土亦犧牲不少。

民國前十一年（日明治卅四年）底，台灣中南部因遭亢旱、風災、水災、蝗蟲害等，致使農民艱苦至極，而台灣最大一次之武裝抗日革命行動，也就接着在南路之樸仔腳（今嘉義縣朴子市安溪厝內）爆發，這就是日人所稱之「樸仔腳事件」（按當時發生事件地點即今之朴子市安福里一帶範圍）。

民國前十一年（日明治卅四年），被異族佔據已有五年之久，當時在樸仔腳附近，義民憤起，組織義軍以抗日閩之統治，由此逐漸擴充其組織，

藉資增加武力，以緊迫日本當局更加重之不安，於是日閩開始警惕與提防。首先，於當年九月，發生一件大坵田西堡圍仔內莊（即今嘉義縣東石鄉圍潭村），因義民首領吳文部屬奮勇殺死樸仔腳支廳巡查（警員）之事件。此後，各地義民更爲振奮，日間也結隊成羣攜帶武器出而示威，誓死對抗日吏。當時又有布袋嘴（今之嘉義縣布袋鎮）警察官吏，爲偵知義軍聚合於附近，乃率領巡查、妄查補及壯丁等前往圍剿，而反被義軍吳文、翁德成、黃茂松等之部下，所逆襲擊斃，死傷亦復不少。

因此，相繼而起之抗日事件，不斷之發生，並且揚言以不久之將來，即就大舉攻襲樸仔腳之革命行動，以紛紛傳出言來，更加使當地日籍人員，晝夜不安而提心吊膽；於是均不敢懈怠，一致以提高戒心和佈防，即戰戰兢兢爲以防萬一。

是年（日明治卅四年）十一月二十三日係新嘗祭之節日，公衙、學校、機關均放假之日。在黎明四時，慘淡之殘月，疲乏之微光，萬籟具寂之大，分外之沉寂，眾人尚在酣睡之中，突聞槍聲大作，驚破眾人之夢境。因來自南部十八重溪之義民領袖黃茂松、周岱、翁德生、吳艮腳、吳新欽

等，及雲林來之後大埔（今嘉義縣大埔鄉境內）義民領袖陳堤、簡施玉、賴福來、劉榮等，統率各地前來集結之抗日志士四百名；滙合潛伏之內應隊黃國鎮、林添丁、阮振等，以及樸仔腳義民首領陳大泉、黃海賊、陳守、陳善、陳大煩、張生蟲、張粗皮、施姜、吳出等，抗日志士二百六十名，合計達六百六十人之眾。

此晨，分作三隊以閃電式之姿態，出其不意之行動，由黃茂松總指揮，從樸仔腳之東南端安溪厝（今朴子市安福里）方面突入街上進攻，一時槍聲四起。義軍以黃茂松所率之主隊包圍支廳公衙；以陳堤所率之一隊向郵便局（按日人以郵政和電信業務合併也）攻擊；另有周岱所率之一隊襲擊支廳長官舍（按當時支廳長負責治安、政治、稅務等以一身）。

此時，守備在支廳公衙（按公衙廢址即今朴子開元路東端空地，周圍即為嘉義縣政府朴子宿舍，暫闢作配天宮香客停車場）之藤田警部補，被槍聲驚醒，即刻跳出室外探望，發現四面八方已被我義軍團團圍困住，始知事態嚴重，在此情況下也無可奈何，已知對外聯繫斷絕，而且義軍之槍聲，來自四方，齊向支廳公衙射擊，藤田警部補就聯合永山警部補共同抵

禦所有外來之攻擊。藤田也覺得境內區域遼闊，實在是難以防守，於是就縮小守備範圍，免得防守吃力。此刻，義軍攻勢越來越猛，日警已無法支持，乃不得不再退守至最後據點，因此就堅持嚴守廳舍內，決心抵抗，保守其陣地。

我突襲支廳長官舍及屬員宿舍之義軍，即將支廳長以下屬員及眷屬全部殺盡外，並將宿舍加以燒燬。據說當時義軍突襲支廳長官舍之際，庄崎支廳長正在睡眠中，被槍聲驚醒，便一躍而起，即將平時備置於枕頭邊之武士刀緊握著，勇敢揮刀對抗衝入舍內之義軍，以一決生死，但孤掌難鳴，當場就在義軍之槍火下，飲彈而亡，可謂是一位盡忠職守之異國官吏。

攻襲樸仔腳郵便局之義軍，首先將對外通信之電話線路全部切斷，隨即衝進局裏，先將電話機破壞，並將一切文件加以燒燬，最後才將抵抗之宮下局長及屬員、眷屬全部格殺。鈴木公醫也在其宿舍裏，死於義軍槍下，還有雜貨店之日商安藤源助亦被殺死於安溪厝道路上。

義軍以另一隊攻襲樸仔腳公學校宿舍（即今朴子國民小學前身，校舍即利用安溪厝王爺廟內，宿舍在廟邊），因日籍教師，平素爲人和氣，頗

得地方家長及學生之好感，早就接報消息避難，倖免得一死。據當時首任校長小泉順自述傳「小泉校長遭難記」（按此篇錄於朴子公學校師生編輯「樸樹之蔭」油印本），即述「樸仔腳事件」之始末，其中文道：「當時同事尚有教諭佐分利山三，與岡辰三郎兩人，事件發生前夕，彼等正興高采烈，準備翌日休假要前往郊野打獵，為整理打獵用具之際，幾位青年進來警告彼等說：明日不可外出，恐有生命危險等語。彼等也不以為意當即就寢，至黎明時刻被槍聲所驚醒，始知事態嚴重，此時來了學生家長告知義軍（日人稱土匪）攻入街上，已危急萬分乃為引路保護逃出險境。渡過了牛稠溪（朴子溪原名）經田寮（今嘉義縣六腳鄉更寮村之部分）抵達崩山（今嘉義縣六腳鄉崩山村）之郊野，在甘蔗園內避難；如此逃亡一日歷經生死關頭，以九死一生中而得救。可見身為教育者居心善良，亦在義民於激昂中能明是非有以致也。

我義軍另派四十餘名，向塭仔警察派出所（塭仔即今嘉義縣東石鄉塭仔村，派出所已廢）進攻，中途就與派出所吉田巡查所率應援隊，正欲趕來樸仔腳救援之一隊壯丁遭遇，雙方進入肉搏戰，在槍林彈雨中，義軍奮

勇戰鬥而打退日方，並乘勝追擊至塹仔派出所將內部搗毀。

在此時，盤踞支廳公衙裏之藤田警部補等人，已獲得了各方告急情勢之消息，甚爲着急。於是，擬定即刻以分批出動，藉資救援支廳長官舍和郵便局等處；但又感及力量單薄且被義軍團圍困住，自知以寡不敵眾實難突破重圍，那敢輕舉妄動。當時，又得知庄崎支廳長以下屬員及眷屬全部遇難之噩耗。於是，堅守支廳公衙而不退，奮然誓守一決雌雄之氣慨；我義軍乃以全力齊向支廳公衙猛烈進攻，一時義軍聲勢頗大，日方已面臨四面楚歌之威脅，正是危急萬分之際，有一名義民，不幸中了日方槍彈而倒下，一時反而秩序混亂，義軍之攻擊受阻，不敢再前進反而退却於是逐漸放寬包圍陣容，因此日方即幸免於全軍覆沒之虞；亦因其精銳之武器，及其充實之彈藥，乃以拼命抵禦，當時義軍進退兩難，形成了雙對峙的局面。

因樸仔腳支廳被義軍襲擊之告急消息，已傳抵布袋嘴官方；當地派出所官吏及分遣隊隊員，即刻動員武裝組成了救援隊，急赴樸仔腳支援。經過粟子崙（即今嘉義縣東石鄉東崙、西崙一帶），鴨母寮（即今嘉義縣朴

### 樸仔腳事件

子市竹村里一帶）兩派出所時，也會同了當地巡查聯合進發。於當日下午三時三十分抵達下竹圍庄（即今嘉義縣朴子市竹圍里一帶），和正面據守樸仔腳南端之義軍交鋒，一時激戰至爲劇烈。亦有新營分遣隊與鹿草分遣隊，及當地派出所也組成了聯合救援隊，由鹿草公路向北推進，接近大槲榔（即今嘉義縣朴子市大鄉、大葛里一帶）附近，也遭遇了義軍之抵抗，一時戰況甚爲激烈。且來自嘉義方面由嘉義守備別役中尉所指揮之一隊，及警察課長指揮下之一隊，以聯合趕赴樸仔腳支援。於樸仔腳東方遇到了我最優勢之主力軍，雙方發生激戰，以相持不下；因義軍士氣旺盛，驍勇善戰，以堅守抵禦。而日方則以精銳武器，緊急須將被困住之支廳官吏解圍，即展開最猛烈之砲火，展開了一場之白熱戰。未料，日方即遭遇了義軍如此之頑強抵抗，真是萬分喪膽；因此，日方即改變策略，其攻擊戰術乃由江本課長屬下之一隊，直向義軍守備最薄弱之東北端突襲，衝進支廳公衙之日方陣地。另有別役中尉屬下之一隊也衝破了重圍，餘外之日方援軍也相繼進入，時我義軍佔領樸仔腳已達十二小時之久。而日軍不斷增援，第三旅團之援兵也陸續抵達，經過了一日之激戰，義軍見目的已達，於是

毅然棄守，從容向西方應菜埔（即今嘉義縣朴子市永和里一帶）撤退，日方追蹤攻擊，義軍即以漸戰漸退至港墘庄（即今嘉義縣東石鄉港墘村），時已黃昏，周圍皆是甘蔗園，日軍即不敢戀戰退回樸仔腳本部。

事件發生後，日本當局，至為憤恨，開始搜索樸仔腳街行動，大事屠殺無辜街民，都以資匪、通匪之罪名處決，犧牲者達數十人之多。筆者外曾祖為一飲食攤販，亦是以資匪罪嫌被殺，成為冤枉慘死；另有大糠榔區長黃國藩，以暗中支援義軍之嫌，被誘捕於支廳公衙後，將其住宅包圍，所有厝內全家大小三十四口一律屠殺，其冤枉無辜，慘絕人寰；日軍之野蠻殘暴，實令人髮指。

是年十二月十日，日方糾合嘉義、台南、鳳山、阿猴（屏東市）、蕃薯寮（高雄縣旗山鎮）等六廳之警察，組成搜索隊，普遍而澈底的搜索山區地帶。義民領袖黃茂松率眾與戰，陣亡於放弄山寨。十二月十七日，又有黃國鎮、林添丁等舊部三百餘眾，決定於竹頭崎（今嘉義縣竹崎鄉竹崎村一帶）會師，被日軍憲警聯合所編成之大隊偵知趕來圍堵，迎戰於牛稠溪畔（係朴子溪原名），擊斃日軍亦不少。日軍退却後，義軍便分返後大

埔（今嘉義縣大埔鄉大埔村一帶）及凍仔腳（今嘉義縣中埔鄉中崙村）基地，各自謀生，樸仔腳抗日戰役，至此告一段落。後來日本當區為追悼庄崎支廳長等日人，即於支廳舍遺址後面沙丘上，立碑二基為亡者悼慰，且每年事變之日舉行祭典，直至日本投降台灣光復，日人遣歸，祭祀才停止；此兩基石碑已廢（遺址在嘉義縣朴子市公教人員福利中心）。

日據初期，抗日事件，此伏彼起，彰化鹿港愛國詩人洪棄生有感賦詩道：

驚天驀地起兵戎，閩左繁華瞬息間；  
喧路鸛鵝同上祭，失家鷄犬異新豐。  
蔓煙無復炊煙綠，燐火猶疑燹火紅；  
舊日樓台何處認，亂埋殘瓦夕陽中。

（作者邱奕松，原文發表於第五期「嘉義文獻」，與第五四九期「民間知識」等，并加以重訂）。



## (士) 王得祿

王得祿字百道，號玉峯，清乾隆三十五年五月二十一日生於臺灣諸羅溝尾莊（即嘉義縣太保市）。先世居於江西南城，曾祖王奇生於康熙六十年朱一貴之亂，以千總渡臺征伐，遂遷諸羅，後陣歿於鳳山，賜恩騎尉。得祿少失恃，長嫂許氏育之，後來特請追封一品夫人，長兄追贈振威將軍。得祿年十五入武庠，乾隆五十一年林爽文起事，彰化、竹塹（即新竹市）諸城相繼被陷，臺灣中北部幾陷落爽文之手，逮年冬天以正正之旗率領大軍攻諸羅，掘崩城壁，亂衝城內，遂被陷。

得祿走府城（即臺南市）乞師，遂募義勇五百以待，隨總兵柴大紀赴戰，復諸羅守之，然敵勢日漸加強，諸羅被圍愈密，成四面楚歌之狀態，援兵未至，加以連日豪雨，河水氾濫，病死者日增，兵器火藥漸缺，亦無可得食，城民唯掘樹根，煮豆粕，以充饑，人民之悲慘莫可言狀，然在此茹苦含辛之中，城民守志益堅，死守達十個月間，得祿在此屢次率軍出城

應戰，實達三十三次，故上官認其勇敢異常，信任加重。

乾隆五十年十一月大學士陝甘總督福康安任征討使，領兵登陸遂復鹿港、彰化，進兵諸羅，爽文率眾數萬，險據牛稠山，布陣以待，諸羅城民得悉軍即來，得祿就率義勇衝出重圍以取聯繫，爽文轉戰各地遁大里杙，築土城高壘，列巨礮沿溪置卡，以拒清軍，康安至此併力搏戰，爽文不敵，挈挈走集集，築壘溪礮，斷木塞道，列營山上，率眾據守，遂破堅壘，爽文乃竄內山，康安以犁庭掃穴，長驅直入平之，得祿從戰有功，賞戴花翎，任千總，乾隆五十八年娶范夫人，翌年遷居祖國。

當時，閩粵海上一帶，海寇出沒，以蔡牽、朱潰爲首，劫船越貨，商務阻遏，且沿岸民眾受累掠禍，日夜不安，於是得祿隨從銅山營參將李長庚，掃蕩海寇。嘉慶五年春，長庚爲福建水師提督，一意剿盜，而得祿與邱良功爲之輔。十一月回省，旋率兵艦出洋，時有斬獲，以功晉級，九年十一月，任澎湖水師副將，而澎湖爲臺之門戶，孤懸海上，功易難守之不利據點，時牽有窺臺之意，乃籌守備，對軍實，築砲臺，以防侵擾。十年春果然賊魁牽至，入虎井嶼，將登岸，得祿禦之，十一月牽入鹿耳門，勾

結陸盜，攻圍府治，得祿隨長庚赴剿，牽沈舟以阻，而自屯岸上，得祿自駕小舟入與鎮道會商剿圍之策，既迫，始奮擊之，牽揚帆欲遁，得祿揮舟堵截，大敗海寇，牽以是氣奪，然猶據險要，後牽屢次橫行海上，得祿赴剿，十三年春詔任浙江提督，總領閩浙兵船，六月調福建水師提督。

嘉慶十四年八月，得祿會浙江提督邱良功剿牽等於定海漁山沖，牽勢已蹙，遂欲遁走外洋，得祿恐其復逸，指揮閩浙各船遏之，作殊死戰，篷牽相糾，賊以鈎浙舟，矛貫良功之腓，浙舟毀綻脫，而得祿之船復迫之，轉戰良久，濺血遍野，時得祿負傷右額，猝倒再起，大呼殺賊，牽知大敗，自沈其船，與妻子同歸於盡，餘賊相繼投海或降服，此十餘年間，荒掠海上，苦楚官民之海寇，始能一網打盡，斷絕踪影，捷聞，詔封二等子爵，賞戴雙眼花翎。

道光元年春，調浙江提督，翌年六月，多年伐海寇，心身過勞，以病乞回籍，捐運津米，並倡修鳳山縣城，奉旨交部優敘。七年八月入覲，旋閩後，寄家廈門，時聞諸羅張丙起事，南北俱動，殺害官民，掠劫財貨，島民驚慌，乃募義勇五百，隨水師官兵至樸仔腳（即朴子市），征伐匪賊，

十二月遂捕首魁，始得平靜，爲助戰有功，詔加太子少保銜，得祿見諸羅城垣，爲張丙所蹂躪，倡議重修，築砲壘，並建義倉，儲穀二萬石，預備兵荒之用，並倡學問，設塾獎勵教育，居鄉時頗有義舉。

道光十八年沈知等起事於諸羅，得祿三次剿匪得功，詔加太子太保，二十一年英人之役，以七十二高齡奉命駐防澎湖，盡職過勞，遂於十二月二十八日歿於防地。得祿一生忠誠始終一貫，值得後世之景仰。翌年三月清帝賞其功績，追贈伯爵，加太子太師銜，謚果毅，賜祭。有子十，長子朝綱，任山東濟東道；次子朝綸，候補員外郎。得祿後裔，今尚居嘉義縣朴子市者在配天宮前懸壺濟世之王國隆醫師也。王得祿墓丘位於嘉義縣新港鄉蕃婆莊（今改爲安和村），墓域達一甲之廣闊，墓前立著幾十石人像，使後世之人見之能追憶其生前偉大之功德。

嘉義詩人蔡水震有「王得祿墓」詩道：

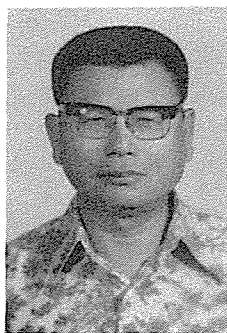
曾驅海寇策奇功，深沐恩波片碣隆。

一品榮褒酬老嫂，畢生勤盡遂初衷。

尖風細雨迷翁仲，蔓草荒烟臥牧童。

蓋世勳名餘巨塚，番婆郊外弔英雄。

## 編者簡介



邱奕松，字達梅，號麟翔、懷德、丘永青，法號宏公居士。朴子市人，民國十七年生。台南師範、嘉義師專、革命實踐研究院出身。從事教育工作半世紀，自指導員（竹村）、小學教師（大同）、教導主任（過溝）、校長（龍眼、貴林、大鄉、塭港、更寮）等，膺選兩屆六腳鄉教育會理事長。受領一等服務獎章、荐舉全省工作模範、列入杏壇芬芳錄等殊榮。被舉全國教育界代表出席首屆亞太教育研究會暨韓中教師研討會，並列席全日教聯教育大會。因車禍大難不死以榮退在野，養生之道專心致力於鄉土史，偶爾僑居溫哥華，浪跡天涯。著有《嘉義縣志卷四教育志》、《美哉嘉義》、《樸雅詩存》暨十幾冊地方文獻作品，以及不勝枚舉文獻論文；現今正忙碌《朴子市誌》編纂工作。

# 樸樹の蔭

編著者 邱奕松

發行者 朴子公創校百年紀念會

後援者 朴子國民小學暨家長會

輔導者 嘉義縣政府

印刷者 華生印刷社

地址 朴子市市西路一〇號

電話 (〇五) 三七九一五八八  
三七九六七八九

中華民國八十四年仲秋

工本費一百二十元  
發行數一千冊

523.82  
7704

國立教育資料館



F0042200